

# **日本語諸方言におけるラ行五段化の 方言間比較と通方言的一般化**

## **—語幹末母音・語幹モーラ数・接辞の観点から—**

2019（平成31）年度 入学  
言語・文学専攻 言語学専修  
宮岡 大

2021（令和3）年1月 提出

## 要旨

本論文では、日本語諸方言における「ラ行五段化」という現象について、方言間比較を行うことによって通方言的に一般化する。実際に観察される方言間バリエーションを記述し、可能なパターンと不可能なパターンを予測できるモデルを、階層の形で提示する。

「ラ行五段化」とは、現代日本語諸方言において、母音語幹（上一段・上二段・下一段・下二段）動詞が、子音 **r** 語幹（ラ行五段）動詞と同じ形態論的振る舞いをする（表の太字部分）ようになる通時的現象である。

表. 宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形と基底表示（筆者データ）

		語幹	否定非過去		過去
子音語幹	ラ行五段	togir- 「削る」	<i>togiran /tогir-a-n/</i>	<i>togitta /tогir-ta/</i>	
母音語幹	上一段	oki(r)- 「起きる」	<b><i>okiran /окir-a-n/</i></b>	<b><i>okita /оки-ta/</i></b>	
	下二段	usite- 「捨てる」	<i>usiten /усите-n/</i>	<i>usiteta /усите-ta/</i>	

表には、尾前方言の動詞語幹クラスのうち、子音語幹と母音語幹の語形を示している。母音語幹のうち、表中の上一段語幹「起きる」の過去形と否定非過去形に着目する。過去形は、下二段語幹「捨てる」と同様に、語幹/oki-/ に過去接辞/-ta/ が後続する。一方、否定非過去形は、ラ行五段語幹「削る」と同様に、語幹/okir-/ のいわゆる未然形/okir-a/ に、否定非過去接辞/-n/ が後続する。ラ行五段化は、否定非過去形にみられる、母音語幹がラ行五段語幹と同様の形態論的振る舞いをする現象を指す。

尾前方言の上一段動詞では、否定非過去形はラ行五段化するが、過去形はラ行五段化しない。このように、ラ行五段化は母音語幹の語形全てにおいて生じるものではない。さらに、ラ行五段化が生じる条件は方言ごとに異なっている。

本論文では、ラ行五段化の方言間バリエーションを記述するとともに、ラ行五段化が通方言的にあるパターンに沿って生じることを、(I)(II)のように階層を用いて示す。

(I) ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化

- a. 語幹末母音: /i/ > /e/
- b. 語幹モーラ数: 1 モーラ > 2 モーラ

(II) ラ行五段化に関する接辞の一般化

意志 > 否定非過去 > 過去

本論文では、(I)(II)の階層が成立する動機を、語形の使用頻度とラ行五段化の通時的变化過程から説明する。前者については、(I)(II)の左から右へ語形の使用頻度が低い順に並んでいることを論じる。後者については、(I)(II)の左から右へラ行五段化が通時的に進行していると考えて矛盾がないことを論じる。

## 目次

要旨 .....	i
目次 .....	ii
1. はじめに .....	1
2. 日本語諸方言の形態論的前提 .....	3
2.1. 基底表示と表層表示 .....	3
2.2. 語・接語・接辞 .....	4
2.3. 語根・語幹・語基 .....	5
2.4. 動詞語幹クラス .....	6
2.4.1. 子音語幹 .....	6
2.4.2. 母音語幹 .....	6
2.4.3. 変格活用語幹 .....	8
2.5. 動詞屈折形態論 .....	9
2.6. データの表示方法 .....	9
3. 問題の所在 .....	11
3.1. 「ラ行五段化」とは何か .....	11
3.2. ラ行五段化の方言間バリエーション .....	12
3.2.1. 尾前方言（宮崎県、筆者データ） .....	12
3.2.2. 九重町方言（大分県、糸井 1964） .....	14
3.3. ラ行五段化の地理的分布 .....	15
3.4. 各方言区画におけるラ行五段化の先行研究 .....	16
3.4.1. 通方言的研究 .....	16
3.4.2. 九州方言 .....	17
3.4.3. 四国方言 .....	19
3.4.4. 雲伯方言 .....	20
3.4.5. 近畿方言 .....	20
3.4.6. 東海方言 .....	21
3.4.7. 東北方言 .....	21
3.4.8. 本節のまとめ .....	21
3.5. 調査方法・調査内容 .....	22
3.6. ラ行五段化形式の形態構造の共時的分析方法 .....	23
3.6.1. 2つの共時的分析方法と本論文の分析 .....	23
3.6.2. 命令形の共時的分析方法：命令形の変化 .....	27
3.7. ラ行五段化の通時的变化プロセス .....	28

3.8. 第4章以降の構成と論点 .....	29
<b>4. ラ行五段化現象がみられる地域と一般化のデータ .....</b>	<b>31</b>
4.1. 九州方言.....	31
4.2. 四国方言.....	33
4.3. 雲伯方言.....	34
4.4. 近畿方言.....	35
4.5. 東海方言.....	37
4.6. 東北方言.....	38
<b>5. ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化 .....</b>	<b>39</b>
5.1. 語幹末母音の一般化.....	39
5.1.1. ラ行五段化に関与しない場合 (パターン A) .....	40
5.1.2. 語幹末母音が/i/ の語幹 (パターン B) .....	40
5.1.3. 語幹末母音が/i/, /e/ の語幹 (パターン C) .....	41
5.1.4. 「i/u 語幹」「e/u 語幹」の扱い .....	42
5.2. 語幹モーラ数の一般化.....	43
5.2.1. ラ行五段化に関与しない語幹 (パターン a) .....	43
5.2.2. 1 モーラの語幹 (パターン b) .....	44
5.2.3. 1 モーラ・2 モーラの語幹 (パターン c) .....	44
5.2.4. 一般化の対象外とする語幹モーラ数: 3 モーラ以上 .....	45
5.3. 先行研究との比較.....	46
<b>6. ラ行五段化に関する接辞の一般化.....</b>	<b>47</b>
6.1. ラ行五段化に関与しない場合 (パターン α) .....	48
6.2. 意志 (パターン β) .....	49
6.3. 意志・否定非過去 (パターン γ) .....	49
6.4. 意志・否定非過去・過去 (パターン δ) .....	50
6.5. 一般化の対象外とする接辞.....	51
6.5.1. 命令接辞.....	51
6.5.2. 否定過去接辞.....	51
6.5.3. 連用形に後続する接辞.....	52
6.5.4. 使役接辞.....	52
6.6. 先行研究との比較.....	53
<b>7. 命令形の変化.....</b>	<b>54</b>
7.1. 語幹末母音に関する一般化.....	54
7.1.1. 命令形の変化に関与しない場合 (パターン A) .....	55
7.1.2. 語幹末母音が/i/ の語幹 (パターン B) .....	56
7.1.3. 語幹末母音が/i/, /e/ の語幹 (パターン C) .....	56

7.2. 語幹モーラ数に関する一般化.....	57
7.2.1. 命令形の変化に関与しない語幹（パターン a） .....	58
7.2.2. 1 モーラの語幹（パターン b） .....	58
7.2.3. 1 モーラ・2 モーラの語幹（パターン c） .....	59
<b>8. 記述的一般化に対する理論的解釈.....</b>	<b>61</b>
8.1. 使用頻度の反映.....	61
8.1.1. 動詞語幹.....	62
8.1.2. 接辞.....	63
8.1.3. 本節のまとめ.....	64
8.2. 通時的变化過程の反映.....	65
8.2.1. 福岡県福岡市方言 .....	66
8.2.2. 佐賀県旧富士町北山方言.....	67
8.2.3. 熊本県天草郡方言 .....	68
8.2.4. 島根県旧簸川郡方言 .....	69
8.2.5. 大阪市方言.....	71
8.2.6. 奈良県吉野郡方言 .....	72
8.2.7. 和歌山県旧西牟婁郡方言.....	73
8.2.8. 新潟県南蒲原郡方言 .....	74
8.2.9. 本節のまとめと課題.....	75
<b>9. おわりに.....</b>	<b>76</b>
9.1. ラ行五段化研究における本論文の位置づけ .....	76
9.2. 残された課題 .....	77
9.2.1. 一般化の対象外とした動詞語幹・接辞 .....	77
9.2.2. 考察の対象外とした動詞語幹 .....	78
<b>Appendix1. 本論文における音素表記.....</b>	<b>79</b>
<b>Appendix2. 記述的一般化に用いたデータ .....</b>	<b>93</b>
<b>参考文献.....</b>	<b>110</b>

# 1. はじめに

本論文では、日本語諸方言（九州方言・四国方言・雲伯方言・近畿方言・東海方言・東北方言）における「ラ行五段化」という現象について、方言間比較を行い、その上で通方言的に一般化する。「ラ行五段化」とは、現代日本語諸方言において、母音語幹（i語幹・e語幹・i/u語幹・e/u語幹）動詞が子音r語幹（ラ行五段）動詞と同じ形態論的振る舞いをする（表の太字部分）ようになる通時的現象である。

表1. 宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形と基底表示（筆者データ）

	語幹	否定非過去	過去
子音語幹 r語幹	togir- 「削る」	<i>togiran /tогir-a-n/</i>	<i>togitta /tогir-ta/</i>
母音語幹 i語幹	oki(r)- 「起きる」	<b><i>okiran /okir-a-n/</i></b>	<i>okita /oki-ta/</i>
e/u語幹	usite- 「捨てる」	<i>usiten /usite-n/</i>	<i>usiteta /usite-ta/</i>

表には、尾前方言の動詞語幹クラスのうち、子音語幹と母音語幹の動詞語形を示している。母音語幹のうち、i語幹動詞「起きる」の語形に着目する。過去形は、e/u語幹「捨てる」と同様に、語幹/oki-/に過去接辞/-ta/が後続する。一方、否定非過去形は、r語幹「削る」と同様に、語幹/okir-/に語幹母音/-a/が後続した/okir-a/に否定非過去接辞/-n/が後続する。ラ行五段化は、「起きる」の否定非過去形にみられる、母音語幹が子音r語幹と同様の形態論的振る舞いをする現象を指す。

尾前方言の母音語幹のうち、i語幹はラ行五段化するが、e/u語幹はラ行五段化しない。加えて、i語幹動詞について、否定非過去形はラ行五段化するが、過去形はラ行五段化しない。このように、ラ行五段化は、母音語幹動詞の語形（動詞語幹+接辞）全てにおいて生じるものではない。さらに、このようなラ行五段化を引き起こす条件は、方言ごとに異なっている。

本論文では、実際に観察される方言間バリエーションを記述し、可能・不可能なパターンを予測できるモデルとして、(1)(2)の階層を提示する。

- (1) ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化
  - a. 語幹末母音: /i/ > /e/
  - b. 語幹モーラ数: 1モーラ > 2モーラ
- (2) ラ行五段化に関する接辞の一般化  
意志 > 否定非過去 > 過去

本論文では、(1)(2)の階層が成立する動機を、語形の使用頻度とラ行五段化の通時的变化過程から説明する。前者については、(1)(2)の左から右へ語形の使用頻度が低い順に並んでいることを論じる。これによって、(1)(2)の階層は、語形の使用頻度という通方言的な基盤によって動機づけられた一般化であることを主張する。後者については、(1)(2)の左から右へラ行五段化が通時的に進行していると考えて矛盾がないことを論じる。

本論文の構成は以下のとおりである。§2では、本論文における言語学的な前提を導入する。§3で

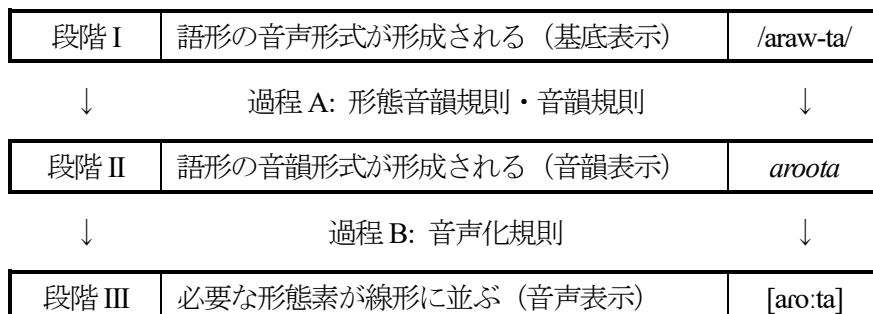
は、本論文が対象とするラ行五段化という現象について、問題の所在を論じる。§4では、それぞれの方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。§5-6では、ラ行五段化が生じる条件を方言間で比較し、通方言的に一般化する。ここでは、それぞれの方言におけるラ行五段化について、関与する動詞語幹と接辞の条件を一般化する。§7では、命令形の変化形式について、関与する動詞語幹を一般化する。§8では、一般化の理論的解釈として、一般化が成立する理由を、語形の使用頻度と通時的变化過程から説明する。

## 2. 日本語諸方言の形態論的前提

本章では、日本語諸方言における形態論の前提を導入する。形態論 (morphology) は、語の内部構造や語形成を対象とする理論分野である (Bauer 1985, Haspelmath and Sims 2010 など)。§ 2.1 では、基底表示から表層表示を派生するプロセスを論じる。§ 2.2 では、語・接辞・接語という概念の定義を論じる。§ 2.3 では、語根・語幹・語基という概念の定義を論じる。§ 2.4 では、日本語諸方言における動詞語幹クラスを論じる。§ 2.5 では、日本語諸方言における動詞屈折形態論を論じる。§ 2.6 では、例文の表示方法を論じる。

### 2.1. 基底表示と表層表示

本節では、基底表示から表層表示を派生するプロセスを論じる。宮崎県椎葉村尾前方言における動詞語幹/awar-/「洗う」の過去形を例に、図 1 に示す。



**段階 I** では、最終的に形成しようとする語形に必要な形態素が線状に並び、語形の基底表示 (underlying representation) が形成される。例えば、動詞語幹/awar-/「洗う」の過去形を形成する場合、動詞語幹/awar-/ と過去接辞/-ta/ が線状に並ぶことによって、語形の基底表示/awar-ta/ が形成される。この基底表示に対して、形態音韻規則や音韻規則が適用される過程 A が行われる。

**段階 II** では、過程 A の規則適用によって、語形の音韻表示 (phonological representation) が形成される。例えば、動詞語幹/awar-/「洗う」の過去形の基底表示/awar-ta/ に対して、/w/ が同じ唇音性をもつ母音/u/ に交替する形態音韻規則、生じる au 連続が oo と相互同化する音韻規則が、この順に適用される。これによって、音韻表示 aroota が形成される。この音韻表示に対して、音声化規則が適用される過程 B が行われる。

**段階 III** では、過程 B の規則適用によって、最終的な語形の音声表示 (phonetic representation) が形成される。例えば、動詞語幹/awar-/「洗う」過去形の音韻表示 aroota に対して、音声化規則が適用されることによって、最終的な語形の音声表示 [aroota] が形成される。以上のようなプロセスを経ることによって、表層表示が完成する。

実際の調査によって得られるデータは、**段階 III** の音声表示 (筆者調査による音声データ、先行研究における文字データ) である。そのデータに基づいて、**段階 II**・**段階 I** の表示と過程 B・過程 A の規則を分析する。なお、本論文では図 1 に示すように、/ / で音素による基底表示、イタリックで音素

による音韻表示, [ ] で IPA (International Phonetic Alphabet) による音声表示を行う。それぞれの方言における音素による表記方法は、付録で詳述する。

## 2.2. 語・接語・接辞

本節では、語 (word)・接語 (clitic)・接辞 (affix) という用語について、本論文における認定方法を述べる。(3)のように定義し、図2に示すような基準によって判断する。

- (3) a. 語: 2つ以上の異なる語類に先行または後続し、単独で出現する単位  
b. 接語: 2つ以上の異なる語類に先行または後続し、単独で出現しない単位  
c. 接辞: 1つの語類にのみ後続する単位

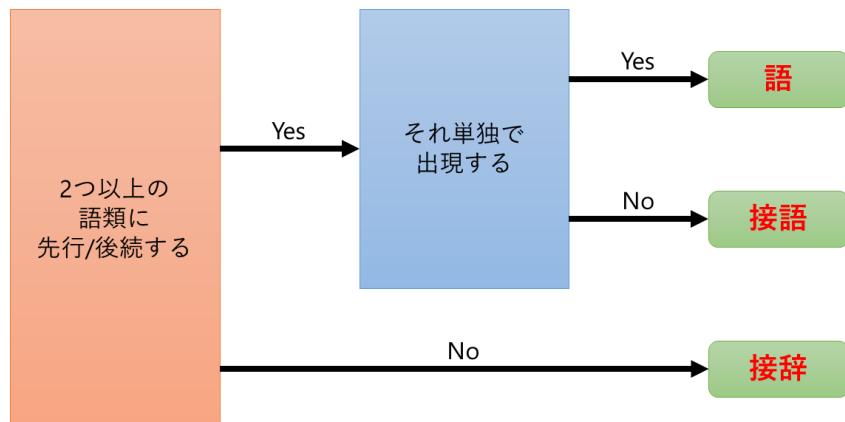


図2. 「語」「接語」「接辞」の認定方法

一般的に、「語」「接辞」「接語」は、形態統語論的観点と音韻論的観点から区別される<sup>1</sup>。しかし、§3.5で述べるように、本論文における調査は主に先行研究の文献を用いている。文献において挙げられている語形には、ある形態素が接語であるか接辞であるか、分析されていない場合がほとんどである。加えて、音韻論的な情報についても述べられていない場合が大半である。そこで本論文では、図2に示すテストを行うことで、「語」「接語」「接辞」を区別する。このテストは、服部 (1950, 1960), Zwicky and Pullum (1983), Aikhenvald (2002)などを参考にしている。

データの表示において、語境界はスペース、接語境界はイコール (=)、接辞境界はハイフン (-) によって表す。

<sup>1</sup> 例えば、以下のように定義される (Haspelmath and Sims 2010)。「語」は、形態統語論的にも音韻論的にも自立する単位である。「接語」は、形態統語論的には自立し、音韻論的には従属する単位である。「接辞」は、形態統語論的にも音韻論的にも従属する単位である。

### 2.3. 語根・語幹・語基

本節では、語根 (root)・語幹 (stem)・語基 (base) という用語について、本論文における定義を述べる。(4)に示すとおりである (Bauer 1985, Haspelmath and Sims 2010)。

- (4) a. 語根: 語から接辞を取り除いて最後に残る、それ以上分析できない形態素  
 b. 語幹: 語から屈折接辞を取り除いて残る部分  
 c. 語基: ある接辞が付与されている部分

これらの用語は、基底表示の形態素連続について説明するために用いるものである。図3・図4に、語形 *tabesaserareta* 「食べさせられた」を例として(4)を説明する。

<i>tabesaserareta</i>			
/tabe-	-sase	-rare	-ta/
語根	接辞	接辞	接辞
語幹		屈折接辞	

図3. *tabesaserareta* 「食べさせられた」の基底表示と「語根」「語幹」

<i>tabesaserareta</i>			
/tabe-	-sase	-rare	-ta/
<i>/-sase/ の語基</i>			
<i>/-rare/ の語基</i>			
<i>/-ta/ の語基</i>			

図4. *tabesaserareta* 「食べさせられた」の基底表示と「語基」

図3では、「語根」と「語幹」を図示している。語形 *tabesaserareta* 「食べさせられた」は、/tabe-/「食べる」・使役接辞/-sase/・受動接辞/-rare/・過去接辞/-ta/ という4つの形態素によって構成されている。この語形の基底表示は、/tabe-sase-rare-ta/ であると分析できる。/tabe-sase-rare-ta/ から3つの接辞を取り除いた、/tabe-/ は語根である。/tabe-sase-rare-ta/ から屈折接辞の過去/-ta/ を取り除いた、/tabe-sase-rare/ は語幹である。

図4では、「語基」を図示している。「語基」は、構成する接辞それが接続する先について言及する用語である。語形 *tabesasereta* 「食べさせられた」の基底表示/tabe-sase-rare-ta/ について、使役接辞/-sase/ の語基は/tabe-/ である。受動接辞/-rare/ の語基は/tabe-sase-/ である。過去接辞/-ta/ の語基は/tabe-sase-rare-/ である。

本論文では、日本語諸方言における動詞屈折形態論を中心に扱う。そのため以下では、(4)のうち「語幹」を主に用いる。

## 2.4. 動詞語幹クラス

本節では、日本語諸方言における動詞語幹のクラスを論じる。日本語諸方言における動詞語幹は、それぞれの方言における共時的データに基づいて、大きく「子音語幹」「母音語幹」「変格活用語幹」の3つのクラスに分類する。表2に示すとおりである。

表2. 日本語諸方言における動詞語幹クラスの種類

語幹クラス	下位区分
子音語幹（§ 2.4.1）	i 語幹
母音語幹（§ 2.4.2）	e 語幹 i/u 語幹 e/u 語幹
変格活用語幹（§ 2.4.3）	

「子音語幹」と「母音語幹」は、基底表示における語幹末音素が常に子音であるか否かによって決定される。「変格活用語幹」は、後続する形態素によって交替する。以下では、「子音語幹」「母音語幹」「変格活用語幹」についてそれぞれ詳述する。

### 2.4.1. 子音語幹

子音語幹は、基底表示における動詞語幹末音素が、常に子音であると分析できる語幹を指す。子音語幹に接辞が後続するときに、母音終わりの動詞語幹（§ 2.4.2）と異なる、同様の形態論的振る舞いをする。

子音語幹は、語幹末子音によって下位分類を設定する。その理由は、子音終わりの動詞語幹に過去接辞/-ta/・継起接辞/-te/ などが後続するとき、語幹末子音によって異なる形態音韻規則が適用されるからである。語幹末子音は、それぞれの方言における共時的データによって判断する。例えば、本論文で調査対象とする西日本方言において、子音語幹の語幹末子音は/k/, /g/, /s/, /n/, /m/, /b/, /w/, /t/, /r/ の9つである。山形県鶴岡市大山方言（大西 1994）における子音語幹の語幹末子音は、/g/, /ŋ/, /s/, /n/, /m/, /b/, /w/, /d/, /r/ の9つである。本論文では、ラ行五段化現象に関係する、語幹末子音が/r/ である語幹（以下「r語幹」という）の語形を中心に取り上げる。

### 2.4.2. 母音語幹

母音語幹は、基底表示における動詞語幹末音素が、母音である語幹をもつものを指す。語幹末母音とその交替によって下位分類を設定する。本論文において調査対象とする方言において、母音語幹の下位分類は「i語幹」「i/u語幹」「e語幹」「e/u語幹」の4つを設定する。

具体的な語形をみながら、母音語幹の下位クラスである「i語幹」「i/u語幹」「e語幹」「e/u語幹」を説明する。表3は、大分県九重町方言の動詞語形（糸井 1964）である。

表3. 九重町方言の動詞語形（糸井 1964）と基底表示（筆者による分析）

	語幹	非過去	過去
母音語幹	i 語幹	mi- 「見る」	miru /mi-ru/
	i/u 語幹	oki/oku- 「起きる」	okuru /oku-ru/
	e 語幹	ne- 「寝る」	neru /ne-ru/
	e/u 語幹	uke/uku- 「受ける」	ukuru /uku-ru/
			mita /mi-ta/
			okita /oki-ta/
			neta /ne-ta/
			uketa /uke-ta/

語幹/mi-/「見る」のように、語幹末母音が/i/ である語幹を「i 語幹」という。語幹/oki-/～/oku-/ のように、後続する接辞によって語幹末母音が/i/～/u/ と交替する語幹を「i/u 語幹」という。語幹/ne-/「寝る」のように、語幹末母音が/e/ である語幹を「e 語幹」という。語幹/uke-/～/uku-/ のように、後続する接辞によって語幹末母音が/e/～/u/ と交替する語幹を「e/u 語幹」という<sup>2</sup>。

以上に述べた「i 語幹」「i/u 語幹」「e 語幹」「e/u 語幹」は、古典日本語文法において「上一段動詞」語幹・「上二段動詞」語幹・「下一段動詞」語幹・「下二段動詞」語幹といわれる語幹と、同様の形態論的振る舞いをする。しかし、古典日本語文法と現代日本語諸方言文法において、これらのクラスに所属する動詞語幹の語彙は異なる。本論文では、それぞれの方言における共時的データに基づき、それぞれの方言において語幹クラスを設定する。従って、本論文では上述の語幹クラス名を用い、古典日本語文法の用語を用いない。

山形県鶴岡市大山方言では、語幹末母音が/u/ である「u 語幹」、語幹末母音が/e/ である「e 語幹」を設定する研究がある（大西 1994）。しかし、本論文では基底表示において、前者はi 語幹、後者はe 語幹として分析する。大西（1994）では、動詞語幹/ozu-/「落ちる」・/tozu-/「綴じる」を u 語幹として、動詞語幹/kode-/「答える」・/tokke-/「取り替える」を e 語幹として設定する。しかし、大西（1994）によると、zi,zu は大山方言において音韻論的に区別されない。井上（1994）によると、かつて存在していた母音音素/e/ は /e/ に合流している。以上のことから、大西（1994）における「u 語幹」「e 語幹」は、基底表示において、i 語幹・e 語幹であると分析する。

以上の4つの母音語幹「i 語幹」「i/u 語幹」「e 語幹」「e/u 語幹」以外にも、母音終わりの語幹であると分析される語幹がある。山形県鶴岡市大山方言（大西 1994）では、/wa-/「割る」・/niji-/「握る」・/cugu-/「作る」・/hine-/「ひねる」・/ke-/「帰る」・/to-/「取る」などが、母音終わりの語幹であると分析されている。しかし、本論文においてこれらの語幹は、基底表示において母音終わりではなく子音/r/ 終わりであると分析する。表4に、問題の語幹/ada-/「当たる」に加えて、子音 g 語幹/kag-/「書く」・子音 w 語幹/kaw-/「買う」・母音 i 語幹/ogi-/「起きる」の動詞語形を示す。

表4. 山形県鶴岡市大山方言の動詞語形（大西 1994）

語幹	非過去	否定非過去	過去	様態
kag- 「書く」	kagu	kagane	kaeda	kagisooda
kaw- 「買う」	kau	kawanε	kata	kaesooda
ada- 「当たる」	adaru	adane	adata	adarisooda
ogi- 「起きる」	ogiru	ogine	ogida	ogisooda

<sup>2</sup> i/u 語幹・e/u 語幹は、一部の九州方言と和歌山県方言にのみ存在している（吉町 1938a, 1941, 村内 1954, 1962, 奥村 1968, 真田 1989, 小林 1997, 2004, 迫野 1998, 2012 など）。

/ada-/ 「当たる」の4つの語形と、否定非過去形の4つの語形に着目する。これらの語形を比較することによって、*adane* の基底表示は/ada-ne/ と分析できる。このことから、語幹を/ada-/ と設定していると思われる。しかし、このことによって、過去形や様態形を統一的に分析できなくなる。過去形について、過去を表す形態には *ta～da* がある。これらの形態は、先行する動詞語幹末音素によって指定される。語幹末音素が母音である i 語幹・e 語幹のときは *da* となる。しかし、大西（1994）の分析によって「当たる」の語幹を/ada-/ と設定すると、語幹末は母音であるにもかかわらず、過去の形態は *ta* となると分析することとなる。様態形について、語幹を/ada-/ を設定することにより、語幹/ada-/ の様態形 *adarisooda* は /ada-ri-sooda/ と分析される。この場合、語幹/ada-/ に様態/-sooda/ が後続するときのみ、その間に/-ri/ が必要であると分析することとなる。

一方、「当たる」の語幹を末尾に/r/ を含める/adar-/ と分析すると、過去形と様態形を統一的に分析することができる。過去形 *adata* の基底表示は/adar-ta/ と分析される。その後、語幹末子音が脱落すると分析することで、子音 w 語幹と同様の形態音韻規則が生じると統一的に分析することができる。様態形 *adarisooda* の基底表示は /adar-i-sooda/ と分析され、子音語幹/kag-/、/kaw-/ の様態形と統一的に分析することができる。

以上の理由から、基底表示において「当たる」の語幹は/adar-/ であると分析する。それ以外の問題の語幹も、基底表示において語幹末に子音/r/ を含むと分析する。従って、これらの語幹は子音語幹であると分類する。

これまでに示してきたとおり、本論文において調査対象とする方言において、母音語幹の下位分類には、「i 語幹」「i/u 語幹」「e 語幹」「e/u 語幹」の4つを設定する。本論文で扱う「ラ行五段化」という現象は、§ 3.1 で詳述するように、これらの母音語幹が子音/r/ 終わりの語幹として振る舞うと分析できる現象を指す。本論文において、ラ行五段化が生じる語幹は、基底表示において母音終わりの語幹と子音/r/ 終わりの語幹が、当該方言におけるラ行五段化に関する動詞語幹と接辞の条件によって交替すると分析する（詳細は§ 3.6 で論じる）。このことは、/mi(r)-/ のように表示して示す。この場合も、形態素の語幹クラスとしては母音語幹に分類する。

#### 2.4.3. 変格活用語幹

「変格活用語幹」は、後続する形態素によって語幹が交替するクラスである。このクラスに所属する語彙は、多くの方言において「来る」や「する」にあたる動詞語幹である（これらは、日本語文法において、「カ行変格活用」語幹・「サ行変格活用」語幹といわれている）。

他の語幹クラスと同様に、変格活用語幹であるかどうか、すなわち語幹が交替するかどうかは、それぞれの方言における共時的データに基づく。従って、どの動詞語幹を変格活用語幹に分類するかについては、方言によって異なる<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> 例えば、金澤（1984）は、茨城方言における動詞「来る」の語幹を交替しない母音語幹/ki-/ として分析する。中條（1983）は、静岡県小鹿方言における動詞「する」の語幹を交替しない母音語幹/si-/ として分析する。これ以外の日本語諸方言においても、変格活用語幹の母音語幹化が報告されている（飯豊 1974、井上 1979、大西 2004、李 2011）。

## 2.5. 動詞屈折形態論

本節では、日本語諸方言における動詞屈折形態論を論じる。日本語諸方言について、基底表示における動詞の形態構造を図5に示す。

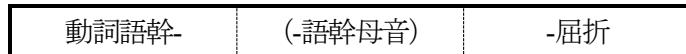


図5. 基底表示における動詞の形態構造

動詞は、動詞語幹と屈折接辞から構成される。子音終わりの動詞語幹に接辞が後続するとき、語幹母音 (thematic vowel; Bickel and Nichols 2007) を必要とすることがある。

動詞語幹は、単独の動詞語根、動詞語根と派生接辞、複合動詞語幹などが該当する。本論文では、単独の動詞語根をもつ語形を中心に扱う。そのため、動詞語幹と動詞語根が一致している場合が多数である。屈折接辞は、法 (mood)・時制 (tense)・極性 (polarity)などを標示する。屈折接辞のスロットをいくつ認定するか、どのような範疇で屈折するか、どのような屈折接辞を設定するかなどについては、それぞれの方言の共時的データによって分析し設定する。語幹母音は、1母音からなる接辞である。後続する接辞によって、語幹母音が必要か否か、必要であればどの母音の接辞を必要とするかが決定される。どのような語幹母音を設定するかについても、それぞれの方言における共時的データによって設定する。

(5)に、宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形を例として形態構造を示す。(5a)は語幹母音を必要としない例、(5b)は語幹母音/-a/を必要とする例である。この語幹母音/-a/には、「THM.IRR」とグロスを振る。

(5)	a.	<i>iku</i>	b.	<i>ikan</i>
		<i>ik-ru</i>		<i>ik-a-n</i>
		行く -NPST		行く -THM.IRR-NEG.NPST
		「行く」		「行かない」

## 2.6. データの表示方法

本節では、本論文におけるデータの表示方法を示す。データの表示方法を、(6)に示す。

- (6) 1行目: 音韻表示 (イタリック)
- 2行目: 基底表示
- 3行目: 形態素ごとのグロス
- 4行目: 全文訳

1行目の音韻表示や2行目の基底表示について、先行研究におけるデータも筆者の分析によって表示することがある。本論文における音素表記の方法については、付録で詳述する。3行目のグロスについて、先行研究におけるデータも筆者の分析によって表示することがある。本論文でグロスに用いる

略号は、以下の通りである。

● -	(affix boundary)	接辞境界
● =	(clitic boundary)	接語境界
● IMP	imperative	命令
● IRR	irrealis	未実現
● NEG	negative	否定
● NPST	non-past	非過去
● PST	past	過去
● SEQ	sequential	継起
● THM	thematic vowel	語幹母音
● VOL	volitional	意志

### 3. 問題の所在

本章では、本論文で取り扱う「ラ行五段化」に関する問題の所在を論じる。§3.1では、「ラ行五段化」という現象を定義する。§3.2では、ラ行五段化現象にみられる方言間のバリエーションを論じる。§3.3では、ラ行五段化現象がみられる方言の地理的分布を示し、そのうち本論文が調査対象とする方言を述べる。§3.4では、ラ行五段化を通方言的に一般化する先行研究を取り上げ、その問題点と解決方法を論じる。§3.5では、本論文で行った調査の方法と内容を述べる。§3.6では、ラ行五段化形式の形態構造の共時的な分析方法を論じる。§3.7では、ラ行五段化形式の通時的な変化プロセスを述べる。§3.8では、本論文で行うラ行五段化の通方言的な一般化を概観する。

#### 3.1. 「ラ行五段化」とは何か

「ラ行五段化」とは、現代日本語諸方言でみられる通時的变化である。本論文では、「ラ行五段化」を(7)のように定義する。

(7) 「ラ行五段化」

動詞の母音語幹に接辞が後続して動詞語形を形成するとき、母音語幹が子音 r 語幹  
(ラ行五段) 動詞と同じ形態論的振る舞いをするようになる通時的現象

実際の動詞語形を例に、ラ行五段化現象を説明する。表5は、宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形である。太字部分がラ行五段化形式である。

表5. 宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形と基底表示（筆者データ）

		語幹	否定非過去	過去
子音語幹	r 語幹	togir-「削る」	<i>togiran /tогir-a-n/</i>	<i>togitta /tогir-ta/</i>
	i 語幹	oki(r)-「起きる」	<b><i>okiran /окir-a-n/</i></b>	<i>okita /оки-ta/</i>
e/u 語幹	e/u 語幹	usite-「捨てる」	<i>usiten /usite-n/</i>	<i>usiteta /usite-ta/</i>

表には、尾前方言の動詞語幹クラスのうち、子音語幹と母音語幹の動詞語形を示している。母音語幹のうち、i語幹動詞「起きる」の語形に着目する。過去形は、e/u語幹「捨てる」と同様に、語幹/oki-/に過去/-ta/が後続する。一方、否定非過去形は、r語幹「削る」と同様に、語幹/okir-/に語幹母音/-a/が後続した/okir-a/に否定非過去/-n/が後続する。ラ行五段化は、「起きる」の否定非過去形にみられる、母音語幹が子音 r 語幹と同様の形態論的振る舞いをする現象を指す。この現象が動詞語幹におけるものであると分析する理由は、§3.6で述べる。

尾前方言の母音語幹のうち、i語幹はラ行五段化するが、e/u語幹はラ行五段化しない。加えて、i語幹動詞について、否定非過去形はラ行五段化するが、過去形はラ行五段化しない。このように、ラ行五段化は、母音語幹動詞の語形（動詞語幹+接辞）全てにおいて生じるものではない。さらに、このようなラ行五段化を引き起こす条件は、方言ごとに異なっている。§3.2では、このようなラ行五段化に関与する条件について、方言間バリエーションを記述する。

### 3.2. ラ行五段化の方言間バリエーション

本節では、宮崎県椎葉村尾前方言（以下、尾前方言）と大分県九重町方言（以下、九重町方言）を例に、ラ行五段化の方言間バリエーションを概観する。ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞を、表6・表7に尾前方言と九重町方言で比較する。

表6. ラ行五段化に関する動詞語幹の方言間比較

語幹末母音	/i/		/e/	
語幹モーラ数	1	2～	1	2～
尾前方言（§3.2.1）	i 語幹: ○	i 語幹: ○	e 語幹: ○	e/u 語幹: ✕
九重町方言（§3.2.2）	i 語幹: ○	i/u 語幹: ✕	e 語幹: ○	e/u 語幹: ✕

表7. ラ行五段化に関する接辞の方言間比較

接辞	意志	否定非過去	過去
尾前方言（§3.2.1）	○	○	✖
九重町方言（§3.2.2）	○	○	✖

「○」はラ行五段化に関する、「✖」はラ行五段化に関するないことを示している。表6・表7に示すように、ラ行五段化には、関与する動詞語幹と接辞の種類に条件がある。加えて、この条件には方言間バリエーションが存在する。以下では、尾前方言と九重町方言における、ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞の条件を詳述する。

#### 3.2.1. 尾前方言<sup>4</sup>（宮崎県、筆者データ）

尾前方言においてラ行五段化を引き起こす要因は、①動詞語幹・②接辞の種類である。以下に、それについて詳述する。

①動詞語幹に関して、尾前方言の動詞語幹クラスのうち、子音語幹と母音語幹を表8に示す。母音語幹の下位クラスには「i 語幹」「e 語幹」「e/u 語幹」の3つがある。否定非過去形に示すように、i 語幹・e 語幹はラ行五段化を引き起こす一方、e/u 語幹はラ行五段化を引き起こさない。

表8. 尾前方言の動詞語幹クラス

語幹クラス	語幹	否定非過去
子音語幹	r 語幹	togir- 「削る」
	i 語幹	oki(r)- 「起きる」
	e 語幹	ne(r)- 「寝る」
e/u 語幹	usite/usitu-	usiten 「捨てる」

<sup>4</sup> 尾前方言について、地理は下地ほか（2016）、音素論や形態音韻論は下地（2016）を参照。

以上に示した動詞語幹の条件は、表 6 に示すように、「語幹末母音」と「語幹モーラ数」に分けて理解することができる。e 語幹には、語幹が 1 モーラの/ne(r)/ 「寝る」, /de(r)/ 「出る」 の 2 つしかない。e/u 語幹には、語幹が 2 モーラ以上のものしかない。従って、尾前方言では語幹末母音が/e/ の場合、1 モーラの語幹はラ行五段化し、2 モーラ以上の語幹はラ行五段化しないといえる。このことを、表 6 の「尾前方言」の行に示している。

②接辞の種類に関して、定動詞（主節末に出現する動詞）・副動詞（従属節末に出現する動詞）の屈折接辞を、表 9・表 10 に示す。なお、副動詞の屈折接辞は、継起と条件のみを示す。

表 9. 尾前方言の定動詞の屈折接辞

法	時制	肯定	否定
直説	非過去	-ru	-n
	過去	-ta	-datta
意志		-u	-rumjaa
命令		-i / -re	-runa

表 10. 尾前方言の副動詞の屈折接辞

機能	肯定	否定
継起	-te	-nde
		-zi
条件	-tja	-nja(a)

これらの屈折接辞のうち、網掛けで示している接辞が i 語幹・e 語幹に後続するとき、ラ行五段化を引き起こす。その接辞は、否定非過去/-n/・否定過去/-datta/・意志/-u/・否定継起/-nde/,/-zi/・否定条件/-nja(a)/である。一方、過去/-ta/・継起/-te/ が i 語幹・e 語幹に後続するときは、ラ行五段化を引き起こさない。意志接辞と否定非過去接辞はラ行五段化を引き起こし、過去接辞はラ行五段化を引き起こさないことを、表 7 の「尾前方言」の行に示している。

例として、i 語幹/mi(r)/ 「見る」に、表 9・表 10 の接辞が後続したときの語形とその基底表示を、表 11・表 12 に示す。太字で示している語形が、ラ行五段化形式である。

表 11. 尾前方言の定動詞 (i 語幹/mi(r)/ 「見る」)

法	時制	肯定	否定
直説	非過去	<i>miru</i> /mi-ru/	<i>miran</i> /mir-a-n/, <i>min</i> /mi-n/
	過去	<i>mita</i> /mi-ta/	<i>miradatta</i> /mir-a-datta/, <i>midatta</i> /mi-datta/
意志		<i>miroo</i> /mir-a-u/	<i>mirumjaa</i> /mi-rumjaa/
命令		<i>mire</i> /mi-re/ <sup>5</sup>	<i>miruna</i> /mi-run/a/

<sup>5</sup> 本論文では、*mire* のような命令形の形式について、ラ行五段化形式であるかどうか判断を保留する（詳細は、§3.6.2 で論じる）。

このような形式はこれまでの先行研究において、ラ行五段化形式であると分析（基底表示は/mir-e/）されてきた。以下で、先行研究の記述を参照するとき、命令形のラ行五段化形式は *mire* のような形式を指す。

表 12. 尾前方言の副動詞 (i 語幹/mi(r)-/ 「見る」)

機能	肯定	否定
継起	<i>mite /mi-te/</i>	<i>mirande /mir-a-nde/, minde /mi-nde/</i> <i>mirazi /mir-a-zi/, mizi /mi-zi/</i>
条件	<i>mirjaa /mi-rjaa/</i>	<i>miranja /mir-a-nja/, minja /mi-nja/</i>

ここに示すように、ラ行五段化を引き起こす動詞語幹・接辞の条件が揃っている語形においても、非ラ行五段化形式が容認される場合がある。

意志/-u/ は、先行する母音と相互同化 (reciprocal assimilation) する。表 11 中の語幹/mi(r)-/ 「見る」の意志形 *miroo* に着目する。基底表示/mir-a-u/ では、動詞語幹に語幹母音/-a/ が後続した/mir-a/ に、意志/-u/ が後続している。この基底表示に生じる au 連続が oo と相互同化することで、*miroo* となる。

基底表示において/r/ 始まりと分析できる接辞 (非過去/-ru/・否定意志/-rumja/・否定命令/-runa/・条件/-rja/ ) がラ行五段化する動詞語幹に後続するとき、ラ行五段化を引き起こすかどうかは判断できない。i 語幹/mi(r)-/ 「見る」の非過去形 *miru* を例に、2通りの形態論的分析を(8)に示す。

(8) i 語幹/mi(r)-/ 「見る」 非過去形 *miru* の形態論的分析案

a.	<i>miru</i>	b.	<i>miru</i>
	<i>mi-ru</i>		<i>mir-ru</i>
	見る-NPST		見る-NPST
	「見る」		「見る」

(8a)は母音終わりの語幹に、(8b)は子音/r/ 終わりの語幹に、それぞれ接辞が後続している。これらの分析のうちどちらが妥当であるかは、共時的に自明ではない。本論文では便宜的に、(8a)の分析を採用する。すなわち、/r/ 始まりの接辞がラ行五段化する語幹に後続するとき、語幹は/r/ 終わりではなく母音終わりであると分析する。

### 3.2.2. 九重町方言（大分県、糸井 1964）

九重町方言においてラ行五段化を引き起こす要因も、①動詞語幹・②接辞の種類である。しかし、その内容は尾前方言と異なる。表 13 に、九重町方言の動詞語形を示す。

表 13. 九重町方言の動詞語形（糸井 1964）

		語幹	否定非過去	意志	命令	過去
子音語幹	r 語幹	<i>tor-</i> 「取る」	<i>toran</i>	<i>toroo</i>	<i>tore</i>	<i>totta</i>
	i 語幹	<i>mi(r)-</i> 「見る」	<b><i>miran</i></b>	<b><i>miroo</i></b>	<i>mijo</i>	<i>mita</i>
母音語幹	i/u 語幹	<i>oki-</i> 「起きる」	<i>okin</i>	<i>okjuu</i>	<i>okii</i>	<i>okita</i>
	e 語幹	<i>ne(r)-</i> 「寝る」	<b><i>neran</i></b>	<b><i>neroо</i></b>	<i>nejo</i>	<i>neta</i>
	e/u 語幹	<i>uke-</i> 「受ける」	<i>uken</i>	<i>ukjuu</i>	<i>ukii</i>	<i>uketa</i>

①動詞語幹について、i語幹とe語幹がラ行五段化を引き起こす一方、i/u語幹とe/u語幹はラ行五段化を引き起こさない。この条件も、表6に示す「語幹末母音」と「語幹モーラ数」に分けて考えることができる。糸井（1964）をみると、i語幹は語幹が1モーラのものしかなく、i/u語幹は語幹が2モーラ以上のものしかない。同様に、e語幹は語幹が1モーラの/ne(r)/「寝る」、/de(r)/「出る」しかなく、e/u語幹は語幹が2モーラ以上のものしかない。従って、九重町方言では、1モーラの語幹はラ行五段化し、2モーラ以上の語幹はラ行五段化しないといえる。このことを、表6の「九重町方言」の行に示している。

②接辞について、否定非過去接辞と意志接辞がラ行五段化を引き起こす一方、過去接辞はラ行五段化を引き起こさない。命令形においても、ラ行五段化は生じていない。このことを、表7の「九重町方言」の行に示している。

### 3.3. ラ行五段化の地理的分布

本節では、ラ行五段化現象がみられる方言の地理的分布を論じる。

ラ行五段化は、小林（1996,2004）が指摘するように、日本語諸方言において広くみられる現象である。特に、使役形のラ行五段化形式は、多くの日本語方言において報告されている。使役形以外に、否定非過去形・過去形・意志形・命令形などにおいて、ラ行五段化形式がみられることが指摘されている（小林 1996,2004）。使役形を除く、否定非過去形・過去形・意志形・命令形について、ラ行五段化形式がみられる方言を図6に示す。それに加えて、ラ行五段化がみられる方言地域の詳細を、(9)に示す。



図6. ラ行五段化の地理的分布

- (9) ラ行五段化現象がみられる地域の詳細
- a. 九州方言: 全域
  - b. 四国方言: 渥美半島（愛媛県宇和島市・高知県幡多郡）とその周辺
  - c. 雲伯方言: 島根県出雲・鳥取県西伯耆
  - d. 近畿方言: 三重県・大阪府・兵庫県（但馬・播磨・淡路島）・和歌山県・奈良県南部
  - e. 東海方言: 愛知県三河・岐阜県東濃とその周辺
  - f. 東北方言: 日本海側（青森県・岩手県・山形県・新潟県）

本論文では、これらの地域でみられるラ行五段化について、それぞれの方言において関与する動詞語幹と接辞の条件を調査する。その条件を方言間で比較することによって、通方言的に一般化する。

§3.4 では、(9)のそれぞれの地域について、複数の世代や地点を扱う先行研究を挙げる。§4 では、(9)のそれぞれの地域において、ラ行五段化現象がみられる地域を詳述する。

### 3.4. 各方言区画におけるラ行五段化の先行研究

§3.2 では、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞には、条件があることを述べた。加えて、その条件には方言間バリエーションがあることを論じた。本論文では、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞について、それぞれの方言における条件を調査する。それを方言間で比較することによって、通方言的に一般化する。

本節では、日本語諸方言全体やそれぞれの方言区画におけるラ行五段化に関して、複数の地点や世代を扱う先行研究をまとめた。§3.4.1 では日本語諸方言全体のラ行五段化を通方言的に扱う小林（1996, 2004）を概観する。§3.4.2 では九州方言、§3.4.3 では四国方言、§3.4.4 では雲伯方言、§3.4.5 では近畿方言、§3.4.6 では東海方言、§3.4.7 では東北方言におけるラ行五段化について、複数の地点や世代を扱う先行研究をまとめた。

#### 3.4.1. 通方言的研究

本節では、日本語諸方言のラ行五段化を通方言的に扱った先行研究として、小林（1996, 2004）を概観し、その問題点を述べる。

小林（1996, 2004）は、言語地図『方言文法全国地図』（GAJ）やその準備調査の結果を用いて、日本語諸方言におけるラ行五段化形式の出現数を調査している。以下では、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞のそれぞれを変数とした、ラ行五段化形式数の調査結果を概観する。

動詞語幹「起きる」「見る」「開ける」「寝る」「する」「来る」を変数とする、否定形・意志形・過去形・命令形におけるラ行五段化形式数の大小についての調査では、(10)のような結果を得ている。〔 〕内に示しているのは、実際の出現数である。

- (10) ラ行五段化形式の出現数（活用形：否定形・意志形・過去形・命令形）
- |      |   |      |   |      |   |      |   |      |   |     |
|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|-----|
| 起きる  | ≒ | 見る   | ≒ | 寝る   | > | 開ける  | > | する   | > | 来る  |
| [87] |   | [89] |   | [86] |   | [36] |   | [12] |   | [4] |

§3.2 のように、母音語幹を語幹末母音と語幹モーラ数という観点で考えると、(10)の母音語幹は(11)のように分析できる。

- (11) a. 「起きる」： 語幹末母音/i/, 2 モーラ語幹  
b. 「見る」： 語幹末母音/i/, 1 モーラ語幹  
c. 「寝る」： 語幹末母音/e/, 1 モーラ語幹  
d. 「開ける」： 語幹末母音/e/, 2 モーラ語幹

一方、動詞の否定形・使役形・意志形・過去形・命令形を変数とする、(10)の動詞語幹6つにおけるラ行五段化形式数の大小についての調査では、(12)のような結果を得ている。

(12)	ラ行五段化形式の出現数 (動詞語幹: 「起きる」「見る」「開ける」「寝る」「する」「来る」)			
	使役形 > 意志形 ≈ 命令形 > 否定形 > 過去形			
[256]	[121]	[119]	[101]	[10]

以上に示したように、小林(1996, 2004)は、日本語諸方言におけるラ行五段化形式の出現数を調査している。その結果を、動詞語幹と語形を変数にして、出現数の大小によって示している。

ラ行五段化形式の出現数の大小は、それぞれの方言におけるラ行五段化の条件を捨象して、形式数を総和している。そのため、それぞれの方言におけるラ行五段化の実態を、必ずしも反映しているとは限らず、小林(1996, 2004)の大小関係では説明できない方言データがある。§3.2.2に示した九重町方言(糸井1964)がその例である。九重町方言において、語幹末母音が/i/の1モーラ語幹(i語幹)と語幹末母音が/e/の1モーラ語幹(e語幹)が、ラ行五段化に関与する。(11)に示したように、これらの語幹は、(10)の結果における「見る」「寝る」にそれぞれ該当する。これらの語幹2つのラ行五段化形式数は、「起きる」のそれとほぼ同値であるとされている。しかし、九重町方言において、語幹末母音が/i/の2モーラ語幹(i/u語幹)はラ行五段化に関与しない。接辞については、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与し、命令形と過去形は関与しない。(12)の結果をみると、「意志形」と「命令形」のラ行五段化形式数は、ほぼ同値であるとされているが、九重町方言において命令形はラ行五段化に関与しない。以上に述べたように、九重町方言においてラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞について、小林(1996, 2004)の調査結果を用いて説明するのは困難である。

### 3.4.2. 九州方言

本節では、九州方言のラ行五段化に関して、複数の地点・世代を扱う先行研究をまとめた。地理的分布、通時的变化の分析、複数世代への調査による世代差、複数地点での調査による通方言的傾向に関する先行研究がある。

ラ行五段化の地理的分布を論じる先行研究に、吉町(1938b, 1952), 彦坂(1996)がある。吉町(1938b, 1952)は、動詞の活用形について、ある語形がどこで回答されたかという調査の結果を報告し、ラ行五段化の地理的変異を論じている。彦坂(1996)は、国語調査委員会(1906)『口語法調査報告書』と国立国語研究所(1993)『方言文法全国地図』(GAJ)の調査結果から、動詞意志形についてのラ行五

段化の地理的変異を論じている。これらの地理的分布を論じた先行研究によって、九州方言のラ行五段化に地理的変異が存在することが明らかになった。しかし、これらの先行研究における調査は、一部の動詞語幹に限定されている。従って、それぞれの方言における動詞形態論の一部しか扱えず、一方言や九州方言におけるラ行五段化の全体像を把握することは難しい。

ラ行五段化の通時的な変化を論じる先行研究に、迫野（1998, 2012）、彦坂（1999, 2001）がある。迫野（1998, 2012）は、九州方言における動詞語幹クラスを、古典日本語の動詞語幹クラスとの比較によって、(13)の3つの型に分類している。加えて、これらの型の地理的分布や、この型が成立するまでの通時的变化を論じている。

(13) 九州方言における動詞活用の型（下線は母音語幹の活用）

- a. 五段活用（古典語四段・上一・下一・ナ変・ラ変）
  - 下二段活用（古典語下二）
  - 上二段活用（古典語上二）
- b. 五段活用（古典語四段・上一・下一・ナ変・ラ変）
  - 下二段活用（古典語下二・上二）
- c. 五段活用（古典語四段・上一・上二・下一・ナ変・ラ変）
  - 下二段活用（古典語下二）

九州方言における母音語幹は、(13)に示す古典語の上一段・上二段・下二段活用に概ね対応する。これらのうち、(13a, b)では上一段活用が、(13c)では上一段活用と上二段活用が、五段活用に変化したと述べられている。しかし、§3.2に示したように、ラ行五段化に関与する接辞には方言ごとに条件があり、母音語幹動詞の語形全てにおいて生じるわけではない。従って、一段活用が完全に五段活用化しているとはいえない。彦坂（1999, 2001）では、彦坂（1996）で用いた2つの調査資料から、ラ行五段化の通時的变化を論じている。しかし、前述のとおり、これらの調査資料は動詞形態論の一部しか扱っていない。そのため、ラ行五段化の通時的变化の全体像は明らかになっていない。ラ行五段化の通時的な変化については、§8.2で詳述する。

ラ行五段化の世代差を論じる先行研究に、陣内（1989）がある。陣内（1989）は、福岡市方言について高年層と若年層のデータを比較している。ラ行五段化に関与する動詞語幹については、単音節語幹のほうが2音節語幹よりも、ラ行五段化しやすいことを示している。ラ行五段化に関与する活用形について、(14)の階層によって一般化している。

(14) 福岡市方言においてラ行五段化に関与する活用形

命令形 > 意志形 > 未然形 > 連用形 > 過去形

この階層は、福岡市方言におけるラ行五段化の世代差を説明するものである。本論文では、ラ行五段化に関与する活用形について、方言間で比較した上で通方言的に一般化する。本論文の一般化（§6）によって、陣内（1989）の一般化も説明することができる。

ラ行五段化の共時的な通方言的傾向を論じる先行研究に、黒木（2019）がある。黒木（2019）は、九州西部方言における母音語幹動詞の語形を調査し、その結果を示している。動詞語幹については、語幹末母音が/i/ の語幹と、語幹末母音が/e/ の1モーラ語幹 (/ne(r)-/「寝る」, /de(r)-/「出る」) は、

ラ行五段化しやすいとしている。接辞については、ある接辞が動詞語幹に後続するときにラ行五段化するか否か、複数方言のデータが示されている。ラ行五段化に関与する動詞語幹の一般化については、黒木（2019）が対象としてない他の九州方言において、この一般化が妥当であるかは言及されていない。例えば、大分県九重町方言（糸井 1964）では、語幹末母音が/i/ の2モーラ語幹はラ行五段化に関与しない。この点から、黒木（2019）による動詞語幹の一般化によって、九州方言全体または日本語諸方言全体のデータを説明することは困難である。ラ行五段化に関与する接辞については、方言間バリエーションの存在を明らかにしているが、通方言的な一般化は行われていない。本論文では、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞について、日本語諸方言全体を対象に通方言的に一般化する。本論文の一般化（§ 5, 6）によって、黒木（2019）の一般化も説明することができる。

### 3.4.3. 四国方言

本節では、四国方言のラ行五段化に関する先行研究を概観する。一方言のラ行五段化について3世代のデータを示し、ラ行五段化の通時的過程と活用形別の要因を論じる先行研究に、松丸（2001a, b）がある。

松丸（2001a, b）は、高知県宿毛市方言におけるラ行五段化について、244の母音語幹動詞語形を3世代で調査している。その上で、ラ行五段化の形式数の出現頻度から、ラ行五段化の通時的過程を形態的条件・運用的条件・意味的条件によって論じている。全ての活用形におけるラ行五段化の通時的過程を(15)、過去否定形におけるラ行五段化の通時的過程を(16)、命令形におけるラ行五段化の通時的過程を(17)に、それぞれ示す。

(15) 全ての活用形におけるラ行五段化の通時的過程

- a. 語幹末音: /re/ 以外 → /re/
- b. 動詞の項数: 2項動詞 → 1項動詞

(16) 過去否定形におけるラ行五段化の通時的過程

- a. 語幹モーラ数: 2モーラ以外 → 2モーラ
- b. 動詞の意志性: 意志動詞 → 無意志動詞

(17) 命令形におけるラ行五段化の通時的過程

- a. 語幹クラス: 下一段動詞 → 上一段動詞
- b. 他動性: 高 → 低

(15a)の語幹末音・(15b)の項数・(16b)の意志性・(17b)の他動性は、それまでの先行研究において、ラ行五段化に関与すると言われてこなかった新しい観点である。本論文でもこの観点は検証しないが、これらの点がラ行五段化に関与するかどうか、他の方言で検証する必要がある。しかし、(15)(16)(17)の通時的变化過程は、ラ行五段化形式の出現数から論じられている。§ 3.4.1 で述べたように、ラ行五段化形式の出現数からは、通時的变化過程を論じることはできない。

### 3.4.4. 雲伯方言

本節では、雲伯方言のラ行五段化に関する先行研究を概観する。出雲方言の各地における共時的実態と通時的过程を論じる小西（2011, 2017）がある。

小西（2011, 2017）は、国立国語研究所（1993）『方言文法全国地図』（GAJ）と、2010～2015年に行われた全国方言分布調査（FPJD；大西編2016に収録）のデータを用いている。出雲方言のラ行五段化について、方言ごとに活用形ごとの共時的実態を分析し、通時的な過程を論じている。ラ行五段化の通時的过程について、§3.4.1の(12)に示した小林（1996, 2004）の動詞語形ごとの出現数の大小に沿って、左から右に進んでいるとしている。それに加えて、意志形のラ行五段化は、同形式となる条件形との同音衝突を回避するために停滞または衰退したとしている。しかし、§3.4.1で述べたように、小林（1996, 2004）の結果はラ行五段化形式の出現数について大小を述べたものであり、通時的变化を論じることはできない。加えて、§3.4.1で述べたように、これら先行研究の調査は一部の動詞語幹に限定されている。従って、これらの調査資料は動詞形態論の一部しか扱えず、一方言や出雲方言全体のラ行五段化について、共時的・通時的な全体像は明らかになっていない。

### 3.4.5. 近畿方言

本節では、近畿方言のラ行五段化について、複数の地点・世代を扱う先行研究をまとめた。大阪府内の方言におけるラ行五段化について活用形と地理的分布を論じる山本（1962），和歌山県内の方言におけるラ行五段化について地理的分布と年齢層を論じる真田ほか（1995），淡路島方言について複数地点の動詞形態論を記述する高橋（1982），ラ行五段化形式の出現数を地点別・年代別に調査する山岡（2016, 2017）がある。

山本（1962）は、大阪府内の方言について、全域においてラ行五段化現象がみられるとしている。その上で、ラ行五段化形式がみられる活用形（未然形・連用形・命令形）は地域によって異なるとし、その調査結果を(18)のように述べている。

(18) 大阪府内の方言における活用形ごとのラ行五段化

- a. 未然形・連用形・命令形：泉南市，貝塚市，堺市富蔵（旧泉州郡西陶器村）
- b. 未然形・命令形：枚方市，河内長野市天見，岸和田市，泉南郡東鳥取村
- c. 未然形：大東市四条町，堺市鳳町，泉佐野市日根野，大阪市阿倍野区
- d. 命令形：豊中市曾根

これによって、大阪府内の方言におけるラ行五段化について、方言間にバリエーションがあることが明らかになった。しかし、この調査結果は、どのような動詞語幹によるものか明示されていない。§3.2で示したように、ラ行五段化を引き起こすか否かは、動詞語幹も関与している方言がある。大阪府方言において、ラ行五段化を引き起こす動詞語幹については、明らかになっていない。

真田ほか（1995）は、奈良県御所市室から和歌山県新宮市王子町までの地域において、地点と年代を変数とするグロットグラム調査を行っている。その結果、「見る」の否定形について、奈良県大塔村と十津川村の60歳代以下においてラ行五段化形式が回答されている。この調査によって、語幹末が/i/の1モーラ語幹について、否定接辞が後続するときにラ行五段化する方言の分布が明らかになった。

これに加えて、奈良県大塔村の母音語幹の命令形を調査し、若年層のほうが高年層よりラ行五段化形式が用いられると分析している。この調査によって、奈良県大塔村の命令形においては、語幹モーラ数と語幹末母音にかかわらずラ行五段化形式がみられることが明らかになっている。しかし、以上のような語幹や接辞以外のラ行五段化について扱われていないため、全体像は明らかになっていない。

高橋（1982）は、淡路島方言について、由良・岩屋・福良の動詞形態論を記述している。ただし、この記述における母音語幹は、語幹末母音/i/ の1モーラ語幹/mi(r)/ 「見る」と、語幹末母音/e/ の2モーラ語幹/uke(r)/ 「受ける」に限られている。そのため、ラ行五段化を引き起こす動詞語幹の全体像は明らかになっていない。

山岡（2016, 2017）は、淡路島方言とその周辺方言を対象に、語幹モーラ数が1モーラ・2モーラの母音語幹について、否定形・連用命令形・命令形・意志形を年代別に調査している。その上で、語幹モーラ数・活用形・年代・地域ごとにラ行五段化形式数を述べ、語幹モーラ数による傾向はみられないとしている。しかし、§3.4.1で述べたように、ラ行五段化の形式数による一般化では、一方言におけるラ行五段化の傾向を説明することは不可能である。それに加えて、語幹末母音については考慮されておらず、語形も示されていないため、語幹末母音によって一般化できるかどうかは不明である。

### 3.4.6. 東海方言

東海方言におけるラ行五段化について、複数の地点や世代を扱う先行研究は存在しない。一方言におけるラ行五段化について、その語形が存在することを報告する先行研究がいくつかある（奥村 1976, 加藤 1983, 山口 1985, 高見 2012, 山田 2012 など）。

### 3.4.7. 東北方言

本節では、東北方言のラ行五段化に関する先行研究を概観する。それぞれの方言における共時的実態と通時的過程を論じる彦坂（2017）がある。

彦坂（2017）は、国立国語研究所（1993）『方言文法全国地図』（GAJ）のデータを用いて、東北方言のラ行五段化について、それぞれの方言における活用形ごとの共時的実態を調査している。これに加えて、国語調査委員会（1906）『口語法調査報告書』や過去の方言文献を用いて、ラ行五段化の通時的な過程を論じている。しかし、§3.4.1でも述べたように、これら先行研究の調査は一部の動詞語幹に限定されている。従って、これらの調査資料は動詞形態論の一部しか扱えず、一方言や東北方言全体のラ行五段化について、共時的・通時的な全体像は明らかになっていない。

### 3.4.8. 本節のまとめ

本節では、ラ行五段化現象がみられる九州方言・四国方言・雲伯方言・近畿方言・東海方言・東北方言について、全体的に扱う先行研究（小林 1996, 2004）と、それぞれにおいて複数の地域・世代を扱う先行研究を取り上げた。

日本語諸方言全体のラ行五段化を扱う小林（1996, 2004）では、ラ行五段化形式の出現数を調査している。その結果を、動詞語幹と語形を変数として、大小関係によって示している。しかし、この大小関係は、それぞれの方言におけるラ行五段化の条件を捨象している。従って、説明できない方言データがある。

それぞれの方言区画における先行研究では、動詞形態論のデータから、ラ行五段化について通方言的に一般化している。しかし、ラ行五段化に関与する条件をもとにした、網羅的な調査と分析は行われていない。語幹末母音（/i/, /e/）・語幹モーラ数（1モーラ, 2モーラ, etc.）・接辞（否定非過去, 過去, 意志, etc.）について、一部のものしかデータが示されていない。従って、ラ行五段化の全体像は明らかになっていない。

本論文では、日本語諸方言全体のラ行五段化を対象とする。それぞれの方言において、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の条件を調査する。その上で、ラ行五段化の方言間バリエーションを正確に記述し、可能・不可能なパターンを予測できる通方言的一般化のモデルを提示する。

### 3.5. 調査方法・調査内容

本節では、本論文で行った調査の方法と内容を述べる。

§3.4.1 に示した小林（1996, 2004）の問題点を解決するために、「一方言において、ある語形のラ行五段化形式が容認可能か」という点を明確に調査・記述する。調査は、主に先行研究における動詞形態論の記述データを参照することによって行う。一部方言においては、筆者が自ら動詞形態論の調査を行う。調査では、データ同士の比較が可能になるように、表14・表15のような調査項目の調査票を統一的に用いる。

表14. 動詞語幹の調査項目

語幹末母音	モーラ数	例
/i/	1	見る
	2	起きる
/e/	1	寝る
	2	開ける

表15. 接辞の調査項目

法	時制	極性	例
直説	非過去	肯定	見る
		否定	見ない
	過去	肯定	見た
意志		肯定	見よう
命令		肯定	見ろ

表 14 に示す動詞語幹について、「語幹末母音」(i/・/e/) と「語幹モーラ数」(1 モーラ・2 モーラ) を変数とする。それぞれの方言において、語幹末母音が/i/ の 1 モーラ語幹・語幹末母音が/i/ の 2 モーラ語幹・語幹末母音が/e/ の 1 モーラ語幹・語幹末母音が/e/ の 2 モーラ語幹の、4 つの動詞語幹の語形を調査する。その上で、ラ行五段化に関する条件を一般化する。これらの語幹に加えて、ラ行五段化現象であるかどうかを比較検討するため、子音 r 語幹・変格活用語幹の動詞語形も調査する。

表 15 に示す接辞について、ラ行五段化形式がみられる、否定非過去形・過去形・意志形・命令形と、これに非過去形を加えた 5 つの語形を調査する。その上で、ラ行五段化に関する条件を一般化する。

以上のように、ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞について、それぞれの方言における条件を調査する。それを方言間で比較することによって、通方言的に一般化する。先行研究の記述データを参考する際には、表 14・表 15 に当たる 20 の動詞語形（動詞語幹 4 つ × 接辞 5 つ）が全て示されているものを、一般化の対象とする。

### 3.6. ラ行五段化形式の形態構造の共時的分析方法

本節では、ラ行五段化形式の形態構造について共時的な分析方法を論じる。§ 3.6.1 では、共時的分析方法が 2 つあることを示し、本論文で採用する分析方法とその根拠を述べる。§ 3.6.2 では、命令形のラ行五段化と分析してきた形式について、分析方法は一律に定まらないことを論じる。

#### 3.6.1. 2 つの共時的分析方法と本論文の分析

本節では、ラ行五段化形式の形態構造について共時的な分析方法を 2 つ示し、そのうち本論文で採用する分析方法とその根拠を論じる。ラ行五段化形式に生じる r について、一方言の共時的な分析による基底表示において、これが動詞語幹に属するか接辞に属するかが問題となる。以下では、(19)に示すように、この 2 つの分析をそれぞれ「r 語幹分析」「r 接辞分析」とする。

- (19) ラ行五段化形式の基底表示の共時的分析方法 (例: 尾前方言「起きる」否定非過去形 *okiran*)
- a. r 語幹分析: 動詞語幹は/okir-/ であり、生じる r は語幹に含まれると分析する
  - b. r 接辞分析: 動詞語幹は/oki-/ であり、生じる r は接辞に含まれると分析する

本論文では、(19a)の「r 語幹分析」を採用する<sup>6</sup>。すなわち、生じる r は基底表示において語幹に属すると分析する。本論文での分析を、§ 2.1 の図 1 に示した、基底表示から表層表示を派生するプロセスに従って説明する。尾前方言の動詞語幹/oki(r)-/「起きる」の否定非過去形 *okin, okiran* を例に、派生プロセスを図 7 に示す。

<sup>6</sup> ただし、見かけ上ラ行五段化形式と類似する命令形 (例: 尾前方言方言の *mire* 「見ろ」) について、(19a,b)のどちらの分析が妥当であるかの判断は保留する。§ 3.6.2 で見るよう、どちらの分析が妥当かを決める、実証的根拠がないためである。

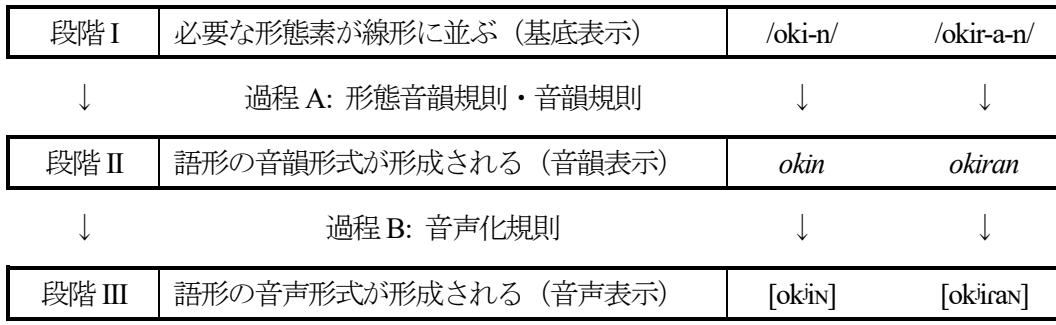


図 7. 語形の派生プロセス（例：動詞語幹/oki(r)-/「起きる」否定非過去形）

**段階 I**において、動詞語幹/oki(r)-/「起きる」の否定非過去形を形成するため、語幹末が母音である語幹/oki-/に否定非過去/-n/が後続している。このとき、尾前方言でラ行五段化が関与する動詞語幹と接辞の条件を満たしている（語幹末母音/i/・2 モーラ語幹、否定非過去/-n/が後続）。このように各方言におけるラ行五段化の条件を満たす場合、動詞語幹末が/r/である語幹/okir-/に交替し、接辞が後続することが可能である。その後、過程 Aにおいて、子音 r 語幹のときと同じ形態音韻規則や音韻規則が適用され、ラ行五段化形式 okiran が形成される。

ラ行五段化形式に生じる r について、「r 語幹分析」のほうが「r 接辞分析」より優れている点が 2 点ある。1 点目は、動詞語形を形成するときの形態音韻規則の経済性と基底表示における接辞の体系性を、両立させることができる点である。2 点目は、ラ行五段化形式を通方言的に一貫して分析することが可能である点である。これらの利点を、表 16 に示す尾前方言の動詞語形を参照しながら、順に説明する。

表 16. 宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形（筆者データ）

		語幹	否定非過去	意志	過去
子音語幹	r 語幹	togir-「削る」	togiran	togiroo	togitta
母音語幹	i 語幹	oki(r)-「起きる」	okiran, okin	okiroo	okita
	e/u 語幹	usite-「捨てる」	usiten	usitjuu	usiteta

1 点目の根拠は、動詞語形を形成するときの形態音韻規則の経済性と基底表示における接辞の体系性を、両立させることができる点である。ラ行五段化現象を「r 語幹と同じ形態論的振る舞いをすることである」と分析することによって、この現象を説明するためだけの形態音韻規則を設定する必要がなくなる。

この経済性に加えて、語幹クラスにかかわらず、後続する接辞の基底表示を同じ形式として設定することができる。このように分析した場合の、表 16 に示す意志形の基底表示を(20)に示す。

#### (20) r 語幹分析による基底表示

a. togiroo	b. okiroo	c. usitjuu
togir-a-u	okir-a-u	usite-u
削る-THM.IRR-VOL	起きる-THM.IRR-VOL	捨てる-VOL
「削ろう」	「起きよう」	「捨てよう」

「起きる」の意志形 *okiroo* の基底表示に着目する。語幹を, (20a)の r 語幹/togir-/ 「削る」と同様に子音 /r/ で終わる語幹/okir-/ と分析することにより, 意志接辞の基底表示もまた r 語幹/togir-/ 「削る」と同じく/-u/ であると設定することができる。(20a, b)の基底表示をみると, 子音終わりの語幹に語幹母音 /-a/ と意志/-u/ が後続している。その後, § 3.2.1 で述べたように, 生じる au 連続が oo に相互同化すると分析できる。一方, ラ行五段化が生じていない母音語幹(20c)の基底表示をみると, 母音終わりの語幹に意志/-u/ が後続している。その後, 生じる eu 連続が juu に同化する。このように, ラ行五段化形式の基底表示を(20b)のように分析することで, 意志接辞の基底表示を語幹クラスにかかわらず/-u/ に設定できる。否定非過去形においても同様に, 否定接辞/-n/ を語幹クラスにかかわらず設定することができる。これが, 基底表示における接辞の体系性である。

以上に述べたとおり, 「r 語幹分析」を採用することによって, 動詞語形を形成するときの規則の経済性と基底表示における接辞の体系性を, 両立させることができる。一方, 「r 接辞分析」を採用する場合の, 表 16 に示す意志形の基底表示を(21)に示す。

(21) r 接辞分析による基底表示

a.	<i>togiroo</i>	b.	<i>okiroo</i>	c.	<i>usijuu</i>
	togir-a-u / togir-roo		oki-roo		usite-u
	削る-THM.IRR-VOL / 削る-VOL		起きる-VOL		捨てる-VOL
	「削ろう」		「起きよう」		「捨てよう」

「起きる」の意志形 *okiroo* を考慮すると, 意志接辞に/-roo/ を設定する必要がある。一方, 「捨てる」の意志形 *usijuu* を考慮すると, 意志接辞に/-u/ も設定する必要がある。このように, 少なくとも 2 つの意志接辞 (/-roo/ と/-u/) を設定する必要がある。このように, 「r 接辞分析」を採用することで, 「r 語幹分析」による形態音韻規則の経済性と接辞の体系性が失われる。

「r 語幹分析」を採用する 2 点目の根拠は, ラ行五段化形式を通方言的に一貫して分析することが可能になる点である。宮崎県日の影町方言 (野元 1959) では, 「見る」の意志形・否定非過去形・過去形においてラ行五段化形式 *miroo, miran, mitta* がみられる。これらの語形を一貫して説明するには, 語幹の基底表示に/mir-/ を設定する必要がある。これらの語形の基底表示を, (22)に示す。

(22) 宮崎県日の影町方言 (動詞語幹/mir-/ 「見る」)

a.	<i>miroo</i>	b.	<i>miran</i>	c.	<i>mitta</i>
	mir-a-u		mir-a-n		mir-ta
	見る-THM.IRR-VOL		見る-THM.IRR-NEG.NPST		見る-PST
	「見よう」		「見ない」		「見た」

過去/-ta/ は, 子音終わりの語幹に後続するとき, 語幹末子音に形態音韻規則が適用される。母音終わりの語幹に後続するときは, 形態音韻規則が生じず, 基底形のまま実現する。これらのこと考慮すると, ラ行五段化形式 *mitta* を分析するためには, 基底表示において子音終わりの語幹である必要がある。それ以外の意志形・否定非過去形のラ行五段化形式も含めて統一的に分析するためには, 上述してきたとおり, ラ行五段化形式の語幹を/r/ 終わりであるとし, *mitta* の基底表示は/mir-ta/ であるとする必要がある。

一方、「r接辞分析」を採用する場合、意志形・否定非過去形・過去形のラ行五段化形式を一貫して説明することができなくなる。加えて、接辞について、ラ行五段化形式のための異形態を設定することとなる。前述したラ行五段化形式 *mitta* に対して「r接辞分析」を行うと、基底表示は/mi-tta/ となる。このように分析すると、「r語幹分析」によって分析した意志形や否定非過去形と、統一的な分析ができなくなる。加えて、ラ行五段化形式のための接辞の異形態 *tta* を設定することとなる。

以上の2点から、「r語幹分析」のほうが「r接辞分析」よりも優れている。従って、本論文では「r語幹分析」を採用する。ラ行五段化形式に生じる r は基底表示において語幹に属し、ラ行五段化形式は子音 r 終わりの語幹に接辞が後続していると分析する。

上述のとおり、ラ行五段化する動詞語幹は、母音終わりの語幹と子音 r 終わりの語幹の2つを異形態としてもつ。加えて、ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞の条件を満たす場合に、子音 r 終わりの語幹に交替しうると分析する。このように、2つの語幹を設定する理由は2つある。

1点目は、ラ行五段化が生じない語形を説明するためである。ラ行五段化が生じる語幹クラスにおいても、母音終わりの語幹として振る舞うラ行五段化が生じない語形がある。表 16 の i 語幹/oki(r)-/「起きる」について、否定非過去形はラ行五段化が生じるが、過去形はラ行五段化が生じない。このことから、ラ行五段化が生じる語幹においても、母音/i/ で終わる語幹を設定する必要がある。

2点目は、ラ行五段化が生じる条件を満たす場合における、非ラ行五段化形式を説明するためである。筆者データや先行研究のデータにおいて、ラ行五段化形式が生じる条件のとき、非ラ行五段化形式も容認される場合がある。表 16 に示す i 語幹/oki(r)-/「起きる」の否定非過去形について、ラ行五段化形式である *okiran* とともに、非ラ行五段化形式 *okin* も容認される。このような場合を説明するために、ラ行五段化が生じる語幹に、母音で終わる語幹とともに子音/r/ で終わる語幹も設定する。

この分析と対抗する分析を3つ提示し、その分析を採用しない根拠を述べる。1つ目は、ラ行五段化形式に生じる r について、基底には存在せず語幹に挿入される分析である。例えば、ラ行五段化形式 *okiran* について、形態音韻規則として基底表示/oki-n/ の語幹に r が挿入されるという分析である。しかし、他の子音ではなく r が挿入される動機が説明できない。加えて、この分析では、r に加えて語幹母音/-a/ も挿入される必要がある。語幹母音は、子音語幹に特定の接辞が後続するとき、基底表示において存在するものであることに反する。従って、r が挿入される分析は採用しない。

2つ目の対抗する分析は、ラ行五段化形式・非ラ行五段化形式とともに基底表示の語幹末に r が存在し、非ラ行五段化形式のときに r が削除される分析である。例えば、語幹末母音/i/ の2モーラ語幹の否定非過去形でラ行五段化を引き起こす方言において、基底表示/okir-a-n/ の r が削除されることで、非ラ行五段化形式が派生されるという分析である。しかし、r が削除される動機を説明することができない。従って、r が削除される分析は採用しない。

3つ目の対抗する分析は、ラ行五段化形式に生じる r について、独立した形態素とする分析である。例えば、ラ行五段化形式 *okiran* について、基底表示を/oki-r-a-n/ とする分析である。しかし、この形態素/-r/ に対して、具体的な機能を説明することができない。従って、r を独立した形態素とする分析は採用しない。

以上のことから、否定非過去形・過去形・意志形のラ行五段化形式において、生じる r は基底表示において語幹に属すると分析する。加えて、ラ行五段化が生じる語幹は異形態に母音終わりの語幹と子音/r/ 終わりの語幹があり、ラ行五段化が関与する動詞語幹と接辞の条件が揃った場合に、/r/ 終わりの語幹に交替しうるとする。§ 2.4 で論じたように、ラ行五段化が生じる語幹について、形態素の語幹クラスとしては母音語幹であると分類する。

### 3.6.2. 命令形の共時的分析方法: 命令形の変化

§3.6.1では、否定非過去形・過去形・意志形のラ行五段化形式に生じるrについて、共時的に語幹に属する「r語幹分析」を採用した。一方、命令形は「r語幹分析」を採用しない。本節では、命令形のラ行五段化形式について、生じるrが語幹に属するか接辞に属するかは判断できないことを示す。このことについて、表17に示す対馬市豊玉方言の動詞語形を参照しながら説明する。

表17. 対馬市豊玉方言の動詞語形（原田2006）

	語幹	非過去	否定非過去	命令	過去
子音語幹	or-「いる」	<i>oru</i>	<i>oran</i>	<i>ore</i>	<i>otta</i>
母音語幹	mi(r)-「見る」	<i>miru</i>	<i>miran</i>	<i>mire</i>	<i>mita</i>
	oki-「起きる」	<i>okiru</i>	<i>okin</i>	<i>okiro</i>	<i>okita</i>
変格活用語幹	su/se/si-「する」	<i>suru</i>	<i>sen</i>	<i>sere</i>	<i>sita</i>

母音語幹「見る」の語形に着目する。語幹について、過去形 *mita* から /mi-/ という語幹を設定する必要がある。加えて、否定非過去形 *miran* から /mir-/ という語幹も設定する必要がある。ここで、問題となる命令形の形態構造を分析する。「いる」の命令形 *ore* と「見る」の命令形 *mire*について、考えられる3通りの形態論的分析を(23)–(25)に示す。

(23) 命令形の形態論的分析案1

a.	<i>ore</i>	b.	<i>mire</i>
	<i>or-re</i>		<i>mi-re</i>
	いる-IMP		見る-IMP
	「いろ」		「見ろ」

(24) 命令形の形態論的分析案2

a.	<i>ore</i>	b.	<i>mire</i>
	<i>or-re</i>		<i>mir-re</i>
	いる-IMP		見る-IMP
	「いろ」		「見ろ」

(25) 命令形の形態論的分析案3

a.	<i>ore</i>	b.	<i>mire</i>
	<i>or-e</i>		<i>mir-e</i>
	いる-IMP		見る-IMP
	「いろ」		「見ろ」

(23)は、命令接辞の基底表示を/-re/ とし、語幹/or-/「いる」と母音終わりの語幹/mi-/「見る」に後続している。この場合、ラ行五段化形式に生じるrが接辞に属する「r接辞分析」となる。(24)は、命令接辞の基底表示を/-re/ とし、語幹/or-/「いる」と子音終わりの語幹/mir-/ に後続している。この場合、ラ

行五段化形式に生じる *r* が語幹と接辞の両方に生じている。(25)は、命令接辞の基底表示を/-e/ とし、語幹/or-/「いる」と子音終わりの語幹/mir-/「見る」に後続している。この場合、ラ行五段化形式に生じる *r* が語幹に属する「*r* 語幹分析」となる。

以上の(23)–(25)の分析のうち、どの分析が妥当であるかを考える。ここで、変格活用語幹/su-/~se-/~si-/「する」の命令形 *sere* に着目する。この語形の基底表示は、/se-re/ であると分析することができる。この基底表示から、命令接辞の基底表示に/re/ を設定することが必要である。この変格活用語幹のように、ラ行五段化する語幹以外の語幹における命令形を考慮すると、命令接辞の基底表示に/re/ を設定することが必要な方言がある。そのような方言の場合、命令接辞の基底表示を/-e/ とする(25)の分析ではなく、命令接辞の基底表示に/re/ を設定する(23)か(24)の分析を採用するほうが、接辞の基底表示を統一的に説明することができる。一方、ラ行五段化する語幹以外の語幹における命令形を考慮したとき、命令接辞の基底表示に/re/ を設定することができない方言もある。そのような場合、(24)の分析ではなく、(23)か(25)の分析を採用する必要がある。

以上に示したように、(23)(24)(25)の分析のうちどれが適切かについて、一方言の共時的データからは一律に定まらない。これは、§ 3.2.1 の(8)で示した、ラ行五段化に関与する接辞に/r/ 始まりの接辞が後続するとき、語幹が/r/ 終わりであるか否かは判断できないのと同様である。本論文では(8a)と同様に、便宜的に(23)の分析を採用する。

§ 3.6.1 で示したように、命令形以外のラ行五段化形式については「*r* 語幹分析」を採用する。しかし、(23)のように、命令形のラ行五段化形式について「*r* 接辞分析」を採用する場合、語幹における現象ではない。本論文において「ラ行五段化」は、(7)に示したように語幹における現象を指すため、「*r* 語幹分析」を採用する否定非過去形・過去形・意志形を一般化の対象とする。一方、命令接辞は、ラ行五段化に関与する接辞の一般化の対象外とする。加えて、以下では、命令形については「ラ行五段化」という名称を用いず、「命令形の変化」とよぶ。「命令形の変化」の通時的な側面については、§ 3.7において言及する。命令形の変化に関与する動詞語幹については、ラ行五段化と同様に一般化し、§ 7において言及する。

このように、命令形の変化形式の形態論的分析が 1 つに定まらない理由は、語幹末音素が母音か子音かによって、命令接辞の基底表示が異なるからである。本論文で調査対象とする日本語諸方言において、母音終わりの動詞語幹に後続する命令の形式は、子音終わりの動詞語幹に後続する形式と異なる。従って、§ 3.6.1 に示したような命令形以外のラ行五段化形式とは異なり、先行する語幹クラスにかかわらず接辞の基底表示を同じ形式として分析することはできない。

### 3.7. ラ行五段化の通時的变化プロセス

本節では、ラ行五段化の通時的变化過程を論じる先行研究を概観する。ラ行五段化は、通時的に語幹と接辞のどちらが変化しているかについて、(26)に示す 2 つの分析（佐々木 2019）がある。

- (26) ラ行五段化形式の通時的变化プロセスの分析方法
- a. 語幹変化分析: 動詞語幹に/r/ が含まれるようになる変化
  - b. 接尾辞分析: 接辞に/r/ が含まれるようになる変化

(26a,b)のどちらの分析が妥当であるか、先行研究において定まった共通見解はない。本論文では、共時的な分析について、否定非過去形・過去形・意志形では(26a)に近い分析を採用している。しかし、ラ行五段化形式の通時的な変化プロセスについて、(26a,b)のどちらが妥当であるかは議論しない。以下では、それぞれの分析を概観し、§3.6で示した共時的な分析との関連を述べる。

(26a)「語幹変化分析」を採用する先行研究に、小林(1996,2004),黒木(2012,2019)がある。「ラ行五段化」という現象の名称はこの分析を含意しており、これは現在多数を占める分析である。語幹が母音語幹から子音r語幹に変化する動機は、動詞語幹クラスのうち所属する語彙数が最も多いr語幹(金田一1938,慶野1972,大西1995,田附2004など)に、母音語幹を合流させる類推変化が生じているためであると説明されている。これに加えて、小林(1996,2004)は、活用形ごとにラ行五段化の進度差や地域差がある(§3.4.1の(12)を参照)のは、活用形ごとにラ行五段化を引き起こす要因が存在するからであるとしている。

一方、(26b)「接尾辞変化分析」を採用する先行研究に、佐々木(2016,2019),deChene(2016,2020)がある。deChene(2016),佐々木(2019)は、使役形・意志形・否定非過去形・命令形(すなわち過去形以外)のラ行五段化形式は、接尾辞が変化したものであると分析する。例えば、動詞語幹/mi-/「見る」の意志形について、基底表示/mi-oo/の接辞先頭に挿入する子音が/j/から/r/に変化することによって、ラ行五段化形式/miroo/が成立したと分析する。挿入子音が/r/に変化する動機について、deChene(2016)は、日本語動詞形態論において接辞先頭への挿入子音の多数が/r/であり(非過去/-u/,条件/-eba/など)、それに合わせるための類推変化であると説明されている。これに加えて佐々木(2019)は、否定非過去形と命令形については、接辞の基底表示が個別の理由によって変化した後、子音語幹動詞語形との類推によって子音/r/の挿入という形態音韻規則が生じたとしている。

共時的分析と通時的变化は、必ずしも一致するとは限らない。しかし、共時的な「r語幹分析」は通時的な「語幹変化分析」を、共時的な「r接辞分析」は通時的な「接尾辞変化分析」を、それぞれ示している可能性がある。§3.6.1の議論から、否定非過去形・過去形・意志形のラ行五段化については、「語幹変化」が生じている可能性がある。この場合、母音語幹が子音r語幹へ類推変化していると分析できる。一方、§3.6.2の議論から、命令形の変化については「語幹変化」もしくは「接尾辞変化」が生じている可能性がある。「接尾辞変化」の場合、母音語幹に後続する命令接辞が子音語幹に後続するものへ類推変化していると分析できる。このように、命令形の変化はラ行五段化と変化の質が異なる可能性がある。従って、命令形についてはラ行五段化の一般化には含めず、独立した「命令形の変化」として関与する動詞語幹を一般化する(§7)。

### 3.8. 第4章以降の構成と論点

本節では、第4章から第8章の構成を述べ、そこで行う分析を概観する。

第4章では、それぞれの方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。第5章と第6章では、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の条件について、方言間で比較した上で通方言的に一般化する。第7章では、命令形の変化が生じる動詞語幹の条件について、通方言的に一般化する。第8章では、この一般化が成立する理由を、語形の使用頻度とラ行五段化の通時的变化過程から説明する。

§3.2で論じたように、ラ行五段化が生じるか否かは、動詞語幹と接辞が関与している。関与してい

る動詞語幹と接辞について、方言間バリエーションを説明するため、階層によって一般化する。第5章で行う動詞語幹の一般化を(27)に、第6章で行う接辞の一般化を(28)に示す。

(27) ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化

- a. 語幹末母音: /i/ > /e/
- b. 語幹モーラ数: 1モーラ > 2モーラ

(28) ラ行五段化に関する接辞の一般化

意志 > 否定非過去 > 過去

(27)の動詞語幹の一般化では、「語幹末母音」と「語幹モーラ数」を基準にして、左からラ行五段化に関与しやすい順に示す。(28)の接辞の一般化では、左からラ行五段化に関与しやすい接辞を順に示す。

(27)(28)は、階層による一般化である。従って、一方言において、階層中のある動詞語幹または接辞がラ行五段化を引き起こす場合、それより左の接辞もラ行五段化を引き起こす。

## 4. ラ行五段化現象がみられる地域と一般化のデータ

本章では、それぞれの方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。それに加えて、一般化する方言データの詳細を示す。§ 4.1 では九州方言、§ 4.2 では四国方言、§ 4.3 では雲伯方言、§ 4.4 では近畿方言、§ 4.5 では東海方言、§ 4.6 では東北方言を扱う。

### 4.1. 九州方言

本節では、九州方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。九州方言では、全域でラ行五段化現象がみられる。このことは、吉町（1938b, 1952）、彦坂（1996）、小林（1996, 2004）などによって明らかになっている。本論文で一般化する方言データの詳細は、図8・表18に示すとおりである。

国土地理院承認 平14総複 第149号

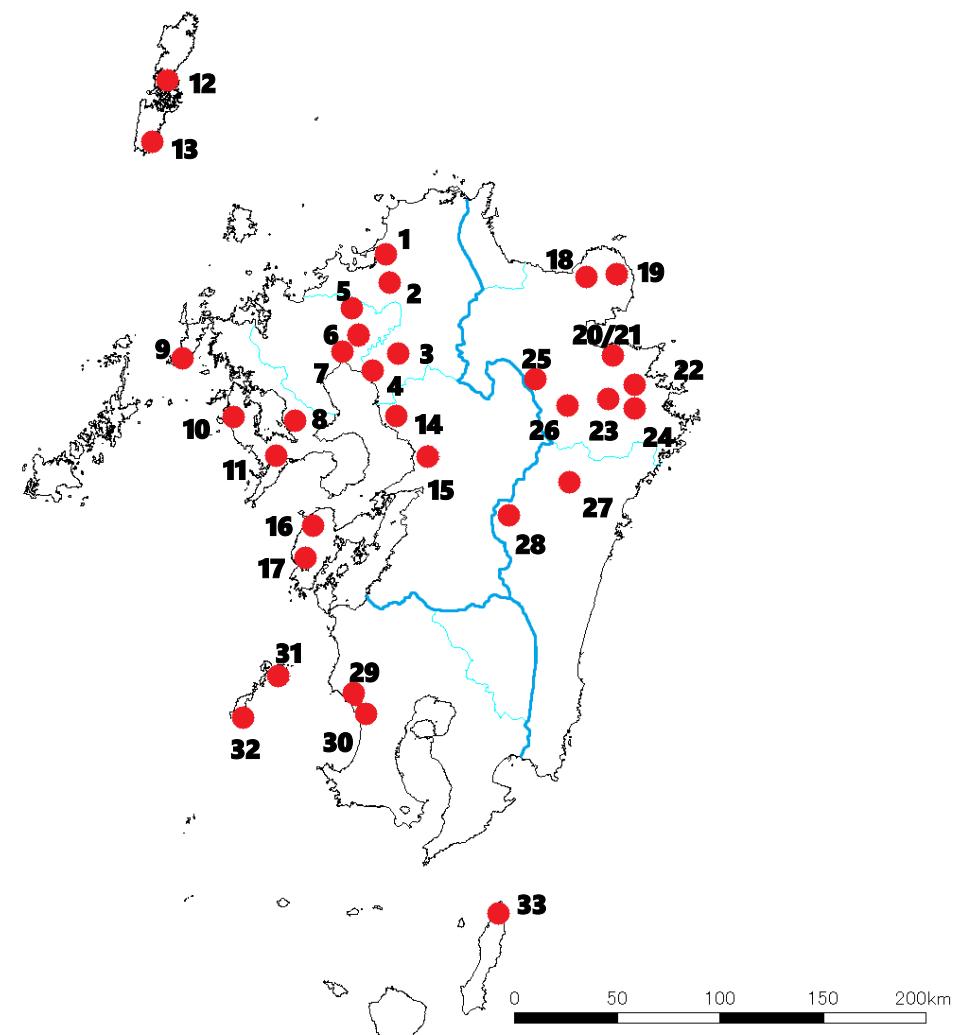


図8. 一般化する九州方言データの地理的分布 (KenMap Ver.9.2 を用いて筆者作成)

表 18. 一般化する九州方言データ

図 8	県名	方言名	出典
<b>1</b>	福岡県	福岡市博多	高年層: 早田 (1985) 若年層: 陣内 (1989)
<b>2</b>	福岡県	福岡市旧社家町	岡野 (1991)
<b>3</b>	福岡県	筑後市若菜	若菜 (1990)
<b>4</b>	福岡県	柳川市	松岡 (2021)
<b>5</b>	佐賀県	旧富士町北山	岩本 (1991)
<b>6</b>	佐賀県	旧大和町	高園 (2000)
<b>7</b>	佐賀県	佐賀市	高山 (2015)
<b>8</b>	長崎県	長崎市	塚本 (1978)
<b>9</b>	長崎県	平戸市志々伎	野林 (1969)
<b>10</b>	長崎県	旧大瀬戸町板ノ浦	野林 (1966)
<b>11</b>	長崎県	大村市	篠崎 (1966)
<b>12</b>	長崎県	対馬市豊玉	原田 (2006)
<b>13</b>	長崎県	旧厳原町久田	野林 (1966)
<b>14</b>	熊本県	荒尾市揚増永	野林 (1966)
<b>15</b>	熊本県	熊本市	水上 (1983)
<b>16</b>	熊本県	苓北町	黒木 (2019)
<b>17</b>	熊本県	旧河浦町今富	松丸 (2002a, b)
<b>18</b>	大分県	豊後高田市大力	大西 (1996a)
<b>19</b>	大分県	国東	栗林 (2009)
<b>20</b>	大分県	大分市元町	糸井 (1983)
<b>21</b>	大分県	大分市古国府	糸井 (1991)
<b>22</b>	大分県	臼杵市	柳井 (1980)
<b>23</b>	大分県	旧川登村	糸井 (1959)
<b>24</b>	大分県	旧野津町西神野	糸井 (1960)
<b>25</b>	大分県	九重町	糸井 (1964)
<b>26</b>	大分県	旧直入町長湯	野林 (1991)
<b>27</b>	宮崎県	日の影町	野元 (1959)
<b>28</b>	宮崎県	椎葉村尾前	筆者データ <sup>7</sup>
<b>29</b>	鹿児島県	旧串木野市	黒木 (2019)
<b>30</b>	鹿児島県	旧市来町	黒木 (2019)
<b>31</b>	鹿児島県	旧里村	黒木 (2015, 2019)
<b>32</b>	鹿児島県	旧下飯村手打	黒木 (2019)
<b>33</b>	鹿児島県	西之表市西之表	上村 (1959)

<sup>7</sup> 調査は、2019年3, 5, 9, 11月に行った。調査協力者は、OM 氏, OH 氏, OK 氏, OT 氏, OY 氏である。OM 氏は女性, OH 氏は1926年生まれの女性, OK 氏は1930年生まれの女性, OT 氏は1930年生まれの男性, OY 氏は1933年生まれの男性である。

## 4.2. 四国方言

本節では、四国方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。

四国方言においてラ行五段化現象がみられるのは、渭南方言（現在の愛媛県宇和島市・南宇和郡、高知県幡多郡の一部町村を合わせた地域；杉山 1954, 1964）とその周辺方言である。この地域は、愛媛県と高知県にまたがっている。愛媛県の範囲は、現在の宇和島市・南宇和郡・西宇和郡・北宇和郡・西予市・八幡浜市である。これは、「渭南方言」に「宇和方言」（杉山 1964）を加えた範囲である。高知県の範囲は、現在の幡多郡全域・檮原町・四万十町である。これは、高知県方言を構成する「土佐方言」「幡多方言」（土居 1958, 1982, 吉田 1982）のうち、幡多方言の区画を指す。以上の地域を、四国方言におけるデータの調査対象とする。本論文で一般化する方言データの詳細は、図9・表19に示すとおりである。



図9. 一般化する四国方言データの地理的分布 (KenMap Ver.9.2 を用いて筆者作成)

表 19. 一般化する四国方言データ

図9	県名	方言名	出典
<b>1</b>	愛媛県	旧明浜町	野林 (1970)
<b>2</b>	愛媛県	宇和島市	筆者データ <sup>8</sup>
<b>3</b>	高知県	宿毛市	松丸 (2001a, b, 2007)
<b>4</b>	高知県	幡多郡	浜田 (1982)

<sup>8</sup> 調査は、2020年11月に行った。調査協力者であるNH氏は、1994年生まれの男性である。0歳から18歳までの期間を、愛媛県宇和島市で生活している。

### 4.3. 雲伯方言

本節では、雲伯方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。

雲伯方言とは、島根県出雲方言・鳥取県西伯耆方言・隱岐島方言をまとめた方言区画を指す（広戸 1961, 神部 1982 など）。このうち、ラ行五段化現象がみられるのは、出雲方言と西伯耆方言である。このことは、小林（1996, 2004）、小西（2011, 2017）によって明らかになっている。以上の地域を、雲伯方言におけるデータの調査対象とする。本論文で一般化する方言データの詳細は、図 10・表 20 に示すとおりである。



図 10. 一般化する雲伯方言データの地理的分布 (KenMap Ver.9.2 を用いて筆者作成)

表 20. 一般化する雲伯方言データ

図 10	県名	方言名	出典
1	島根県	出雲市平田町	筆者データ <sup>9</sup>

<sup>9</sup> 調査は、2020年11月に行った。調査協力者であるOS氏は、1950年生まれの男性である。0歳から18歳までの期間を、島根県出雲市で生活している。

#### 4.4. 近畿方言

本節では、近畿方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。

近畿方言においてラ行五段化現象がみられるのは、先行研究において(29)の地域であると述べられている。

(29) 近畿方言においてラ行五段化がみられる地域

- a. 三重県: 四日市市 (西宮 1961)
- b. 大阪府: 全域 (山本 1962)
- c. 兵庫県: 但馬・播磨 (山名 1961, 岡田・模垣 1962, 鎌田 1982 など)  
淡路島 (服部 1962, 高橋 1982, 山岡 2016, 2017 など)
- d. 奈良県: 南部 (西宮 1961, 1962, 1982, 模垣 1962, 奥村 1975)
- e. 和歌山県: 伊都郡 (西宮 1961, 模垣 1962, 村内 1962, 奥村 1975)

これに加えて、ラ行五段化現象がみられる可能性を考慮すべき地域がある。それは、否定接辞/-jan/ がみられる地域である。近畿方言には、動詞語幹 $/mi-$  「見る」の否定非過去形に *mijan* という形式がみられる方言がある。以下では便宜的に、この形式の基底表示を、語幹 $/mi-$  に否定/-jan/ が後続している $/mi-jan/$  であると分析する。否定/-jan/ は、母音終わりの語幹や変格活用語幹に後続し、子音終わりの語幹には後続しない (小川 2006, 日高 2014, 村中 2014 など)。矢野 (1956, 1962), 岸江 (2014), 鳥谷 (2015) によって、観察される方言の地理的分布が調査されている。これらの先行研究や個別方言の研究をまとめると、(30)に示すとおりである。

(30) 近畿方言において否定/-jan/ がみられる地域

- a. 三重県: 全域 (桑名市; 市川 1956, 尾鷲市; 平澤 1982, 四日市市; 小川 2006)
- b. 大阪府: 全域 (河内; 山崎 2017, 泉州; 杉生 2019)
- c. 奈良県: 南部 (橿原市; 楠田 2013, 五條市; 楠田 2013, 上東 2020)
- d. 和歌山県: 全域 (那賀郡; 輿田 1938, 新宮市; 平澤 1982, 海草郡; 模垣 1936)

この否定/-jan/ の通時的成立過程について、先行研究の分析をまとめると、(31)の2つにまとめられる (日高 2014)。

(31) 否定/-jan/ の通時的成立過程

- a. 取り立て否定形式: 否定形式の類推 *ika sen : ikan = mijia sen : mijan* によって成立
- b. ラ行五段化形式 *miran* に対し,  $r > j$  の音変化が生じて成立

(31a)説を支持する先行研究に、真田ほか (1995), 鳥谷 (2015) がある。一方、(31b)説を支持する先行研究に、金沢 (1988), 日高 (2016) がある。(31a,b)のどちらの成立過程が妥当であるかについては、現在一致した見解はない。もし(31b)説が正しい場合、否定/-jan/ がみられる地域において、ラ行五段化形式が容認される可能性がある。

以上のことから本論文では、ラ行五段化形式と否定/-jan/ がみられる地域を、近畿方言におけるデータの調査対象とする。すなわち、三重県全域・大阪府全域・兵庫県（但馬・播磨・淡路島）・和歌山県全域・奈良県南部である。ただし、否定/-jan/ についてはラ行五段化形式であるとはみなさず、一般化的対象ともしない。

本論文で一般化する方言データの詳細は、図 11・表 21 に示すとおりである。

表 21. 一般化する近畿方言データ

図 11	府県名	方言名	出典
<b>1</b>	兵庫県	高砂市	原 (1956)
<b>2</b>	兵庫県	明石市	橋 (1966)
<b>3</b>	大阪府	大阪市	和田 (1961)
<b>4</b>	奈良県	十津川村	平山 (1979)
<b>5</b>	和歌山県	田辺市	平澤 (1982)

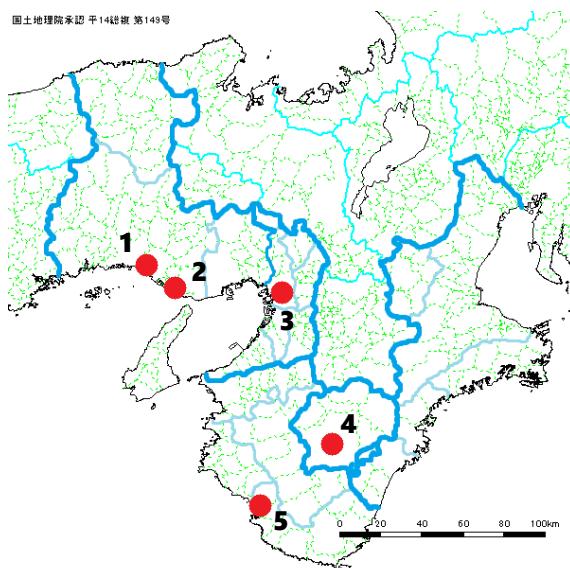


図 11. 一般化する近畿方言データの地理的分布 (KenMap Ver.9.2 を用いて筆者作成)

## 4.5. 東海方言

本節では、東海方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。

東海方言においてラ行五段化現象がみられるのは、愛知県三河方言・岐阜県東美濃方言とその周辺方言である。以上の地域を、東海方言におけるデータの調査対象とする。本論文で一般化する方言データの詳細は、図 11・表 22 に示すとおりである。

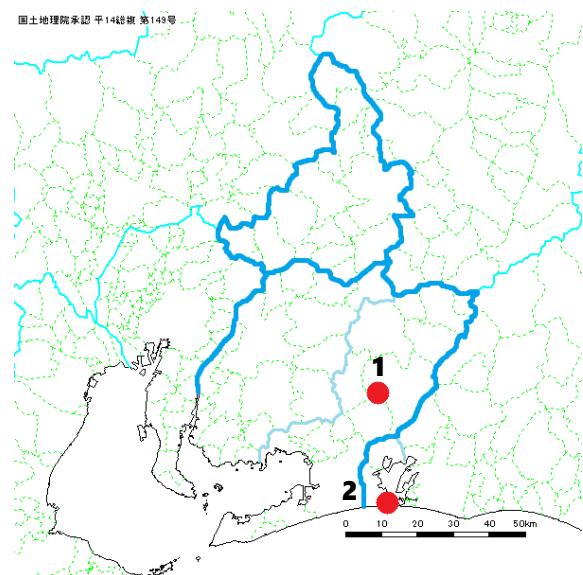


図 12. 一般化する東海方言データの地理的分布 (KenMap Ver.9.2 を用いて筆者作成)

表 22. 一般化する東海方言データ

図 12	県名	方言名	出典
<b>1</b>	愛知県	新城市	筆者データ <sup>10</sup>
<b>2</b>	静岡県	旧新居町	山口 (1985)

<sup>10</sup> 調査は、2020年11月に行った。調査協力者であるKM氏は、1960年生まれの女性である。0歳から23歳までの期間を、愛知県新城市で生活している。

## 4.6. 東北方言

本節では、東北方言においてラ行五段化現象がみられる地域を述べる。その上で、一般化する方言データの詳細を示す。

東北方言においてラ行五段化現象がみられるのは、日本海側に位置する、青森県・秋田県・山形県・新潟県である。このことは、小林（1996, 2004）、彦坂（2017）によって明らかになっている。以上の地域を、東北方言におけるデータの調査対象とする。本論文で一般化する方言データの詳細は、図13・表23に示すとおりである。

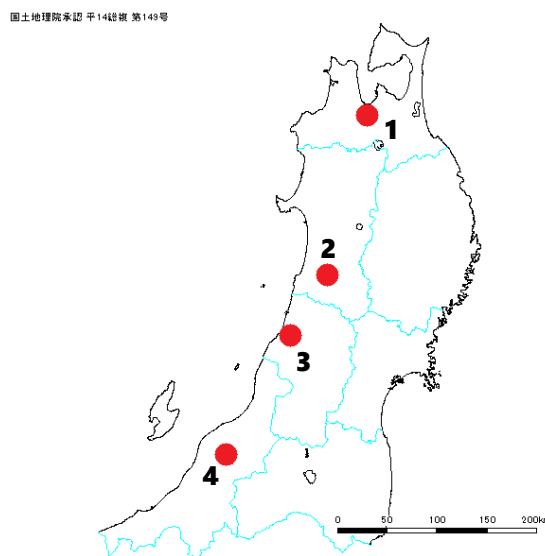


図13. 一般化する東北方言データの地理的分布 (KenMap Ver.9.2 を用いて筆者作成)

表23. 一般化する東北方言データ

図13	県名	方言名	出典
<b>1</b>	青森県	青森市	筆者データ <sup>11</sup>
<b>2</b>	秋田県	旧鳥海町	松丸（2002c,d）、日高（2002）
<b>3</b>	山形県	鶴岡市大山	大西（1994）
<b>4</b>	新潟県	旧栄村	加藤（1961）

<sup>11</sup> 調査は、2020年12月に行った。調査協力者であるOT氏は、1987年生まれの女性である。7歳から19歳までの期間を、青森県青森市で生活している。

## 5. ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化

本節では、ラ行五段化に関する動詞語幹を階層によって一般化する。「語幹末母音」と「語幹モーラ数」を基準にして、(32)の左からラ行五段化に関するしやすい順に示す。一方言において、階層中のある動詞語幹がラ行五段化に関する場合、それより左の動詞語幹もラ行五段化に関する場合。

### (32) ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化

- a. 語幹末母音: /i/ > /e/
- b. 語幹モーラ数: 1 モーラ > 2 モーラ

(32a)に示す語幹末母音の一般化について、語幹末母音が交替する「i/u 語幹」「e/u 語幹」の扱いは、§ 5.1.4 で詳述する。前者は語幹末母音/i/ として、後者は語幹末母音/e/ として分析することを論じる。(32b)に示す語幹モーラ数の一般化について、3 モーラ以上の語幹は一般化の対象外とする。その理由は、先行研究にデータがないためである。詳細は § 5.2.4 で述べる。§ 5.1 では(32a)に示す語幹末母音の一般化について、§ 5.2 では(32b)に示す語幹モーラ数の一般化について、それぞれ詳述する。§ 5.3 では、本論文における動詞語幹の一般化と先行研究の一般化を比較する。

### 5.1. 語幹末母音の一般化

本節では、ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化のうち、(32a)に示す語幹末母音の一般化について詳述する。

(32a)は、語幹末母音について、/i/ の語幹が/e/ の語幹よりラ行五段化を引き起こしやすいことを示している。一方言における特定のモーラ数の語幹について、語幹末母音/e/ の語幹がラ行五段化に関するなら、語幹末母音/i/ の語幹もラ行五段化に関する。表 24 に、この一般化によって説明・予測するパターンと予測しないパターンを示す。

表 24. 語幹末母音の一般化によって説明・予測するパターン

	/i/	/e/
パターン A	✗	✗
パターン B	○	✗
パターン C	○	○
(予測しないパターン)	✗	○

「○」は意志形・否定非過去形・過去形のいずれかにおいてラ行五段化を引き起こす、「✗」はラ行五段化を引き起こさないことを示している。パターン A は、語幹末母音/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化を引き起こさない。パターン B は、語幹末母音/i/ の語幹はラ行五段化を引き起こし、語幹末母音/e/ の語幹はラ行五段化を引き起こさない。パターン C は、語幹末母音/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化を引き起こす。語幹末母音が/e/ の語幹のみがラ行五段化する例は、この一般化による予測に反す

る。それに加えて、検討した方言にもこのパターンは存在しない。

一方言において複数のパターンが存在しうる。これらのパターンは、特定のモーラ数の語幹について、語幹末母音の条件を説明するからである。例えば、§3.2.2に示した九重町方言（糸井1964）は、1モーラ語幹についてはパターンB、2モーラ語幹についてはパターンAである。

(32a)に示す語幹末母音の一般化は、一方言における特定のモーラ数の語幹について、ラ行五段化に関与する条件を予測するものもある。従って、本論文では一般化の対象としていない方言データにおいても、(32a)の一般化が成立するかどうか検証することが可能である。

以下では、パターンA（§5.1.1）・パターンB（§5.1.2）・パターンC（§5.2.3）のそれぞれについて、一般化した方言からデータを挙げて詳述する。§5.2.4では、語幹末母音が交替する「i/u 語幹」「e/u 語幹」について、語幹末母音の一般化における扱いを述べる。

### 5.1.1. ラ行五段化に関与しない場合（パターンA）

本節では、語幹末母音が/i/の語幹も/e/の語幹もラ行五段化を引き起こさない「パターンA」について、該当する方言データを挙げる。(33)–(34)に示すとおりである。

#### (33) 愛媛県宇和島市方言（筆者データ）【1モーラ語幹】

a.	<i>min</i>	b.	<i>nen</i>
	mi-n		ne-n
	見る-NEG.NPST		寝る-NEG.NPST
	「見ない」		「寝ない」

#### (34) 大分県九重町方言（糸井1964）【2モーラ語幹】

a.	<i>okin</i>	b.	<i>uke-n</i>
	oki-n		uke-n
	起きる-NEG.NPST		受ける-NEG.NPST
	「起きない」		「受けない」

### 5.1.2. 語幹末母音が/i/の語幹（パターンB）

本節では、語幹末母音が/i/の語幹はラ行五段化を引き起こし、語幹末母音が/e/の語幹はラ行五段化を引き起こさない「パターンB」について、該当する方言データを挙げる。(35)–(36)に示すとおりである。

#### (35) 長崎県長崎市方言（塚本1978）【1モーラ語幹】

a.	<i>kiran</i>	b.	<i>den</i>
	kir-a-n		de-n
	着る-THM.IRR-NEG.NPST		出る-NEG.NPST
	「着ない」		「出ない」

(36) 宮崎県椎葉村尾前方言 (筆者データ) 【 2 モーラ語幹】

a.	<i>okiran</i>	b.	<i>huten</i>
	okir-a-n		hute-n
	起きる-THM.IRR-NEG.NPST		捨てる-NEG.NPST
	「起きない」		「捨てない」

5.1.3. 語幹末母音が/i/, /e/ の語幹 (パターン C)

本節では、語幹末母音が/i/, /e/ の語幹が両者ともラ行五段化を引き起こす「パターン C」について、該当する方言データを挙げる。(37)–(42)に示すとおりである。

(37) 宮崎県椎葉村尾前方言 (筆者データ) 【 1 モーラ語幹】

a.	<i>kiran</i>	b.	<i>deran</i>
	kir-a-n		der-a-n
	着る-THM.IRR-NEG.NPST		出る-THM.IRR-NEG.NPST
	「着ない」		「出ない」

(38) 愛媛県旧明浜町方言 (野林 1970) 【 1 モーラ語幹】

a.	<i>miran</i>	b.	<i>neran</i>
	mir-a-n		ner-a-n
	見る-THM.IRR-NEG.NPST		寝る-THM.IRR-NEG.NPST
	「見ない」		「寝ない」

(39) 新潟県旧栄村方言 (加藤 1961) 【 1 モーラ語幹】

a.	<i>mirɔɔ</i>	b.	<i>nerɔɔ</i>
	mir-a-u		ner-a-u
	見る-THM.IRR-VOL		寝よう-THM.IRR-VOL
	「見よう」		「寝よう」

(40) 島根県出雲市平田町方言 (筆者データ) 【 2 モーラ語幹】

a.	<i>okiran</i>	b.	<i>akeran</i>
	okir-a-n		aker-a-n
	起きる-THM.IRR-NEG.NPST		開ける-THM.IRR-NEG.NPST
	「起きない」		「開けない」

- (41) 奈良県十津川村方言 (平山 1979) 【 2 モーラ語幹】

a.	<i>okiran</i>	b.	<i>ukeran</i>
	okir-a-n		uker-a-n
	起きる-THM.IRR-NEG.NPST		受ける-THM.IRR-NEG.NPST
	「起きない」		「受けない」

- (42) 静岡県新居町方言 (山口 1985) 【 2 モーラ語幹】

a.	<i>okiran</i>	b.	<i>taberan</i>
	okir-a-n		taber-a-n
	起きる-THM.IRR-NEG.NPST		食べる-THM.IRR-NEG.NPST
	「起きない」		「食べない」

#### 5.1.4. 「i/u 語幹」「e/u 語幹」の扱い

本節では、i/u 語幹・e/u 語幹について、(32a)に示す語幹末母音の一般化における扱いを述べる。i/u 語幹は語幹末母音/i/、e/u 語幹の語幹末母音/e/ に該当する。§ 3.2.2 の表 13 に示した、大分県九重町方言 (糸井 1964) における i/u 語幹・e/u 語幹の動詞語形に着目する。表 13 に示したように、五行五段化に関与する語幹は、i/u 語幹であれば語幹末母音は/i/、e/u 語幹であれば語幹末母音は/e/ である。一方、i/u 語幹・e/u 語幹の語幹末母音が/u/ であるときに後続する接辞は限定されている。表 25 に、九重町方言における i/u 語幹・e/u 語幹の語形を示している。

表 25. 九重町方言の動詞語形 (糸井 1964) と基底表示 (筆者による分析)

	語幹	非過去	条件	過去
i/u 語幹 母音語幹	oki/oku- 「起きる」	<i>okuru</i> /oku-ru/	<i>okurjaa</i> /oku-rjaa/	<i>okita</i> /oki-ta/
	uke/uku- 「受ける」	<i>ukuru</i> /uku-ru/	<i>ukurjaa</i> /uku-rjaa/	<i>uketa</i> /uke-ta/
e/u 語幹				

ここに示すように、i/u 語幹・e/u 語幹の語幹末母音が/u/ であるとき、後続する接辞は非過去・条件などに限られている (小林 1997, 2004)。

なお、2 モーラ以上の i 語幹・i/u 語幹が存在しない方言が、大分県などに複数存在する (大分市元町方言; 糸井 1983, 大分市古国府方言; 糸井 1991, 旧川登村方言; 糸井 1959, 旧野津町西神野方言; 糸井 1960, 旧直入町長湯方言; 野林 1991)。他の方言において 2 モーラ以上の i 語幹・i/u 語幹に所属するような語彙は、これらの方言において e/u 語幹に所属している (例: /oke-/～/oku-/「起きる」, /ote-/～/otu-/「落ちる」など)。従って、これらの語幹は、語幹末母音の一般化における/e/ に該当する。

## 5.2. 語幹モーラ数の一般化

本節では、ラ行五段化に関与する動詞語幹の一般化のうち、(32b)に示す語幹モーラ数の一般化について詳述する。

(32b)は、1モーラの母音語幹が2モーラの母音語幹よりラ行五段化を引き起こしやすいことを示している。一方言における特定の語幹末母音の語幹について、2モーラの母音語幹がラ行五段化に関与するなら、1モーラの母音語幹もラ行五段化に関与する。表26に、この一般化によって説明・予測するパターンと予測しないパターンを示す。

表26. 語幹モーラ数の一般化によって説明・予測するパターン

	1	2
パターンa	✗	✗
パターンb	○	✗
パターンc	○	○
(予測しないパターン)	✗	○

「○」は、意志形・否定非過去形・過去形のいずれかにおいてラ行五段化を引き起こす、「✗」はラ行五段化を引き起こさないことを示している。パターンaは、1モーラ語幹も2モーラ語幹も、ラ行五段化を引き起こさない。パターンbは、1モーラ語幹はラ行五段化を引き起こし、2モーラ語幹はラ行五段化を引き起こさない。パターンcは、1モーラ語幹も2モーラ語幹も、ラ行五段化を引き起こす。2モーラ語幹のみがラ行五段化するパターンは、この一般化による予測に反する。それに加えて、検討した方言にも存在しない。

一方言において複数のパターンが存在しうる。これらのパターンでは、特定の語幹末母音の語幹について、語幹モーラ数の条件を説明するからである。例えば、§3.2.1に示した尾前方言は、語幹末母音によってパターンが異なる。語幹末母音が/i/の語幹についてはパターンc、語幹末母音が/e/の語幹についてはパターンbである。

(32b)に示す語幹モーラ数の一般化は、一方言における特定の語幹末母音の語幹について、ラ行五段化の条件を予測するものもある。従って、本論文では一般化の対象としていない方言データにおいても、(32b)の一般化が成立するかどうか検証することが可能である。

以下では、パターンa(§5.2.1)・パターンb(§5.2.2)・パターンc(§5.2.3)のそれぞれについて、一般化した方言からデータを挙げて詳述する。§5.2.4では、3モーラ以上の語幹は一般化の対象外とすることを述べる。

### 5.2.1. ラ行五段化に関与しない語幹（パターンa）

本節では、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化を引き起こさない「パターンa」について、該当する方言データを挙げる。(43)–(44)に示すとおりである。

(43) 愛媛県宇和島市方言 (筆者データ) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>min</i>	b.	<i>okin</i>
	<i>mi-n</i>		<i>oki-n</i>
	見る-NEG.NPST		起きる-NEG.NPST
	「見ない」		「起きない」

(44) 長崎県長崎市方言 (塚本 1978) 【語幹末母音/e/】

a.	<i>den</i>	b.	<i>agen</i>
	<i>de-n</i>		<i>age-n</i>
	出る-NEG.NPST		上げる-NEG.NPST
	「出ない」		「上げない」

### 5.2.2. 1モーラの語幹 (パターンb)

本節では、1モーラ語幹はラ行五段化を引き起こし、2モーラ語幹はラ行五段化を引き起こさない「パターンb」について、該当する方言データを挙げる。(45)–(46)に示すとおりである。

(45) 大分県九重町方言 (糸井 1964) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>miran</i>	b.	<i>okin</i>
	<i>mir-a-n</i>		<i>oki-n</i>
	見る-THM-NEG.NPST		起きる-NEG.NPST
	「見ない」		「起きない」

(46) 宮崎県椎葉村尾前方言 (筆者データ) 【語幹末母音/e/】

a.	<i>neran</i>	b.	<i>huten</i>
	<i>ner-a-n</i>		<i>hute-n</i>
	寝る-THM-NEG.NPST		捨てる-NEG.NPST
	「寝ない」		「捨てない」

### 5.2.3. 1モーラ・2モーラの語幹 (パターンc)

本節では、1モーラ・2モーラの母音語幹が両者ともラ行五段化を引き起こす「パターンc」について、該当する方言データを挙げる。(47)–(52)に示すとおりである。

(47) 宮崎県椎葉村尾前方言 (筆者データ) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>miran</i>	b.	<i>okiran</i>
	<i>mir-a-n</i>		<i>okir-a-n</i>
	見る-THM.IRR-NEG.NPST		起きる-THM.IRR-NEG.NPST
	「見ない」		「起きない」

(48) 愛媛県旧明浜町方言 (野林 1970) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>miran</i>	b.	<i>okiran</i>
	<i>mir-a-n</i>		<i>okir-a-n</i>
	見る-THM.IRR-NEG.NPST		起きる-THM.IRR-NEG.NPST
	「見ない」		「起きない」

(49) 新潟県旧栄村方言 (加藤 1961) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>mirɔɔ</i>	b.	<i>okirɔɔ</i>
	<i>mir-a-u</i>		<i>okir-a-u</i>
	見る-THM.IRR-VOL		起きる-THM.IRR-VOL
	「見よう」		「起きよう」

(50) 島根県出雲市平田町方言 (筆者データ) 【語幹末母音/e/】

a.	<i>neran</i>	b.	<i>akeran</i>
	<i>ner-a-n</i>		<i>aker-a-n</i>
	寝る-THM.IRR-NEG.NPST		開ける-THM.IRR-NEG.NPST
	「寝ない」		「開けない」

(51) 奈良県十津川村方言 (平山 1979) 【語幹末母音/e/】

a.	<i>neran</i>	b.	<i>ukeran</i>
	<i>ner-a-n</i>		<i>uker-a-n</i>
	寝る-THM.IRR-NEG.NPST		受ける-THM.IRR-NEG.NPST
	「寝ない」		「受けない」

(52) 静岡県新居町方言 (山口 1985) 【語幹末母音/e/】

a.	<i>deran</i>	b.	<i>taberan</i>
	<i>der-a-n</i>		<i>taber-a-n</i>
	出る-THM.IRR-NEG.NPST		食べる-THM.IRR-NEG.NPST
	「出ない」		「食べない」

#### 5.2.4. 一般化の対象外とする語幹モーラ数: 3 モーラ以上

本節では、3 モーラ以上の母音語幹について、語幹モーラ数の一般化の対象外とすることを述べる。その理由は、先行研究にデータが示されていないためである。3 モーラ語幹について、1 モーラ語幹とは異なる、2 モーラ語幹と同様の形態論的振る舞いをする方言がある。例えば、尾前方言において、3 モーラの e/u 語幹/usite-/~/usitu-/「捨てる」は2 モーラの e/u 語幹/hute-/~/hutu-/「捨てる」と同じく、ラ行五段化に関与しない。大分県九重町方言 (糸井 1964) においても、3 モーラの e/u 語幹/tanne-/~/tannu-/「尋ねる」は、2 モーラの e/u 語幹/uke-/~/uku-/「受ける」と同じく、ラ行五段化に関与しない。

3 モーラの母音語幹について、以上の先行研究にあるデータを考慮した場合、(32b)に示す語幹モーラ数の一般化に位置づける方法として(53)に示す3通りがある。

(53) 語幹モーラ数の一般化に、3 モーラ語幹を位置づける方法

- a. 1 モーラ > 3 モーラ > 2 モーラ
- b. 1 モーラ > 2 モーラ = 3 モーラ
- c. 1 モーラ > 2 モーラ > 3 モーラ

しかし、先行研究において、3 モーラ以上の母音語幹についてデータがあるのは上述の方言のみである。これらのデータからは、(53a-c)のどれが妥当か判断することができない。従って、3 モーラ以上の母音語幹については語幹モーラ数の一般化の対象外とする。

### 5.3. 先行研究との比較

(32)に示す動詞語幹の一般化は、先行研究の指摘とも矛盾しないものである。

陣内（1989）、彦坂（1999, 2001）などは、個別方言において、1 モーラ語幹はラ行五段化しやすいとする。これは、(32b)に示す、1 モーラ語幹が2 モーラ語幹よりもラ行五段化を引き起こしやすいという一般化と矛盾しない。§3.4.1で言及した黒木（2019）は、語幹末母音が/i/ の語幹と語幹末母音が/e/ の1 モーラ語幹（/ne(r)/ 「寝る」、/de(r)/ 「出る」）は、ラ行五段化しやすいとする。/ne(r)/ 「寝る」、/de(r)/ 「出る」は1 モーラ語幹であり、(32b)に示す語幹モーラ数の一般化と矛盾しない。加えて、語幹末母音が/i/ の語幹（i 語幹・i/u 語幹）は、モーラ数にかかわらずラ行五段化しやすいことは、(32a)に示す、語幹末母音が/i/ の語幹が/e/ の語幹よりもラ行五段化を引き起こしやすいという一般化と矛盾しない。

(32)に示す動詞語幹の一般化は、先行研究の指摘する一般化とも矛盾しないものである。その上で、本論文の一般化は、ラ行五段化に関与する動詞語幹の条件を語幹末母音と語幹モーラ数に分け、それについて先行研究で述べられてきた傾向を定式化する初めてのものである。

## 6. ラ行五段化に関する接辞の一般化

本節では、ラ行五段化に関する接辞を階層によって一般化する。(54)の左から関与しやすい順に示す。一方言における特定の語幹末母音・語幹モーラ数の語幹について、階層中のある接辞がラ行五段化を引き起こす場合、それより左の接辞もラ行五段化を引き起こす。

- (54) ラ行五段化に関する接辞の一般化  
意志 > 否定非過去 > 過去

(54)は、意志、否定非過去、過去の順に、ラ行五段化を引き起こしやすいことを示している。命令接辞、否定過去接辞、連用形に後続する接辞、使役接辞は、この一般化の対象外である（詳細は§6.5で述べる）。表27に、この一般化によって説明・予測するパターンと、予測しないパターンを示す。

表27. 接辞の一般化によって説明・予測するパターン

	意志	否定非過去	過去
パターンα	✗	✗	✗
パターンβ	○	✗	✗
パターンγ	○	○	✗
パターンδ	○	○	○
(予測しないパターン)	○	✗	○
(予測しないパターン)	✗	○	○
(予測しないパターン)	✗	○	✗
(予測しないパターン)	✗	✗	○

パターンαは、後続する接辞にかかわらずラ行五段化に関与しない。パターンβは、意志接辞のみがラ行五段化に関与する。パターンγは、意志接辞・否定非過去接辞がラ行五段化に関与する。パターンδは、意志接辞・否定非過去接辞・過去接辞の、全ての接辞がラ行五段化に関与する。これ以外のパターンは、一般化による予測に反する。それに加えて、検討した方言にも存在しない。

一方言において複数のパターンが存在しうる。これらのパターンでは、一方言における特定の語幹末母音・語幹モーラ数の語幹について、接辞の条件を説明するからである。例えば、§3.2.1に示した九重町方言（糸井1964）は、語幹モーラ数によってパターンが異なる。1モーラ語幹についてはパターンγ、2モーラ語幹についてはパターンαである。

(54)の一般化は、ある方言におけるラ行五段化の条件を予測するものもある。従って、本論文では一般化の対象としていない方言においても、(54)の一般化が成立するかどうか、検証することが可能である。

以下では、パターンα（§6.1）・パターンβ（§6.2）・パターンγ（§6.3）・パターンδ（§6.4）のそれぞれについて、一般化した方言からデータを挙げて詳述する。§6.5では、一般化の対象外とする接辞とその理由を述べる。§6.6では、(54)の一般化を先行研究と比較する。

## 6.1. ラ行五段化に関与しない場合（パターンα）

本節では、後続する接辞にかかわらずラ行五段化に関与しない「パターンα」について、該当する方言データを挙げる。(55)–(58)に示すとおりである。

- (55) 愛媛県宇和島市方言（筆者データ）【語幹末母音/i/・1モーラ語幹】

a.	<i>mijoo</i>	b.	<i>min</i>	c.	<i>mita</i>
	mi-joo		mi-n		mi-ta
	見る-VOL		見る-NEG.NPST		見る-PST
	「見よう」		「見ない」		「見た」

- (56) 大分県九重町方言（糸井 1964）【語幹末母音/i/・2モーラ語幹】

a.	<i>okjuu</i>	b.	<i>okin</i>	c.	<i>okita</i>
	oki-u		oki-n		oki-ta
	起きる-VOL		起きる-NEG.NPST		起きる-PST
	「起きよう」		「起きない」		「起きた」

- (57) 青森県青森市方言（筆者データ）【語幹末母音/e/・1モーラ語幹】

a.	<i>nejo</i>	b.	<i>nene</i>	c.	<i>neta</i>
	ne-jo		ne-ne-Ø		ne-ta
	寝る-VOL		寝る-NEG-NPST		寝る-PST
	「寝よう」		「寝ない」		「寝た」 <sup>12</sup>

- (58) 宮崎県椎葉村尾前方言（筆者データ）【語幹末母音/e/・2モーラ語幹】

a.	<i>hutjuu</i>	b.	<i>huten</i>	c.	<i>huteta</i>
	hute-u		hute-n		hute-ta
	捨てる-VOL		捨てる-NEG.NPST		捨てる-PST
	「捨てよう」		「捨てない」		「捨てた」

<sup>12</sup> 青森県青森市方言において、1モーラe語幹/ne-/「寝る」の過去形は、*neta*に加えて*netta*も許容される。継起形においても、*nete*に加えて*nette*も許容される。これらの語形*netta*, *nette*について、ラ行五段化形式であるか否かは現時点で不明である。現時点で、両者に意味的差異は確認されていない。語幹/ne-/「寝る」について、これ以外の接辞が後続するとき、ラ行五段化形式は許容されない。同じく1モーラe語幹/de-/「出る」の過去形については、*deta*であり*detta*は許容されない。これ以外の接辞が後続するときも、ラ行五段化形式は許容されない。加えて、1モーラi語幹/mi-/「見る」、2モーラi語幹/oki-/「起きる」、2モーラe語幹/ake-/「開ける」について、意志形・否定非過去形・過去形においても、同様の現象はみられない。

大槻知世氏（p.c.）によると、同じような現象が動詞語幹/name-/「なめる」においてみられる。*/name-/「なめる」*の過去形は、*nameta*と*nametta*がある。これらの語形には意味的差異があり、前者は「人を馬鹿にした」という意味、後者は「(飴などを) 口に含む」という意味である。このように特定の語幹においてのみ、このような現象がみられる。従って現時点では、青森市方言におけるこのような現象は、語彙的に生じるものとして考えている。

## 6.2. 意志（パターンβ）

本節では、意志接辞のみがラ行五段化を引き起こす「パターン β」について、該当する方言データを挙げる。(59)–(62)に示すとおりである。

- (59) 新潟県旧栄村方言（加藤 1961）【語幹末母音/i/・1 モーラ語幹】

a.	<i>mirɔɔ</i>	b.	<i>min</i>	c.	<i>mita</i>
	<i>mir-a-u</i>		<i>mi-n</i>		<i>mi-ta</i>
	見る-THM.IRR-VOL		見る-NEG.NPST		見る-PST
	「見よう」		「見ない」		「見た」

- (60) 長崎県対馬市豊玉方言（原田 2006）【語幹末母音/i/・2 モーラ語幹】

a.	<i>okiroo</i>	b.	<i>okin</i>	c.	<i>okita</i>
	<i>okir-a-u</i>		<i>oki-n</i>		<i>oki-ta</i>
	起きる-THM.IRR-VOL		起きる-NEG.NPST		起きる-PST
	「起きよう」		「起きない」		「起きた」

- (61) 高知県宿毛市方言（松丸 2001a,b）【語幹末母音/e/・1 モーラ語幹】

a.	<i>neroɔ</i>	b.	<i>nen</i>	c.	<i>neta</i>
	<i>ner-a-u</i>		<i>ne-n</i>		<i>ne-ta</i>
	寝る-THM.IRR-VOL		寝る-NEG.NPST		寝る-PST
	「寝よう」		「寝ない」		「寝た」

- (62) 和歌山県田辺市方言（平澤 1982）【語幹末母音/e/・2 モーラ語幹】

a.	<i>ukeroo</i>	b.	<i>uke-n</i>	c.	<i>uke-ta</i>
	<i>uker-a-u</i>		<i>uke-n</i>		<i>uke-ta</i>
	受ける-THM.IRR-VOL		受ける-NEG.NPST		受ける-PST
	「受けよう」		「受けない」		「受けた」

## 6.3. 意志・否定非過去（パターンγ）

本節では、意志接辞・否定非過去接辞がラ行五段化を引き起こす「パターン γ」について、該当する方言データを挙げる。(63)–(66)に示すとおりである。

- (63) 島根県出雲市平田町方言（筆者データ）【語幹末母音/i/・1 モーラ語幹】

a.	<i>mira</i>	b.	<i>miran</i>	c.	<i>mita</i>
	<i>mir-a-u</i>		<i>mir-a-n</i>		<i>mi-ta</i>
	見る-THM.IRR-VOL		見る-THM.IRR-NEG.NPST		見る-PST
	「見よう」		「見ない」		「見た」

- (64) 宮崎県椎葉村尾前方言 (筆者データ) 【語幹末母音/i/・2 モーラ語幹】

a.	<i>okiroo</i>	b.	<i>okiran</i>	c.	<i>okita</i>
	<i>okir-a-u</i>		<i>okir-a-n</i>		<i>oki-ta</i>
	起きる-THM.IRR-VOL		起きる-THM.IRR-NEG.NPST		起きる-PST
	「起きよう」		「起きない」		「起きた」

- (65) 奈良県十津川村方言 (平山 1979) 【語幹末母音/e/・1 モーラ語幹】

a.	<i>neroо</i>	b.	<i>neran</i>	c.	<i>neta</i>
	<i>ner-a-u</i>		<i>ner-a-n</i>		<i>ne-ta</i>
	寝る-THM.IRR-VOL		寝る-THM.IRR-NEG.NPST		寝る-PST
	「寝よう」		「寝ない」		「寝た」

- (66) 静岡県新居町方言 (山口 1985) 【語幹末母音/e/・2 モーラ語幹】

a.	<i>taberoо</i>	b.	<i>taberan</i>	c.	<i>tabeta</i>
	<i>taber-a-u</i>		<i>taber-a-n</i>		<i>tabe-ta</i>
	食べる-THM.IRR-VOL		食べる-THM.IRR-NEG.NPST		食べる-PST
	「食べよう」		「食べない」		「食べた」

#### 6.4. 意志・否定非過去・過去 (パターンδ)

本節では、意志接辞・否定非過去接辞・過去接辞の全てがラ行五段化を引き起こす「パターンδ」について、該当する方言データを挙げる。(67)に示すとおりである。

- (67) 宮崎県日の影町方言 (野元 1959) 【語幹末母音/i/・1 モーラ語幹】

a.	<i>miroо</i>	b.	<i>miran</i>	c.	<i>mitta</i>
	<i>mir-a-u</i>		<i>mir-a-n</i>		<i>mir-ta</i>
	見る-THM.IRR-VOL		見る-THM.IRR-NEG.NPST		見る-PST
	「見よう」		「見ない」		「見た」

- (68) 宮崎県日の影町方言 (野元 1959) 【語幹末母音/i/・2 モーラ語幹】

a.	<i>okiroо</i>	b.	<i>okiran</i>	c.	<i>okitta</i>
	<i>okir-a-u</i>		<i>okir-a-n</i>		<i>okir-ta</i>
	起きる-THM.IRR-VOL		起きる-THM.IRR-NEG.NPST		起きる-PST
	「起きよう」		「起きない」		「起きた」

このパターンδは、九州方言の一部にしかみられない。(67)(68)の宮崎県日の影町方言 (語幹末母音/e/・2 モーラ以外の母音語幹; 野元 1959) のほか、福岡県筑後市若菜方言 (語幹末母音/i/・2 モーラ語幹; 若菜 1990), 熊本県熊本市方言 (語幹末母音/i/・2 モーラ語幹; 水上 183), 熊本県荒尾市揚増永方言 (語幹末母音/i/・2 モーラ語幹; 野林 1966), 鹿児島県旧串木野市方言 (語幹末母音/i/・2 モーラ語幹; 黒木

2019), 鹿児島県旧市来町方言 (語幹末母音/e/・2 モーラ以外の母音語幹; 黒木 2019), 鹿児島県旧里村方言 (語幹末母音/i/・2 モーラ語幹; 黒木 2019), 鹿児島県旧下甑村手打方言 (語幹末母音/i/・2 モーラ語幹; 黒木 2019), 鹿児島県西之表市西之表方言 (語幹末母音/i/・2 モーラ語幹; 上村 1959) といった方言にみられる。

これらの方言におけるパターン  $\delta$  がみられる語幹について, ラ行五段化形式とともに非ラ行五段化形式も容認される。従って, パターン  $\delta$  がみられる語幹においても, 子音 r 終わりの語幹だけでなく母音終わりの語幹も設定する必要がある。

なお, 過去接辞と同じ形態論的振る舞いをする接辞に, 繙起接辞がある。先行研究にデータのあるものだけを考慮した場合, 動詞語幹に後続するときに同じ形態音韻規則が適用される, 繙起/-te/ (/ -ti/) も「過去」の位置に当てはまる。

## 6.5. 一般化の対象外とする接辞

本節では, (54)に示す接辞の一般化の対象外とする接辞を述べる。以下では, 命令接辞 (§ 6.5.1)・否定過去接辞 (§ 6.5.2)・連用形に後続する接辞 (§ 6.5.3)・使役接辞 (§ 6.5.4) について, 一般化の対象外とすることを述べる。

### 6.5.1. 命令接辞

命令形の変化形式は, ラ行五段化に関与する接辞の一般化の対象外とする。§ 3.6.2 に示したように, 命令形の変化形式に生じる r について, 語幹に属するか接辞に属するか共時的には判断できないからである。

しかし, 命令形の変化形式は, 関与する語幹末母音と語幹モーラ数について一般化することができる。§ 5 に示した, ラ行五段化に関与する動詞語幹の一般化と同様である。命令形の変化に関与する動詞語幹の一般化は, § 7 に詳述する。

### 6.5.2. 否定過去接辞

否定過去接辞は, ラ行五段化に関与する接辞の一般化には組み込まない。形態構造に大きな方言間バリエーションがあるからである (大西 2016)。以下では, 様々な形態論的振る舞いをする否定過去形の例を述べる。

否定過去接辞が, 否定非過去接辞と同じ形態論的振る舞いをする方言がある。尾前方言において, 否定過去/-datta/ をはじめ, 子音終わりの語幹に後続するときに語幹母音/-a/ を必要とする接辞 (否定継起/-nde/, /-zi/・否定条件/-nja(a)/) についても, 否定非過去/-n/ と同様の形態論的振る舞いをする。それぞれの語形は, § 3.2.1 の表 11・表 12 に示したとおりである。鹿児島県甑島瀬上方言においても, 同様の接辞が否定非過去/-n/ と同じ形態論的振る舞いをする (黒木 2019)。

一方, 否定過去接辞が, 否定非過去接辞と異なる形態論的振る舞いをする方言がある。高知県宿毛市方言 (松丸 2001a,b) において, 否定過去接辞/-zatta/, /-ratta/ は否定非過去接辞/-n/ と同様に, 子音終

わりの語幹に後続するとき語幹母音/-a/ を必要とする。しかし、前者はラ行五段化に関与するが、後者はラ行五段化に関与しない。

一部の九州方言において、動詞の否定過去形は、否定接辞を動詞語幹が、過去接辞を後続するコピュラ動詞が担うことで表す。福岡県柳川市方言（松岡 2021）において、動詞の否定過去形は、動詞否定形にコピュラの過去形を後続させる。例えば、*i* 語幹/mi(r)-/「見る」の否定過去形は、*miranjatta/mir-a-n=jar-ta/* 「見なかった」となる。

### 6.5.3. 連用形に後続する接辞

いわゆる連用形（動詞語幹に語幹母音/-i/ が後続したもの）に後続する接辞（例：西日本方言における非完結/-jor/、希求/-ta/ など）や、連用形単独の語形（例：中止形、連用命令形）は、ラ行五段化に関与する接辞の一般化には組み込まない。その理由は、先行研究に網羅的なデータがないためである。

連用形に後続する接辞は、ラ行五段化に関与する接辞の一般化に組み込むことができる可能性がある。個別の接辞の形式や機能を捨象して「連用形に後続する」ことだけに着目し、それらをまとめて「連用形に後続する接辞」とする。先行研究にあるデータだけを考慮した場合、「連用形に後続する接辞」は、ラ行五段化に関与する接辞の一般化中の「否定非過去」と「過去」の間に位置づけることが可能である。このことを(69)に示す。

- (69) ラ行五段化に関与する接辞の一般化（「連用形に後続する接辞」を含む）  
意志 > 否定非過去 > 連用形に後続する接辞 > 過去

しかし、§ 3.3 に示した全ての方言において、「連用形に後続する接辞」のデータが示されているわけではない。加えて、この「連用形に後続する接辞」は、それぞれの方言によって接辞の形態素が異なるため、それらを全て「連用形に後続する接辞」と一括して考えることが可能であるか不明である。§ 6.5.2 において、高知県宿毛市方言における否定非過去形と否定過去形の例で示したように、同じ語幹に後続する接辞でも、異なる形態論的振る舞いをする可能性がある。全ての方言において、同じ形式・機能をもち連用形に後続する接辞は、現時点では見つかっていない。

### 6.5.4. 使役接辞

使役接辞（例：*/-sase/* など）も、ラ行五段化に関与する方言がある。しかし、ラ行五段化に関与する接辞の一般化の対象外とする。その理由は、先行研究に網羅的なデータがないためである。これらの接辞について、ラ行五段化に関与する接辞の階層によって一般化できるかどうかは、現時点では不明である。

## 6.6. 先行研究との比較

(54)に示す接辞の一般化は、先行研究の記述とも矛盾しない。§4.1で取り上げた陣内（1989）は、福岡市方言について高年層と若年層のデータを比較し、ラ行五段化に関与する接辞を階層によって一般化している。(70)に再掲する。

- (70) 福岡市方言においてラ行五段化に関与する活用形  
命令形 > 意志形 > 未然形 > 連用形 > 過去形

(70)のうち、命令接辞と連用形に後続する接辞は一般化の対象外である。命令形の変化形式は、§3.6.2に示したように、生じる *r* が語幹に属するか接辞に属するか共時的には判断できないからである。連用形に後続する接辞は、§6.5.3に示したように、先行研究に網羅的なデータが無いためである。これ以外の接辞については、(54)に示す一般化と順序が一致しており、陣内（1989）に矛盾しない一般化となっている。

(54)に示す一般化は、ラ行五段化に関与する接辞について、通方言的に説明することができる一般化を初めて提示するものである。

## 7. 命令形の変化

本節では、命令形の変化に関する動詞語幹について階層によって一般化する。(54)に示した、ラ行五段化に関する接辞の一般化に、命令接辞は含まれていない。これは、§ 3.6.2 で述べたように、いわゆる命令形の変化形式について、生じる *r* が語幹に属するか接辞に属するか共時的には判断できないからである。

しかし、命令形の変化に関する動詞語幹は、(32)に示したラ行五段化に関する動詞語幹の一般化と同様に、(71)に示す階層によって一般化することができる。

### (71) 命令形の変化に関する動詞語幹の一般化

- a. 語幹末母音: /i/ > /e/
- b. 語幹モーラ数: 1 モーラ > 2 モーラ

このように、命令形の変化に関する動詞語幹についても、(32)に示したラ行五段化に関する動詞語幹の一般化と同様に一般化できる。この一般化が成立する動機については、§ 8 で詳述する。

§ 7.1 では(71a)に示す語幹末母音の一般化について、§ 7.2 では(71b)に示す語幹モーラ数の一般化について、それぞれ詳述する。

### 7.1. 語幹末母音に関する一般化

本節では、ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化のうち、(71a)に示す語幹末母音の一般化について詳述する。

(71a)は、語幹末母音について、/i/ の語幹が/e/ の語幹より命令形の変化を引き起こしやすいことを示している。一方言において、語幹末母音が/e/ の語幹が命令形の変化に関するなら、語幹末母音が/i/ の語幹も命令形の変化に関する。表 28 に、この一般化によって説明・予測するパターンと予測しないパターンを示す。

表 28. 命令形の変化と語幹末母音の一般化

	/i/	/e/
パターン A	✗	✗
パターン B	○	✗
パターン C	○	○
(予測しないパターン)	✗	○

「○」は命令形の変化を引き起こす、「✗」は命令形の変化を引き起こさないことを示している。パターン A は、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化を引き起こさない。パターン B は、語幹末母音が/i/ の語幹のみが命令形の変化を引き起こす。パターン C は、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化を引き起こす。語幹末母音が/e/ の語幹のみがラ行五段化する例は、この一般化

による予測に反する。それに加えて、検討した方言にもこのパターンは存在しない。

一方言において複数のパターンが存在しうる。これらのパターンでは、特定のモーラ数の語幹について、語幹末母音の条件を説明するからである。例えば、§3.2.1に示した尾前方方言は、1モーラ語幹についてはパターンC、2モーラ語幹についてはパターンBである。

(71a)に示す語幹末母音の一般化は、一方言における特定のモーラ数の語幹について、命令形の変化に関与する条件を予測するものもある。従って、本論文では一般化の対象としていない方言データにおいても、(71a)の一般化が成立するかどうか検証することが可能である。

以下では、パターンA(§7.1.1)・パターンB(§7.1.2)・パターンC(§7.1.3)のそれぞれについて、一般化した方言からデータを挙げて詳述する。

### 7.1.1. 命令形の変化に関与しない場合（パターンA）

本節では、語幹末母音が/i/の語幹も/e/の語幹も命令形の変化を引き起こさない「パターンA」について、該当する方言データを挙げる。(72)–(75)に示すとおりである。

#### (72) 愛媛県宇和島市方言（筆者データ）【1モーラ語幹】

a.	<i>mii</i>	b.	<i>nee</i>
	<i>mi-i</i>		<i>ne-i</i>
	見る-IMP		寝る-IMP
	「見ろ」		「寝ろ」

#### (73) 青森県青森市方言（筆者データ）【1モーラ語幹】

a.	<i>ogiro</i>	b.	<i>agero</i>
	<i>ogi-ro</i>		<i>age-ro</i>
	起きる-IMP		開ける-IMP
	「起きろ」		「開けろ」

#### (74) 長崎県対馬市豊玉方言（原田 2006）【2モーラ語幹】

a.	<i>okiro</i>	b.	<i>akero</i>
	<i>oki-ro</i>		<i>ake-ro</i>
	起きる-IMP		開ける-IMP
	「起きろ」		「開けろ」

#### (75) 奈良県十津川村方言（平山 1979）【2モーラ語幹】

a.	<i>okii</i>	b.	<i>ukee</i>
	<i>oki-i</i>		<i>uke-i</i>
	起きる-IMP		受ける-IMP
	「起きろ」		「受けろ」

### 7.1.2. 語幹末母音が/i/ の語幹（パターンB）

本節では、語幹末母音が/i/ の語幹は命令形の変化を引き起こし、語幹末母音が/e/ の語幹は命令形の変化を引き起こさない「パターンB」について、該当する方言データを挙げる。(76)–(77)に示すとおりである。

- (76) 長崎県長崎市方言（塚本 1978）【1モーラ語幹】

a.	<i>kire</i>	b.	<i>dero</i>
	<i>ki-re</i>		<i>de-ro</i>
	着る-IMP		出る-IMP
	「着ろ」		「出ろ」

- (77) 宮崎県椎葉村尾前方言（筆者データ）【2モーラ語幹】

a.	<i>okire</i>	b.	<i>hutjee</i>
	<i>oki-re</i>		<i>hute-i</i>
	起きる-IMP		捨てる-IMP
	「起きろ」		「捨てろ」

### 7.1.3. 語幹末母音が/i/, /e/ の語幹（パターンC）

本節では、語幹末母音が/i/ の語幹・語幹末母音が/e/ の語幹が両者とも命令形の変化を引き起こす「パターンC」について、該当する方言データを挙げる。(78)–(83)に示すとおりである。

- (78) 宮崎県椎葉村尾前方言（筆者データ）【1モーラ語幹】

a.	<i>kire</i>	b.	<i>dere</i>
	<i>ki-re</i>		<i>de-re</i>
	着る-IMP		出る-IMP
	「着ろ」		「出ろ」

- (79) 愛媛県旧明浜町方言（野林 1970）【1モーラ語幹】

a.	<i>mire</i>	b.	<i>nere</i>
	<i>mi-re</i>		<i>ne-re</i>
	見る-IMP		寝る-IMP
	「見ろ」		「寝ろ」

- (80) 島根県出雲市平田町方言（筆者データ）【1モーラ語幹】

a.	<i>mire</i>	b.	<i>nere</i>
	<i>mi-re</i>		<i>ne-re</i>
	見る-IMP		寝る-IMP
	「見ろ」		「寝ろ」

- (81) 兵庫県明石市方言 (橋 1966) 【 2 モーラ語幹 】

a.	<i>okire</i>	b.	<i>sitere</i>
	oki-re		site-re
	起きる-IMP		捨てる-IMP
	「起きろ」		「捨てろ」

- (82) 静岡県新居町方言 (山口 1985) 【 2 モーラ語幹 】

a.	<i>okire</i>	b.	<i>tabere</i>
	oki-re		tabe-re
	起きる-IMP		食べる-IMP
	「起きろ」		「食べろ」

- (83) 山形県鶴岡市大山方言 (大西 1994) 【 2 モーラ語幹 】

a.	<i>ogire</i>	b.	<i>agere</i>
	ogi-re		age-re
	起きる-IMP		開ける-IMP
	「起きろ」		「開けろ」

## 7.2. 語幹モーラ数に関する一般化

本節では、命令形の変化に関与する動詞語幹の一般化のうち、(71b)に示すモーラ数の一般化について詳述する。

(71b)は、1 モーラの母音語幹が 2 モーラの母音語幹よりも、命令形の変化を引き起こしやすいことを示している。一方言において、2 モーラの母音語幹が命令形の変化に関与するなら、1 モーラの母音語幹も命令形の変化に関与する。表 29 に、この一般化によって説明・予測するパターンと、予測しないパターンを示す。

表 29. 命令形の変化と語幹モーラ数の一般化

	1	2
パターン a	✗	✗
パターン b	○	✗
パターン c	○	○
(予測しないパターン)	✗	○

「○」は命令形の変化を引き起こす、「✗」は命令形の変化を引き起こさないことを示している。パターン a は、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹も命令形の変化を引き起こさない。パターン b は、1 モーラ語幹は命令形の変化を引き起こし、2 モーラ語幹は命令形の変化を引き起こさない。パターン c は、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹も命令形の変化を引き起こす。2 モーラ語幹のみが命令形の変化に関与する

パターンは、この一般化による予測に反する。それに加えて、検討した方言にも存在しない。

一方言において複数のパターンが存在しうる。これらのパターンでは、特定の語幹末母音の語幹について、語幹モーラ数の条件を説明するからである。例えば、§3.2.1に示した尾前方言は、語幹末母音によってパターンが異なる。語幹末母音が/i/の語幹についてはパターンc、語幹末母音が/e/の語幹についてはパターンbである。

(71b)に示す語幹モーラ数の一般化は、一方言における特定の語幹末母音の語幹について、命令形の変化の条件を予測するものもある。従って、本論文では一般化の対象としていない方言データにおいても、(71b)の一般化が成立するかどうか検証することが可能である。

以下では、パターンa(§7.2.1)・パターンb(§7.2.2)・パターンc(§7.2.3)のそれぞれについて、一般化した方言からデータを挙げて詳述する。

### 7.2.1. 命令形の変化に関与しない語幹（パターンa）

本節では、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化を引き起こさない「パターンa」について、該当する方言データを挙げる。(84)–(86)に示すとおりである。

#### (84) 愛媛県宇和島市方言（筆者データ）【語幹末母音/i/】

a.	<i>mii</i>	b.	<i>oki</i> <i>i</i>
	<i>mi-i</i>		<i>oki-i</i>
	見る-IMP		起きる-IMP
	「見ろ」		「起きろ」

#### (85) 長崎県長崎市方言（塚本1978）【語幹末母音/e/】

a.	<i>dero</i>	b.	<i>agero</i>
	<i>de-ro</i>		<i>age-ro</i>
	出る-IMP		上げる-IMP
	「出ろ」		「上げろ」

#### (86) 和歌山県田辺市方言（平澤1982）【語幹末母音/e/】

a.	<i>nee</i>	b.	<i>ukee</i>
	<i>ne-i</i>		<i>uke-i</i>
	寝る-IMP		受ける-IMP
	「寝ろ」		「受けろ」

### 7.2.2. 1モーラの語幹（パターンb）

本節では、1モーラ語幹は命令形の変化を引き起こし、2モーラ語幹は命令形の変化を引き起こさない「パターンb」について、該当する方言データを挙げる。(87)–(88)に示すとおりである。

- (87) 長崎県対馬市豊玉方言 (原田 2006) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>mire</i>	b.	<i>okiro</i>
	mi-re		oki-ro
	見る-IMP		起きる-IMP
	「見ろ」		「起きろ」

- (88) 宮崎県椎葉村尾前方言 (筆者データ) 【語幹末母音/e/】

a.	<i>nere</i>	b.	<i>hutjee</i>
	ne-re		hute-i
	寝る-IMP		捨てる-IMP
	「寝ろ」		「捨てろ」

### 7.2.3. 1モーラ・2モーラの語幹（パターンc）

1モーラの母音語幹・2モーラの母音語幹が両者とも命令形の変化を引き起こす「パターンc」について、該当する方言データを挙げる。(89)–(94)に示すとおりである。

- (89) 宮崎県椎葉村尾前方言 (筆者データ) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>mire</i>	b.	<i>okire</i>
	mi-re		oki-re
	見る-IMP		起きる-IMP
	「見ろ」		「起きろ」

- (90) 島根県出雲市平田方言 (筆者データ) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>mire</i>	b.	<i>okire</i>
	mi-re		oki-re
	見る-IMP		起きる-IMP
	「見ろ」		「起きろ」

- (91) 兵庫県明石市方言 (橋 1966) 【語幹末母音/i/】

a.	<i>mire</i>	b.	<i>okire</i>
	mi-re		oki-re
	見る-IMP		起きる-IMP
	「見ろ」		「起きろ」

(92) 愛媛県旧明浜町方言 (野林 1970) 【語幹末母音/e/】

- |    |             |    |              |
|----|-------------|----|--------------|
| a. | <i>nere</i> | b. | <i>ukere</i> |
|    | ne-re       |    | uke-re       |
|    | 寝る-IMP      |    | 受ける-IMP      |
|    | 「寝ろ」        |    | 「受けろ」        |

(93) 静岡県新居町方言 (山口 1985) 【語幹末母音/e/】

- |    |             |    |               |
|----|-------------|----|---------------|
| a. | <i>dere</i> | b. | <i>tabere</i> |
|    | de-re       |    | tabe-re       |
|    | 出る-IMP      |    | 食べる-IMP       |
|    | 「出ろ」        |    | 「食べろ」         |

(94) 山形県鶴岡市大山方言 (大西 1994) 【語幹末母音/e/】

- |    |             |    |              |
|----|-------------|----|--------------|
| a. | <i>nere</i> | b. | <i>agere</i> |
|    | ne-re       |    | age-re       |
|    | 寝る-IMP      |    | 開ける-IMP      |
|    | 「寝ろ」        |    | 「開けろ」        |

## 8. 記述的一般化に対する理論的解釈

本章では、§ 5–6 で行った一般化がなぜ成立するのかについて、理論的な解釈を行う。§ 5–6 で行った一般化を、(95)(96)に再掲する。

(95) ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化

- a. 語幹末母音: /i/ > /e/
- b. 語幹モーラ数: 1 モーラ > 2 モーラ

(96) ラ行五段化に関する接辞の一般化

意志 > 否定非過去 > 過去

§ 8.1 では、(95)(96)の階層が、語形の使用頻度を反映していることを示す。このことから、(95)(96)のが、語形の使用頻度が低いほど類推変化が生じやすいという、通方言的な傾向を反映したものであると解釈する。つまり、(95)(96)の階層は、特定の日本語方言において散発的に見られる現象から帰納される偶發的な一般化ではなく、語形の使用頻度という通方言的な基盤を背景としていることを主張する。§ 8.2 では、(95)(96)の階層が、ラ行五段化の通時的变化過程を反映していると考えて矛盾がないことを示す。

### 8.1. 使用頻度の反映

本節では、(95)(96)に示す一般化がなぜ成立するか、語形の使用頻度に着目して説明する。

説明には、用法基盤モデル (usage-based model) の枠組みを用いる。Bybee (1985, 2001), Phillips (2001) によると、類推変化 (analogical change) は使用頻度の低い語形のほうが生じやすく、使用頻度の高い語形は類推変化が生じにくい。

以上のことを考えると、ラ行五段化の動詞語幹と接辞に関する(95)(96)の階層は、使用頻度を反映していると予測することができる。§ 3.7 で示したように、ラ行五段化は、動詞語幹クラスのうち最も語彙数の多い r 語幹に合流させるという、母音語幹から子音 r 語幹への類推変化であると考えることができる。ここから、ラ行五段化は使用頻度の低い語形の方が生じやすいと考えることができる。従って、ラ行五段化の動詞語幹と接辞に関する(95)(96)の階層は、左から右に使用頻度の少ない順に並んでいると予測することができる。

本節では、以上の予測が妥当であることを、語形の使用頻度を調査することによって示す。日本語諸方言における動詞語形について、(95)(96)に示した動詞語幹や接辞を含む、動詞語形のトークン頻度を調査する。調査には、国立国語研究所 (2020) 『日本語諸方言コーパス』 (COJADS; Corpus of Japanese Dialects)<sup>13</sup> を用いる。§ 8.1.1 では動詞語幹の使用頻度を、§ 8.1.2 では接辞の使用頻度を調査する。その結果、(95)(96)の階層の左から、使用頻度の少ない順に並んでいることを示す。

<sup>13</sup> 調査は、2020年11月に行った。この時点において、COJADSは、文化庁が1977～1985年に実施された「各地方言収集緊急調査」の方言談話の収録データを使用している。詳細は、<https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html> を参照。

### 8.1.1. 動詞語幹

本節では、(95)に示す動詞語幹の一般化について、動詞語幹の使用頻度から説明する。日本語諸方言における動詞語形の使用頻度について、語幹末母音と語幹モーラ数ごとに、COJADSによる調査結果を表30に示す。

表30. 日本語諸方言54地点における動詞語幹の使用頻度

語幹末母音	1モーラ	2モーラ	
/i/	160	368	528 (1.96%)
/e/	788	2,785	3,573 (13.29%)
	948 (3.53%)	3,153 (11.73%)	26,877

表30の一番右の列に着目する。動詞語幹の使用頻度を語幹末母音についてみると、語幹末母音が/i/の語幹 < 語幹末母音が/e/の語幹となっている。これは、(95a)に示す語幹末母音の一般化と照らし、使用頻度の低い語形のほうが類推変化を生じやすいという予測と一致している。次に、表30の一番下の行に着目する。動詞語幹の使用頻度を語幹モーラ数についてみると、1モーラ語幹 < 2モーラ語幹となっている。これも、(95b)に示す語幹モーラ数の一般化と照らし、使用頻度の低い語形のほうが類推変化を生じやすいという予測と一致している。このように、ラ行五段化に関与する動詞語幹の一般化(95)は、動詞語幹の使用頻度を反映していると考える。加えて、ラ行五段化と同様に一般化した、命令形の変化に関与する動詞語幹の一般化(71)についても、動詞語幹の使用頻度を反映していると考える。ラ行五段化も命令形の変化も、動詞語幹の一般化は語形の使用頻度が低い順に並んでおり、一般化は動詞語幹の使用頻度を反映していると考える。

表30の結果は、日本語諸方言全体を対象とした頻度である。ラ行五段化がみられるそれぞれの地域における頻度も、これと同様である。ラ行五段化現象がみられる、九州方言(9地点)・雲伯方言(2地点)・近畿方言(6地点)・東北方言(3地点)を対象として、語幹の使用頻度を調査した結果を、表31-表35に示す。

表31. ラ行五段化がみられる日本語諸方言20地点における動詞語幹の使用頻度

語幹末母音	1モーラ	2モーラ	
/i/	74	124	198 (2.16%)
/e/	241	855	1,096 (11.98%)
	315 (3.44%)	979 (10.70%)	9,149

表32. 九州方言9地点における動詞語幹の使用頻度

語幹末母音	1モーラ	2モーラ	
/i/	35	67	102 (2.42%)
/e/	101	431	532 (12.64%)
	136 (3.23%)	498 (11.83%)	4,209

表 33. 雲伯方言 2 地点における動詞語幹の使用頻度

語幹末母音	1 モーラ	2 モーラ	
/i/	2	1	3 (0.63%)
/e/	25	36	61 (12.76%)
27 (5.65%)		37 (7.74%)	478

表 34. 近畿方言 6 地点における動詞語幹の使用頻度

語幹末母音	1 モーラ	2 モーラ	
/i/	25	45	70 (2.17%)
/e/	88	215	303 (9.40%)
113 (3.51%)		260 (8.07%)	3,223

表 35. 東北方言 3 地点における動詞語幹の使用頻度

語幹末母音	1 モーラ	2 モーラ	
/i/	12	11	33 (2.66%)
/e/	27	173	200 (16.14%)
39 (3.15%)		184 (14.85%)	1,239

表 31-表 35 に示すように、ラ行五段化がみられる地域それぞれにおける語幹のトークン頻度も、(95)に示す動詞語幹の一般化による予測と一致している。語幹末母音については「語幹末母音が/i/ の語幹 < 語幹末母音が/e/ の語幹」、語幹モーラ数については「1 モーラ語幹 < 2 モーラ語幹」となっている。以上の結果から、(95)に示すラ行五段化に関する動詞語幹の階層は、語形の使用頻度が低い順に並んでおり、それぞれの語幹のトークン頻度を反映していると考える。

### 8.1.2. 接辞

本節では、(96)に示す接辞の一般化について、それぞれの接辞を含む語形の使用頻度から説明する。日本語諸方言における動詞語形の使用頻度について、意志形・否定非過去形・過去形ごとに COJADS による調査結果を表 36 に示す。それぞれの語形について、COJADS における検索方法は(97)に示すとおりである。

表 36. 日本語諸方言 54 地点における動詞語形の使用頻度

語形	出現数	割合
意志形	77	(0.48%)
否定非過去形	1,607	(5.98%)
過去形	3,005	(11.80%)
動詞語形	26,877	

(97) COJADS での検索方法

- a. 意志形: 動詞一般・意志推量形
- b. 否定非過去形: 動詞一般・未然形+助動詞「ない」・終止形と連体形
- c. 過去形: 動詞一般・連用形+助動詞「た」・終止形と連体形
- d. 動詞語形: 動詞一般

表 36 に示すように、日本語諸方言の談話資料におけるトークン頻度は、「意志形 < 否定非過去形 < 過去形」の順になっている。これは、(96)に示す接辞の一般化と照らし、使用頻度の低い語形から類推変化が生じるという予測と一致している。

表 36 の結果は、日本語諸方言全体を対象とした頻度である。ラ行五段化がみられるそれぞれの地域における頻度も、これと同様である。ラ行五段化現象がみられる、九州方言（9 地点）・雲伯方言（2 地点）・近畿方言（6 地点）・東北方言（3 地点）を対象として、意志形・否定非過去形・過去形の使用頻度を調査した結果を、表 37 に示す。

表 37. ラ行五段化がみられる日本語諸方言 20 地点における動詞語形の使用頻度

語形	九州方言 9 地点	雲伯方言 2 地点	近畿方言 6 地点	東北方言 3 地点	20 地点
意志形	23 (0.55%)	3 (0.63%)	3 (0.09%)	2 (1.61%)	31 (0.34%)
否定非過去形	286 (6.79%)	22 (4.60%)	155 (4.81%)	68 (5.49%)	538 (5.88%)
過去形	339 (8.54%)	46 (9.62%)	293 (9.09%)	181 (14.61%)	859 (9.39%)
動詞語形	4,209	478	3,223	1,239	9,149

表 37 に示すように、ラ行五段化がみられる地域それぞれにおける語形のトークン頻度も、「意志形 < 否定非過去形 < 過去形」の順になっている。以上の結果から、(96)に示すラ行五段化に関する接辞の階層は、それぞれの語形のトークン頻度によるものであると考える。

### 8.1.3. 本節のまとめ

本節では、用法基盤モデルの枠組みを用いて、(95)(96)の階層は左から右に使用頻度の少ない順に並んでいると予測した。その上で、コーパスを用いて動詞語幹と接辞の使用頻度を調査した。その結果、予測が妥当であることを示した。このことから、ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞の階層は、それぞれの語形のトークン頻度を反映しているものであると考える。従って、ラ行五段化の一般化(95)(96)は、各方言において見られる散発的な現象から帰納される偶発的な一般化ではなく、語形の使用頻度という通方言的な動機を背景としていると考える。

## 8.2. 通時的变化過程の反映

本節では、(95)(96)に示す一般化がなぜ成立するか、通時的变化過程に着目して説明する。共時的な階層は、通時的な変化を反映していることが多い。(95)(96)の共時的な階層でいうと、ラ行五段化が進行する通時的な順序を反映している可能性が高い。すなわち、ラ行五段化は階層の左から右の順に進行していく、その結果、共時的な含意関係（右がラ行五段化するなら、左もラ行五段化する）がみられるようになったと考えるのが合理的である。

以上の予測を全て実証するのは、現時点では困難である。以上のこととを実証するためには、ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞の一般化について、表38-表40に示すパターンが一方言において通時的に全てみられる必要がある。

表38. 語幹末母音の一般化によって説明・予測するパターン

	/i/	/e/
パターンA	✗	✗
パターンB	○	✗
パターンC	○	○

表39. 語幹モーラ数の一般化によって説明・予測するパターン

	1	2
パターンa	✗	✗
パターンb	○	✗
パターンc	○	○

表40. 接辞の一般化によって説明・予測するパターン

	意志	否定非過去	過去
パターンα	✗	✗	✗
パターンβ	○	✗	✗
パターンγ	○	○	✗
パターンδ	○	○	○

日本語諸方言におけるラ行五段化についての報告は、橋（1937）・金田一（1938）・東条（1943）が最初期であるが、まとめたデータの報告やその分析は1990年代頃から始まっている。従って、先行研究のデータから、ラ行五段化の通時的な変化を動詞語幹や接辞ごとに網羅的に検証するのは、現段階では困難であり今後の課題である。現時点においてラ行五段化の通時的变化について可能なことは、現在の複数の世代における共時的実態を調査し、世代差を明らかにすることである。

本節では、1900年代の動詞形態論の共時的数据と、§5-6の記述的一般化に用いた1950年代以降の共時的数据（§4に出典一覧を示している）を比較する。加えて、これまでの先行研究で論じられてきたラ行五段化の世代差も参照する。これらのデータは、ラ行五段化が(95)(96)の階層の左から右に進行しているという予測と矛盾しないことを示す。

記述的一般化に用いたデータと比較するデータは、国語調査委員会（1906）『口語法調査報告書』である。これは、国語調査委員会が都道府県ごとに方言語形に関する調査を要請し、その回答を調査項目ごとに整理したものである。なお、問題点として、質問が大まかで各地の実状に必ずしも即していないこと、回答の地域や内容に精粗があり均質性に問題があることが言われている（彦坂 1996）。(95)(96)の階層に関する国語調査委員会（1906）の調査項目は、(98)に示すとおりである。

(98) 国語調査委員会（1906）『口語法調査報告書』

- a. 第3条: 「起くる」「落ちる」(2モーラ語幹・語幹末母音/i/) の命令形・意志形
- b. 第4条: 「受ける」「捨てる」(2モーラ語幹・語幹末母音/e/) の命令形・意志形
- c. 第5条: 「着る」「見る」(1モーラ語幹・語幹末母音/i/) の命令形・意志形
- d. 第12条: 「着る」「見る」(1モーラ語幹・語幹末母音/i/) のラ行五段化

以下では、それぞれの方言ごとに、語幹末母音・語幹モーラ数・後続する接辞によって、ラ行五段化・命令形の変化に関与するか否かを述べる。ラ行五段化形式・命令形の変化形式が示されている場合は「○」、ラ行五段化・命令形の変化が生じた語形が示されていない場合は「×」、ラ行五段化・命令形の変化が生じないという記述のみの場合は「(×)」、記述が無い場合は「?」と示す。なお、国語調査委員会（1906）のデータについて、都道府県単位のものしかない場合と、記述的一般化に用いたデータと全く同じラ行五段化のパターンであると予測される場合は、取り上げていない。

### 8.2.1. 福岡県福岡市方言

本節では、福岡県福岡市方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、世代差を述べる。早田（1985）による高年層の記述を表41に、陣内（1989）による若年層の記述を表42に、それぞれまとめて示す。

表41. 福岡市博多方言高年層のラ行五段化・命令形の変化（早田 1985）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	○	×	○
/i/	2	×	×	×	○
/e/	1	○	○	×	○
/e/	2	×	×	×	○

表42. 福岡市博多方言若年層のラ行五段化・命令形の変化（陣内 1989）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	○	×	○
/i/	2	○	○	×	○
/e/	1	○	○	×	○
/e/	2	○	○	×	○

表41の2モーラ語幹と、表42の2モーラ語幹を比較する。高年層（早田 1985）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターンA」である。一方、若年層（陣内 1989）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターンC」である。

表41の語幹末母音/i/ の語幹と、表42の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。高年層（早田 1985）については、1モーラ語幹はラ行五段化に関与するが2モーラ語幹はラ行五段化に関与しない「パターンb」である。一方、若年層（陣内 1989）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターンc」である。

表41の語幹末母音/i/ の2モーラ語幹と、表42の語幹末母音/i/ の2モーラ語幹を比較する。高年層（早田 1985）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターンα」である。一方、若年層（陣内 1989）については、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与する「パターンγ」である。

以上に示した世代差が通時的变化を反映すると仮定すると、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の一般化から予測する、通時的变化過程と矛盾しない。

## 8.2.2. 佐賀県旧富士町北山方言

本節では、佐賀県旧富士町北山方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、世代差を述べる。岩本（1991）による高年層の記述を表43に、若年層の記述を表44に、それぞれまとめて示す。

表43. 佐賀県旧富士町北山方言高年層のラ行五段化・命令形の変化（岩本 1991）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	✗	✗	✗	✗
/i/	2	✗	✗	✗	✗
/e/	1	✗	✗	✗	✗
/e/	2	✗	✗	✗	✗

表44. 佐賀県旧富士町北山方言若年層のラ行五段化・命令形の変化（岩本 1991）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	○	✗	○
/i/	2	○	○	✗	○
/e/	1	○	○	✗	○
/e/	2	✗	✗	✗	✗

表43の1モーラ語幹と、表44の1モーラ語幹を比較する。高年層については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターンA」である。一方、若年層については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターンC」である。

表43の2モーラ語幹と、表44の2モーラ語幹を比較する。高年層については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターンA」である。一方、若年層については、語幹末

母音が/i/ の語幹はラ行五段化に関与するが語幹末母音が/e/ の語幹はラ行五段化に関与しない「パターンB」である。

表43の語幹末母音/i/ の語幹と、表44の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。高年層については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与しない「パターンa」である。一方、若年層については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターンc」である。

表43の語幹末母音/e/ の語幹と、表44の語幹末母音/e/ の語幹を比較する。高年層については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与しない「パターンa」である。一方、若年層については、1モーラ語幹はラ行五段化に関与するが2モーラ語幹はラ行五段化に関与しない「パターンb」である。

表43の語幹末母音/e/ の1モーラ語幹と、表44の語幹末母音/e/ の1モーラ語幹を比較する。高年層については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターンa」である。一方、若年層については、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与する「パターンγ」である。これは、語幹末母音が/i/ の1モーラ語幹・2モーラ語幹においても同様である。

命令形について、表43の1モーラ語幹と、表44の1モーラ語幹を比較する。高年層については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与しない「パターンA」である。一方、若年層については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与する「パターンC」である。

命令形について、表43の2モーラ語幹と、表44の2モーラ語幹を比較する。高年層については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与しない「パターンA」である。一方、若年層については、語幹末母音が/i/ の語幹は命令形の変化に関与するが/e/ の語幹は命令形の変化に関与しない「パターンB」である。

命令形について、表43の語幹末母音/i/ の語幹と、表44の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。高年層については、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化に関与しない「パターンa」である。一方、若年層については、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化に関与する「パターンc」である。

命令形について、表43の語幹末母音/e/ の語幹と、表44の語幹末母音/e/ の語幹を比較する。高年層については、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化に関与しない「パターンa」である。一方、若年層については、1モーラ語幹は命令形の変化に関与するが2モーラ語幹は命令形の変化に関与しない「パターンb」である。

以上に示した世代差が通時的变化を反映すると仮定すると、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の一般化・命令形の変化に関与する動詞語幹の一般化から予測する、通時的变化過程と矛盾しない。

### 8.2.3. 熊本県天草郡方言

本節では、熊本県天草郡方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、通時的变化を示すデータを挙げる。国語調査委員会(1906)による記述を表45に、松丸(2002)による記述を表46に、それぞれまとめて示す。

表45. 熊本県旧天草郡方言のラ行五段化・命令形の変化（国語調査委員会 1906）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	?	?	○
/i/	2	✗	?	?	○
/e/	1	?	?	?	?
/e/	2	✗	?	?	✗

表46. 熊本県旧天草郡河浦町今富方言のラ行五段化・命令形の変化（松丸 2002）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	○	✗	○
/i/	2	○	○	✗	○
/e/	1	○	✗	✗	✗
/e/	2	○	✗	✗	✗

表45の2モーラ語幹と、表46の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターン A」である可能性がある。一方、松丸（2002）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターン C」である。

表45の語幹末母音/i/ の語幹と、表46の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1モーラ語幹はラ行五段化に関与するが2モーラ語幹はラ行五段化に関与しない「パターン b」である可能性がある。一方、松丸（2002）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターン c」である。

表45の語幹末母音/i/ の2モーラ語幹と、表46の語幹末母音/i/ の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターン α」である可能性がある。一方、松丸（2002）については、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与する「パターン γ」である。

表45の語幹末母音/e/ の2モーラ語幹と、表46の語幹末母音/e/ の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターン α」である可能性がある。一方、松丸（2002）については、意志形がラ行五段化に関与する「パターン β」である。

以上に示した通時的変化は、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の一般化から予測する、通時的変化過程と矛盾しない。

#### 8.2.4. 島根県旧簸川郡方言

本節では、島根県旧簸川郡方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、通時的変化を示すデータを挙げる。国語調査委員会（1906）による記述を表47に、筆者による記述を表48に、それぞれまとめて示す。

表47. 島根県旧簸川郡方言のラ行五段化・命令形の変化（国語調査委員会 1906）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	(✖)	(✖)	✖
/i/	2	✖	?	?	✖
/e/	1	✖	?	?	✖
/e/	2	✖	?	?	✖

表48. 島根県旧簸川郡出雲市平田町方言のラ行五段化・命令形の変化（筆者データ）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	○	✖	○
/i/	2	○	○	✖	○
/e/	1	○	○	✖	○
/e/	2	○	○	✖	○

表47の1モーラ語幹と、表48の1モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹はラ行五段化に関与するが/e/ の語幹はラ行五段化に関与しない「パターンB」である可能性がある。一方、筆者データについては、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターンC」である。

表47の2モーラ語幹と、表48の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターンA」である可能性がある。一方、筆者データについては、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターンC」である。

表47の語幹末母音/i/ の語幹と、表48の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1モーラ語幹はラ行五段化に関与するが2モーラ語幹はラ行五段化に関与しない「パターンb」である可能性がある。一方、筆者データについては、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターンc」である。

表47の語幹末母音/e/ の語幹と、表48の語幹末母音/e/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与しない「パターンa」である可能性がある。一方、筆者データについては、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターンc」である。

表47の語幹末母音/i/ の1モーラ語幹と、表48の語幹末母音/i/ の1モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、意志形がラ行五段化に関与する「パターンβ」である。一方、筆者データについては、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与する「パターンγ」である。

表47の語幹末母音/i/ の2モーラ語幹と、表48の語幹末母音/i/ の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターンα」である。一方、筆者データについては、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与する「パターンγ」である。これは、語幹末母音が/e/ の1モーラ語幹・2モーラ語幹においても同様である。

命令形について、表47の1モーラ語幹と、表48の1モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与しない「パターンA」である。

一方、筆者データについては、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与する「パターン C」である。これは、2 モーラ語幹においても同様である。

命令形について、表 47 の語幹末母音/i/ の語幹と、表 48 の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹も命令形の変化に関与しない「パターン a」である。一方、筆者データについては、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹も命令形の変化に関与する「パターン c」である。これは、語幹末母音/e/ の語幹においても同様である。

以上に示した通時的变化は、ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞の一般化・命令形の変化に関する動詞語幹の一般化から予測する、通時的变化過程と矛盾しない。

### 8.2.5. 大阪市方言

本節では、大阪市方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、通時的变化を示すデータを挙げる。国語調査委員会（1906）による記述を表 49 に、和田（1961）による記述を表 50 に、それぞれまとめて示す。

表 49. 大阪市方言のラ行五段化・命令形の変化（国語調査委員会 1906）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	✗	(✗)	(✗)	✗
/i/	2	✗	?	?	✗
/e/	1	?	?	?	?
/e/	2	✗	?	?	✗

表 50. 大阪市方言のラ行五段化・命令形の変化（和田 1961）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	✗	✗	○
/i/	2	○	✗	✗	○
/e/	1	○	✗	✗	○
/e/	2	○	✗	✗	○

表 49 の 2 モーラ語幹と、表 50 の 2 モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターン A」である可能性がある。一方、和田（1961）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターン C」である。

表 49 の語幹末母音/i/ の語幹と、表 50 の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹もラ行五段化に関与しない「パターン a」である可能性がある。一方、和田（1961）については、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターン c」である。

表 49 の語幹末母音/i/ の 1 モーラ語幹と、表 50 の語幹末母音/i/ の 1 モーラ語幹を比較する。国語

調査委員会（1906）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターンα」である。一方、和田（1961）については、意志形がラ行五段化に関与する「パターンβ」である。

命令形について、表49の2モーラ語幹と、表50の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与しない「パターンA」である。一方、和田（1961）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与する「パターンC」である。

命令形について、表49の語幹末母音/i/ の語幹と、表50の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化に関与しない「パターンa」である。一方、和田（1961）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化に関与する「パターンc」である。

以上に示した通時的変化は、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の一般化・命令形の変化に関与する動詞語幹の一般化から予測する、通時的変化過程と矛盾しない。

### 8.2.6. 奈良県吉野郡方言

本節では、奈良県吉野郡方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、通時的変化を示すデータを挙げる。国語調査委員会（1906）による記述を表51に、平山（1979）による記述を表52に、それぞれまとめて示す。

表51. 奈良県吉野郡方言のラ行五段化・命令形の変化（国語調査委員会 1906）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	✗	(✗)	(✗)	✗
/i/	2	✗	?	?	✗
/e/	1	?	?	?	?
/e/	2	✗	?	?	✗

表52. 奈良県吉野郡十津川村方言のラ行五段化・命令形の変化（平山 1979）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	○	✗	✗
/i/	2	○	○	✗	✗
/e/	1	○	○	✗	✗
/e/	2	○	○	✗	✗

表51の2モーラ語幹と、表52の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターンA」である可能性がある。一方、平山（1979）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターンC」である。

表51の語幹末母音/i/ の語幹と、表52の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）

については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与しない「パターンa」である可能性がある。一方、平山（1979）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターンc」である。

表51の語幹末母音/i/の1モーラ語幹と、表52の語幹末母音/i/の1モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターンa」である。一方、平山（1979）については、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与する「パターンγ」である。

以上に示した通時的変化は、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の一般化から予測する、通時的変化過程と矛盾しない。

### 8.2.7. 和歌山県旧西牟婁郡方言

本節では、和歌山県旧西牟婁郡方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、通時的変化を示すデータを挙げる。国語調査委員会（1906）による記述を表53に、平澤（1982）による記述を表54に、それぞれまとめて示す。

表53. 和歌山県旧西牟婁郡方言のラ行五段化・命令形の変化（国語調査委員会1906）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	✗	(✗)	(✗)	✗
/i/	2	✗	?	?	✗
/e/	1	?	?	?	?
/e/	2	✗	?	?	✗

表54. 和歌山県旧西牟婁郡田辺市方言のラ行五段化・命令形の変化（平澤1982）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	○	✗	✗
/i/	2	○	○	✗	✗
/e/	1	○	○	✗	✗
/e/	2	○	✗	✗	✗

表53の2モーラ語幹と、表54の2モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/の語幹も/e/の語幹もラ行五段化に関与しない「パターンA」である可能性がある。一方、平澤（1982）については、語幹末母音が/i/の語幹も/e/の語幹もラ行五段化に関与する「パターンC」である。

表53の語幹末母音/i/の語幹と、表54の語幹末母音/i/の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与しない「パターンa」である可能性がある。一方、平澤（1982）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターンc」である。

表53の語幹末母音/i/の1モーラ語幹と、表54の語幹末母音/i/の1モーラ語幹を比較する。国語

調査委員会（1906）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターン α」である。一方、平澤（1982）については、意志形と否定非過去形がラ行五段化に関与する「パターン γ」である。

以上に示した通時的変化は、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の一般化から予測する、通時的変化過程と矛盾しない。

### 8.2.8. 新潟県南蒲原郡方言

本節では、新潟県南蒲原郡方言におけるラ行五段化・命令形の変化について、通時的変化を示すデータを挙げる。国語調査委員会（1906）による記述を表 55 に、加藤（1961）による記述を表 56 に、それぞれまとめて示す。

表 55. 新潟県南蒲原郡方言のラ行五段化・命令形の変化（国語調査委員会 1906）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	✗	(✗)	(✗)	✗
/i/	2	✗	?	?	✗
/e/	1	✗	?	?	✗
/e/	2	✗	?	?	✗

表 56. 新潟県南蒲原郡旧栄村方言のラ行五段化・命令形の変化（加藤 1961）

語幹末母音	語幹モーラ数	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	○	✗	✗	○
/i/	2	○	✗	✗	○
/e/	1	○	✗	✗	○
/e/	2	○	✗	✗	○

表 55 の 1 モーラ語幹と、表 56 の 1 モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与しない「パターン A」である可能性がある。一方、加藤（1961）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹もラ行五段化に関与する「パターン C」である。これは、2 モーラ語幹においても同様である。

表 55 の語幹末母音/i/ の語幹と、表 56 の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹もラ行五段化に関与しない「パターン a」である可能性がある。一方、加藤（1961）については、1 モーラ語幹も 2 モーラ語幹もラ行五段化に関与する「パターン c」である。これは、語幹末母音が/e/ の語幹においても同様である。

表 55 の語幹末母音/i/ の 1 モーラ語幹と、表 56 の語幹末母音/i/ の 1 モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、どの接辞もラ行五段化に関与しない「パターン α」である。一方、加藤（1961）については、意志形がラ行五段化に関与する「パターン β」である。

命令形について、表 55 の 1 モーラ語幹と、表 56 の 1 モーラ語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与しない「パターン A」である。

一方、加藤（1961）については、語幹末母音が/i/ の語幹も/e/ の語幹も命令形の変化に関与する「パターンC」である。これは、2モーラ語幹においても同様である。

命令形について、表55の語幹末母音/i/ の語幹と、表56の語幹末母音/i/ の語幹を比較する。国語調査委員会（1906）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化に関与しない「パターンa」である。一方、加藤（1961）については、1モーラ語幹も2モーラ語幹も命令形の変化に関与する「パターンc」である。これは、語幹末母音/e/ の語幹においても同様である。

以上に示した通時的变化は、ラ行五段化に関する動詞語幹と接辞の一般化・命令形の変化に関与する動詞語幹の一般化から予測する、通時的变化過程と矛盾しない。

#### 8.2.9. 本節のまとめと課題

本節では、ラ行五段化の通時的变化過程について、1900年代のデータと1950年代以降のデータを比較した。その結果、ラ行五段化は(95)(96)の階層の左から右に進行しているという予測と矛盾しないことを示した。

しかし、前述のとおり、ラ行五段化の通時的な変化を網羅的に検証するのは、現段階では困難であり今後の課題である。加えて、ラ行五段化の世代差について、高年層よりも若年層のほうが衰退しているという報告もある（高知県宿毛市方言；松丸2011a,b, 雲伯方言；小西2011,2017）。現時点において可能であるのは、現在の複数の世代におけるラ行五段化の共時的実態を調査することである。その上で、ラ行五段化の世代差を分析することである。

## 9. おわりに

本論文では、日本語諸方言におけるラ行五段化について、動詞語幹と接辞に関して方言ごとに異なる条件があることを示し、この条件を階層によって通方言的に一般化した。この一般化を、(99)(100)に再掲する。

(99) ラ行五段化に関する動詞語幹の一般化

- a. 語幹末母音: /i/ > /e/
- b. 語幹モーラ数: 1 モーラ > 2 モーラ

(100) ラ行五段化に関する接辞の一般化

意志 > 否定非過去 > 過去

この一般化は、ある日本語方言におけるラ行五段化の実態を過不足なく記述できる。さらに、本論文で検討していない方言に関しても、ラ行五段化の条件についてどのような場合が可能でどのような場合が不可能か、予測できるものである。

この一般化が成立する動機について、語形の使用頻度とラ行五段化の通時的变化過程という観点から説明した。前者については、一般化の左から右へ語形の使用頻度が低い順に並んでいるという説明である。コーパスを用いて語形の使用頻度を算出し、この説明どおりの結果が得られたことを論じた。この結果から、(99)(100)の一般化は、特定の日本語方言において散発的に見られる現象から帰納される偶発的なもの一般化ではなく、語形の使用頻度という通方言的な基盤を背景としていることを主張した。後者については、一般化の左から右へラ行五段化が通時的に進行しているという説明である。これについて、網羅的に実証することはできないが、現時点で存在するデータはこの説明と矛盾しないことを示した。

本節では、§ 9.1 で本論文のラ行五段化研究における位置づけ、§ 9.2 で本論文が扱わなかった課題を述べる。

### 9.1. ラ行五段化研究における本論文の位置づけ

本節では、日本語学や方言学の研究における本論文の位置づけを述べる。

ラ行五段化現象は、日本語学や方言学において重要な問題である。日本語諸方言における動詞形態論については、動詞活用体系の通時的变化が、大西（1995, 1996b, 1998）、小林（2002, 2004）などによって論じられてきた。小林（2002, 2004）は、日本語諸方言におけるラ行五段化現象について、標準日本語の先をいく革新的な変化であるとしている。将来的には、図 14 に示すように、日本語の母音語幹動詞全てが子音語幹動詞に統合されると予測している。

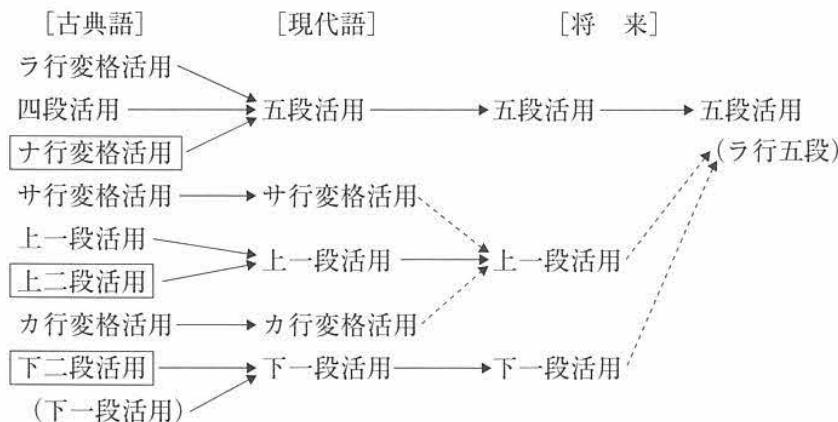


図 14. 日本語の動詞語幹活用クラスの通時的変化（小林 2002, 2004）

この予測に立つと、日本語諸方言の動詞活用体系について通時的变化過程やそのメカニズムを明らかにするためには、日本語諸方言におけるラ行五段化現象に着目する必要がある。具体的には、日本語諸方言におけるラ行五段化の共時的実態を明らかにした上で、通時的变化を解明することが必要である。

しかし、日本語諸方言におけるラ行五段化について、共時的にも通時的にも包括的な研究はされてこなかった。日本語諸方言における動詞形態論の記述がそもそも少なく、ラ行五段化についても「この地域で現象が見られる」という散発的な現象の記述に留まっている。日本語諸方言におけるラ行五段化の共時的実態について全体像を明らかにするためには、各地の動詞形態論を記述し、それらを比較することによって一般化する必要がある。

本論文では、日本語諸方言における動詞形態論の先行研究を用い、ラ行五段化に関与する条件の方言間比較を行った。それによって、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞を一般化した。これに加えて、この一般化が成立する動機を使用頻度や通時的变化過程から説明し、ラ行五段化が生じるメカニズムを明らかにするための基礎的なデータと分析を提供した。

## 9.2. 残された課題

本節では、本論文が扱わなかった、ラ行五段化に関する残された課題を列挙する。残された課題は2点ある。一般化の対象外とした接辞、考察の対象外とした動詞語幹である。以下では、残された課題の詳細を順に述べる。

### 9.2.1. 一般化の対象外とした動詞語幹・接辞

本論文で行った一般化の対象外とした動詞語幹と接辞がある。語幹モーラ数の一般化については§5.2.4で、接辞の一般化については§6.5で、それぞれ論じた。一般化の対象外とした動詞語幹と接辞について、(99)(100)の一般化に組み込むことができるかは、現時点では不明である。

### 9.2.2. 考察の対象外とした動詞語幹

先行研究にデータがなく、本論文では考察の対象外とした動詞語幹がある。複合動詞語幹・変格活用語幹・補助動詞語幹である。以下では、これらの詳細を順に述べる。

1つ目は、複合動詞語幹のラ行五段化である。本論文では、単純動詞語幹のみを考察対象とし、複合動詞における母音語幹の振る舞いは考察対象外とした。すなわち、動詞語幹  $V_1, V_2$  による複合動詞  $V_1+V_2$  について、母音語幹が  $V_1$  に該当するとき・母音語幹が  $V_2$  に該当するときである。それについて、母音語幹がラ行五段化するか、する場合はそれにどのような条件があるか、それは単純動詞と異なるのかなど、現時点で不明である。

2つ目は、変格活用語幹のラ行五段化である。本論文では、母音語幹のみを考察対象としてきた。変格活用語幹については、東北方言（彦坂 2017）・出雲方言（筆者データ）・高知県宿毛市方言（松丸 2001a, b）において、ラ行五段化形式が報告されている。通方言的に、どのような接辞が変格活用語幹のラ行五段化に関与するかなど、現時点で不明である。

3つ目は、補助動詞語幹のラ行五段化である。本論文では、本動詞語幹のみを考察対象としてきた。補助動詞構文「動詞継起形+補助動詞」（例：～てあげる、～てくれる、～てみる、～てくる）で用いられる補助動詞語幹については、考察対象外とした。補助動詞はラ行五段化するか、する場合にどのような条件があるか、それは本動詞と異なるのかなど、現時点で不明である。

## Appendix1. 本論文における音素表記

本付録では、本論文で用いている音素表記の詳細を述べる。本論文では、データの基底表示と音韻表示において、筆者や先行研究の分析による音素表記を用いている。先行研究におけるデータを表示する場合、本論文の表記は先行研究と異なることがあるため、本論文と先行研究における表記の対応を述べる。筆者による音素分析は、共通して以下のような方針で行っている。

### (101) 音素分析の方針

- a. 音素は、先行研究や筆者の動詞形態論などのデータについて、広く説明できるように設定する。
- b. 長母音は、短母音の連続として解釈する。短母音とは別の長母音音素や、先行する母音と同じ音素を表すモーラ音素/R/, /E/ は設定しない。
- c. 重子音は、子音の連続として解釈する。後続する子音と同じ子音を表すモーラ音素/Q/ は設定しない。
- d. いわゆる撥音「ん」は、/n/ として解釈する。後続する音素によって音声実現が異なるモーラ音素/N/ は設定しない。
- e. 音節初頭に子音音素が存在しないことを示し、無声子音音素/h/の有声音素としての/ / (服部 1955, 1960) は設定しない。
- f. 半母音音素として設定される場合もある/j/, /w/ について、本論文においては統一して、子音音素として設定する。
- g. [w] は /u/, [g] は /g/, [f] [t] は /f/, [j] は /j/ とそれぞれ表記する。

この音素分析の方針は、データの統一的な表記のために用いるものである。本論文のラ行五段化に関する分析には影響しない。

以下では、それぞれの方言における表記方法を述べる。先行研究のデータが仮名表記の場合は、筆者の分析による音素目録を提示し、その音素表記と仮名表記との対応を表によって示す。先行研究のデータが音素表記の場合、先行研究の音素分析に、筆者が(101)の方針によって分析を適用した音素目録を提示する。筆者によるデータの場合、筆者の分析による音素目録を提示する。

### A1.1. 長崎県長崎市方言

長崎県長崎市方言について、母音音素の目録を表 57、子音音素の目録を表 58 にそれぞれ示す。この目録は、塙本 (1978) の音声表記をもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表 57. 長崎市方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 58. 長崎市方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/が後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への規則が適用されるからである。生じる無声声門破裂音[?]について、これは音素として設定せず、派生によって生じる音声であるとする。長崎市方言において、無声声門破裂音[?]は、e 語幹/de-/の非過去形[de?]などの母音終わりの語幹に後続する非過去を表す形態として現れる。塚本(1978)によると、長崎市方言におけるこのような音声を説明するために、/ru/ → r → [?]という規則を考えることができる。従って、生じる音声[?]については音素として設定せず、派生規則によって生じる音声であると分析する。

### A1.2. 長崎県対馬市豊玉方言

長崎県対馬市豊玉方言について、母音音素の目録を表 59、子音音素の目録を表 60 にそれぞれ示す。この目録は、原田(2006)の表記をもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表 59. 豊玉方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 60. 豊玉方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	(p) b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-te/が後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への交替規則が適用されるからである。

### A1.3. 大分県九重町方言

九重町方言について、母音音素の目録を表61、子音音素の目録を表62にそれぞれ示す。この目録は、糸井（1964）のモーラ表の音素表記をもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表61. 九重町方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表62. 九重町方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			h
接近音	w		j		

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、子音音素/b/,/m/と同じ類をなす両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/b/,/m/,/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-ti/が後続するとき、同じ形態音韻規則（語幹末子音の母音/u/への交替）が適用されるからである。

九重町方言について、仮名表記と音素表記の対応を表63に示す。この表は、糸井（1964）のモーラ表に、表61・表62の音素分析を適用している。

表 63. 九重町方言のモーラ一覧

ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ	ワ	ウィ	ウェ
a	i	u	e	o	ja	ju	jo	wa	wi	we
ぱ	ピ	ブ	ペ	ボ	ピヤ	ピュ	ピョ			
pa	pi	pu	pe	po	pja	pju	pjo			
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ	ビュ	ビョ			
ba	bi	bu	be	bo	bja	bju	bjo			
マ	ミ	ム	メ	モ	ミヤ	ミュ	ミョ			
ma	mi	mu	me	mo	mja	mju	mjo			
タ	チ	ツ	テ~チエ	ト	チャ	チュ	チョ			
ta	ti	tu	te	to	tja	tju	tjo			
ダ			デ	ド				デイ		
da			de	do				dwi		
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ	ニユ	ニョ			
na	ni	nu	ne	no	nja	nju	njo			
ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ	リュ	リョ			
ra	ri	ru	re	ro	rja	rju	rjo			
サ	シ	ス	セ~シエ	ソ	シャ	シュ	ショ		スイ	
sa	si	su	se	so	sja	sju	sjo		swi	
ザ	ジ	ズ	ゼ~ジエ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ			
za	zi	zu	ze	zo	zja	zju	zjo			
カ	キ	ク	ケ	コ	キヤ	キュ	キョ	クワ	クイ	
ka	ki	ku	ke	ko	kja	kju	kjo	kwa	kwi	
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギヤ	ギュ	ギョ	グワ	グイ	
ga	gi	gu	ge	go	gia	gju	gjo	gwa	gwi	
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ	ヒュ	ヒョ		フィ	
ha	hi	hu	he	ho	hja	hju	hjo		hwi	
ン										
n										

#### A1.4. 宮崎県日の影町方言

日の影町方言について、母音音素の目録を表 64、子音音素の目録を表 65 にそれぞれ示す。この目録は、野元（1964）の音素分析をもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表 64. 日の影町方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 65. 日の影町方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、子音音素/b/,/m/と同じ類をなす両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/b/,/m/,/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-te/が後続するとき、同じ形態音韻規則（語幹末子音の母音/u/への交替）が適用されるからである。

### A1.5. 宮崎県椎葉村尾前方言

宮崎県椎葉村尾前方言について、母音音素の目録を表 66、子音音素の目録を表 67 にそれぞれ示す。この目録は、下地（2016）の音素分析に、(101)の方針を適用している。

表 66. 椎葉村尾前方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 67. 椎葉村尾前方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	(p) b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、子音音素/b/,/m/と同じ類をなす両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/b/,/m/,/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-te/が後続するとき、同じ形態音韻規則（語幹末子音の母音/u/への交替）が適用されるからである。

## A1.6. 愛媛県旧明浜町方言

愛媛県旧明浜町方言について、母音音素の目録を表 68、子音音素の目録を表 69 にそれぞれ示す。この目録は、野林（1970）の表記をもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表 68. 旧明浜町方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 69. 旧明浜町方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-te/・条件/-tara/などが後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への交替規則が適用されるからである。

## A1.7. 愛媛県宇和島市方言

愛媛県宇和島市方言について、母音音素の目録を表 70、子音音素の目録を表 71 にそれぞれ示す。この目録は、杉山（1959）のデータと筆者データをもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表 70. 宇和島市方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 71. 宇和島市方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-te/が後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への交替規則が適用されるからである。

### A1.8. 高知県宿毛市方言

高知県宿毛市方言について、母音音素の目録を表 72、子音音素の目録を表 73 にそれぞれ示す。この目録は、松丸（2001）の表記をもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表 72. 宿毛市方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 73. 宿毛市方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	(p) b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-te/が後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への交替規則が適用されるからである。

### A1.9. 島根県出雲市平田町方言

島根県出雲市平田町方言について、母音音素の目録を表74、子音音素の目録を表75にそれぞれ示す。この目録は、木部（2016）、平子・友定（2018）のデータをもとにしている。それに加えて、平子（2019）の音素分析に、(101)の方針を適用している。

表74. 出雲市平田町方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表75. 出雲市平田町方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
破擦音		c z			
弾き音		r			
摩擦音		s			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。生じる中舌母音[i]について、基底表示においては/i/であると分析する。現時点では中舌母音[i]は、子音/s/,/z/,/c/に後続するデータしかない。加えて、子音/s/,/z/,/c/に、母音[i]が後続するデータはない。このことから、中舌母音[i]は、母音音の/i/の異音であると分析する。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、平子（2019）に従い、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。

### A1.10. 兵庫県明石市方言

兵庫県明石市方言について、母音音素の目録を表76、子音音素の目録を表77にそれぞれ示す。この目録は、橋（1966）の表記をもとに、筆者の分析と(101)の方針を適用している。

表76. 明石市方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 77. 明石市方言の子音音素

	両唇		歯茎		硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	(p)	b	t	d		k	g
鼻音		m		n			
弾き音				r			
摩擦音			s	z			
接近音		w			j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/が後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への交替規則が適用されるからである。

明石市方言について、仮名表記と音素表記の対応を表 78 に示す。この表は、橋 (1966) の表記に、表 76・表 77 の音素分析を適用している。

表 78. 明石市方言のモーラ

ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ	ワ
a	i	u	e	o	ja	ju	jo	wa
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ	ビュ	ビョ	
ba	bi	bu	be	bo	bja	bju	bjo	
マ	ミ	ム	メ	モ	ミヤ	ミュ	ミョ	
ma	mi	mu	me	mo	mja	mju	mjo	
タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ	
ta	ti	tu	te	to	tja	tju	tjo	
ダ		デ		ド				
da		de		do				
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ	ニユ	ニョ	ン
na	ni	nu	ne	no	nja	nju	njo	n
ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ	リュ	リョ	
ra	ri	ru	re	ro	rja	rju	rjo	
サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ	
sa	si	su	se	so	sja	sju	sjo	
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ	
za	zi	zu	ze	zo	zja	zju	zjo	
カ	キ	ク	ケ	コ	キャ	キュ	キョ	
ka	ki	ku	ke	ko	kja	kju	kjo	
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギュ	ギョ	
ga	gi	gu	ge	go	gja	gju	gio	
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ	ヒュ	ヒョ	
ha	hi	hu	he	ho	hja	hju	hjo	

## A1.11. 奈良県十津川村方言

奈良県十津川村方言について、母音音素の目録を表 79、子音音素の目録を表 80 にそれぞれ示す。この目録は、平山（1979）の音素分析に、(101)の方針を適用している。

表 79. 十津川村方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広	a	

表 80. 十津川村方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
破擦音		c			
弾き音		r			
摩擦音		s z			h
接近音	w		j		

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・継起/-te/などが後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への交替規則が適用されるからである。

## A1.12. 和歌山県田辺市方言

和歌山県田辺市方言について、母音音素の目録を表 81、子音音素の目録を表 82 にそれぞれ示す。この目録は、平澤（1982）の表記をもとに、(101)の方針を適用している。

表 81. 田辺市方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広	a	

表 82. 田辺市方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	(p) b	t d		k g	
鼻音	m	n			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。語幹末子音が/w/の動詞語幹は、過去/-ta/・条件/-tara/が後続するとき、同じく唇音性をもつ母音/u/への交替規則が適用されるからである。

### A1.13. 静岡県新居町方言

静岡県新居町方言について、母音音素の目録を表 83、子音音素の目録を表 84 にそれぞれ示す。この目録は、山口（1985）の音素分析をもとに、(101)の方針を適用している。

表 83. 新居町方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 84. 新居町方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
破擦音		c			
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、母音音素/u/,/o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。子音音素/j/に後続する母音音素は、/u/,/o/,/a/のみだからである。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、本論文では便宜的に、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。

新居町方言について、仮名表記と音素表記の対応を表 85 に示す。この表は、山口 (1985) のモーラ表に、表 83・表 84 の音素分析を適用している。

表 85. 新居町方言のモーラ一覧

ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ュ	ヨ	ワ	ウォ
a	i	u	e	o	ja	ju	jo	wa	wo
パ	ピ	プ	ペ	ボ	ピヤ	ピュ	ピョ		
pa	pi	pu	pe	po	pja	pju	pjo		
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ	ビュ	ビョ		
ba	bi	bu	be	bo	bja	bju	bjo		
マ	ミ	ム	メ	モ	ミヤ	ミュ	ミョ		
ma	mi	mu	me	mo	mja	mju	mjo		
タ			テ		ト				
ta			te		to				
ダ			デ		ド	デヤ		デヨ	
da			de		do	dja		djo	
ツア	チ	ツ		ツオ	チャ	チュ	チョ		
ca	ci	cu		co	ca	cu	co		
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ	ニュ	ニョ		ン
na	ni	nu	ne	no	nja	nju	njo		n
ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ	リュ	リョ		
ra	ri	ru	re	ro	rja	rju	rjo		
サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ		
sa	si	su	se	so	sja	sju	sjo		
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ		
za	zi	zu	ze	zo	zja	zju	zjo		
カ	キ	ク	ケ	コ	キヤ	キュ	キョ		
ka	ki	ku	ke	ko	kja	kju	kjo		
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギュ	ギョ		
ga	gi	gu	ge	go	gia	gju	gjo		
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ	ヒュ	ヒョ		
ha	hi	hu	he	ho	hja	hju	hjo		

#### A1.14. 青森県青森市方言

青森県青森市方言について、母音音素の目録を表 86、子音音素の目録を表 87 にそれぞれ示す。これらの目録は、大槻 (2018) を参考にしている。

表 86. 青森市方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 87. 青森市方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n		ŋ	
弾き音		r			
摩擦音		s z			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、本論文では便宜的に、母音音素/u/, /o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、本論文では便宜的に、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。

### A1.15. 山形県鶴岡市大山方言

山形県鶴岡市大山方言について、母音音素の目録を表 88、子音音素の目録を表 89 にそれぞれ示す。これらの目録は、井上（1994）における「Y 体系」の目録を参考にしている。

表 88. 大山方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 89. 大山方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n		ŋ	
破擦音		c z			
弾き音		r			
摩擦音		s			
接近音	w		j		h

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/a/について、本論文では便宜的に、母音音素/u/, /o/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、本論文では便宜的に、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。

### A1.16. 新潟県旧栄村方言

旧栄村方言について、母音音素の目録を表90、子音音素の目録を表91にそれぞれ示す。これらの目録は、加藤（1958, 1961）を参考にしている。

表90. 旧栄村方言の母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
半広	ɛ	ɔ
広		a

表91. 旧栄村方言の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
破擦音		c			
弾き音		r			
摩擦音		s z			h
接近音	w		j		

音素分析として問題となる点を述べる。母音音素/ɛ/について、これは母音音素/e/と対立する ([katte]「固い」vs. [katte]「刈って」)。母音音素/ɔ/について、これは母音音素/o/と対立する ([ekko]「一向に」vs. [ekko]「一個」)。母音音素/a/について、本論文では便宜的に、母音音素/u/, /o/, /ɔ/と同じ類をなす後舌母音であると分析する。両唇と軟口蓋の二重調音である[w]を示す子音音素/w/について、本論文では便宜的に、唇音性をもつ両唇音音素であると分析する。

## Appendix2. 記述的一般化に用いたデータ

本付録では、本論文で行った記述的一般化に用いたデータを挙げる。ラ行五段化・命令形の変化を引き起こす場合は、網掛けで示す。ラ行五段化形式・命令形の変化形式は、太字で示す。ラ行五段化・命令形の変化を引き起こすか否かのみが述べられている場合、引き起こすことを「○」、引き起こさないことを「✖」で示す。語形の提示順序、語形に対する( )の表示は、原典のままである。

### A2.1. 福岡県福岡市博多方言（高年層；早田 1985）

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
			<i>mijoo</i>	( <i>min</i> )		( <i>miro</i> )
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okjoo</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>deru</i>	<b><i>deroo</i></b>	<i>den</i>	<i>deta</i>	<b><i>dere</i></b>
			<i>dejoo</i>	<b><i>deran</i></b>		( <i>dero</i> )
/e/	2	<i>taberu</i>	<i>tabjoo</i>	<i>taben</i>	<i>tabeta</i>	<b><i>tabere</i></b>

### A2.2. 福岡県福岡市博多方言（若年層；陣内 1989）

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	✖	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okiru</i>	<b><i>okiroo</i></b>	<i>okin</i>	✖	<b><i>okire</i></b>
				<b><i>okiran</i></b>		
/e/	1	<i>deru</i>	<b><i>deroo</i></b>	<b><i>deran</i></b>	✖	<b><i>dere</i></b>
/e/	2	<i>taberu</i>	<b><i>taberoo</i></b>	<i>taben</i>	✖	<b><i>tabere</i></b>
				<b><i>taberan</i></b>		

### A2.3. 福岡県福岡市旧社家町方言（岡野 1991）

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okiru</i>	<b><i>okiroo</i></b>	<b><i>okiran</i></b>	<i>okin</i>	<b><i>okire</i></b>
			<i>okijoo</i>			
/e/	1	<i>deru</i>	<b><i>deroo</i></b>	<b><i>deran</i></b>	<i>den</i>	<b><i>dere</i></b>
			<i>dejoo</i>			
/e/	2	<i>taburu</i>	<b><i>taberoo</i></b>		<i>taben</i>	<b><i>tabere</i></b>
			<i>tabejoo</i>		<i>tabeta</i>	

#### A2.4. 福岡県筑後市若菜方言 (若菜 1990)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	miru	<i>miroo</i>	<i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mire</i>
			<i>mjuu</i>	<i>min</i>		<i>miro</i>
			<i>okiroo</i>	<i>okiran</i>	<i>okitta</i>	<i>okire</i>
/ɪ/	2	okiru	<i>okjuu</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i>
			<i>neroo</i>	<i>neran</i>		<i>nere</i>
/e/	1	nuru	<i>njuu</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i>
			<i>taburu</i>	<i>taben</i>	<i>tabeta</i>	<i>tabero</i>
/ɛ/	2					

#### A2.5. 福岡県柳川市方言 (高年層; 松岡 2021)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	miru	<i>mjuu</i>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>miro</i>
			<i>mijoo</i>	<i>miran</i>	* <i>mitta</i>	<i>mire</i>
			<i>miroo</i>			
/ɪ/	2	okiru	<i>okjuu</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i>
			<i>okiroo</i>	<i>okiran</i>	* <i>okitta</i>	<i>okire</i>
/e/	1	zuru	<i>zuu</i>	<i>den</i>	<i>deta</i>	<i>dero</i>
			<i>dejoo</i>	<i>deran</i>	* <i>detta</i>	<i>dere</i>
			<i>deroo</i>			
/ɛ/	2	taburu	<i>tab(j)uu</i>	<i>taben</i>	<i>tabeta</i>	<i>tabero</i>
			<i>tabejoo</i>	* <i>taberan</i>	* <i>tabetta</i>	
			* <i>taberoo</i>			

#### A2.6. 福岡県柳川市方言 (若年層; 松岡葵氏 p.c.)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	kiru	<i>kiroo</i>	<i>kirian</i>	<i>kita</i>	<i>kiro</i>
			<i>kijoo</i>	* <i>kin</i>	* <i>kitta</i>	<i>kire</i>
/ɪ/	2	abiru	<i>abijoo</i>	<i>abin</i>	<i>abita</i>	<i>abiro</i>
			* <i>abiroo</i>	* <i>abiran</i>	* <i>abitta</i>	* <i>abire</i>
/e/	1	neru	<i>nejoo</i>	<i>neran</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i>
			<i>nero</i>	* <i>nen</i>	* <i>netta</i>	<i>nere</i>
/ɛ/	2	ueru	<i>uejoo</i>	<i>uen</i>	<i>uetra</i>	<i>uero</i>
			* <i>ueroo</i>	* <i>ueran</i>	* <i>uetta</i>	* <i>uere</i>

## A2.7. 佐賀県旧富士町北山方言 (高年層; 岩本 1991)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>mi?</i>	<i>mjuu</i>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>miro</i>
/i/	2	<i>oki?</i>	<i>okjuu</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i>
/e/	1	<i>nu?</i>	<i>njuu</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i>
/e/	2	<i>uku?</i>	<i>ukjuu</i>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukero</i>

## A2.8. 佐賀県旧富士町北山方言 (若年層; 岩本 1991)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>mi?</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>oki?</i>	<b><i>okiroo</i></b>	<b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i>	<b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>nu?</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<b><i>nero</i></b> <b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>uku?</i>	<i>ukjuu</i>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukero</i>

## A2.9. 佐賀県旧大和町方言 (高園 2000)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>mi?</i>	<i>mjuu</i> <b><i>miroo</i></b>	<i>min</i> <b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>miro</i> <b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>oki?</i>	<b><i>okiroo</i></b>	<i>okin</i> <b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i>	<i>okiro</i> <b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>nu?</i>	<i>njuu</i> <b><i>neroо</i></b>	<i>nen</i> <b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nero</i> <b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>tabu?</i>	<i>tabjuu</i>	<i>taben</i>	<i>tabeta</i>	<i>tabero</i>

## A2.10. 佐賀県佐賀市方言 (高山 2015)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>mi?</i>	<i>mjuu</i> <b><i>miroo</i></b>	<i>min</i> <b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>miro</i> <b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>oki?</i>	<i>okjuu</i> <b><i>okiroo</i></b>	<i>okin</i> <b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i>	<i>okiro</i> <b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>zu?</i>	<i>zjuu</i> <b><i>deroо</i></b>	<i>den</i> <b><i>deran</i></b>	<i>deta</i>	<i>dero</i>
/e/	2	<i>tabu?</i>	<i>tabjuu</i>	<i>taben</i>	<i>tabeta</i>	<i>tabero</i>

### A2.11. 長崎県長崎市方言 (塚本 1978)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>ki?</i>	<b><i>kiroo</i></b>	<b><i>kirān</i></b>	<i>kita</i>	<b><i>kire</i></b>
/i/	2	<i>oki?</i>	<b><i>okiroo</i></b>	<b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i>	<b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>zu?</i>	<i>zu</i>	<i>den</i>	<i>deta</i>	<i>dero</i>
/e/	2	<i>agu?</i>	<i>aguu</i>	<i>agen</i>	<i>ageta</i>	<i>agero</i>

### A2.12. 長崎県平戸市志々伎方言 (野林 1969)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mjuu</i>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>miro</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okjuu</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i>
/e/	1	<i>nuru</i>	<i>njuu</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i>
/e/	2	<i>katuru</i>	<i>katjuu</i>	<i>katen</i>	<i>kateta</i>	<i>katero</i>

### A2.13. 長崎県旧大瀬戸町板ノ浦方言 (高園 2000)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mjuu</i>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>miro</i>
			<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>		<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okuru</i>	<i>okjuu</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i>
/e/	1	<i>nuru</i>	<i>njuu</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>ukjuu</i>	<i>uken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukero</i>

### A2.14. 長崎県対馬市豊玉方言 (原田 2006)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okiru</i>	<b><i>okiroo</i></b>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>nero</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>akeru</i>	<b><i>akero</i></b>	<i>aken</i>	<i>aketa</i>	<i>akero</i>

### A2.15. 長崎県大村市方言 (篠崎 1966)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i> ( <i>mi?</i> )	<b><i>miroo</i></b> ( <i>mijoo</i> ) ( <i>mjuu</i> )	<i>min</i> <b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>miro</i> <b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okiru</i> ( <i>oki?</i> ) ( <i>okuru</i> )	<b><i>okiroo</i></b> ( <i>okijoo</i> ) ( <i>okjuu</i> )	<i>okin</i> <b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i>	<i>okiro</i> <b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>deru</i> <i>zuru</i> ( <i>zu?</i> )	<b><i>deroo</i></b> ( <i>zjuu</i> )	<i>den</i> <b><i>(deran)</i></b>	<i>deta</i>	<i>dero</i> <b><i>(dere)</i></b>
/e/	2	<i>ukuru</i> ( <i>uku?</i> ) ( <i>ukeru</i> )	<b><i>ukeroo</i></b> <i>ukjuu</i> ( <i>ukuu</i> )	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukero</i>

### A2.16. 長崎県旧巣原町久田方言 (野林 1966)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<i>min</i> <b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mi?</i> <b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okuru</i>	<i>okjoo</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okii</i> <b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>nero</i></b>	<i>nen</i> <b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nee</i> <b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>ukjoo</i>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukee</i> <b><i>ukere</i></b>

### A2.17. 熊本県荒尾市揚増永方言 (野林 1966)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mjuu</i> <b><i>miroo</i></b>	<i>min</i> <b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okuru</i>	<i>okjuu</i> <b><i>okiroo</i></b>	<i>okin</i> <b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i> <b><i>okitta</i></b>	<b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>nuru</i>	<i>njuu</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>ukjuu</i>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<b><i>ukere</i></b>

### A2.18. 熊本県熊本市方言 (水上 1983)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>mi?</i>	<i>miro(o)</i>	<i>miran</i> <i>min</i>	<i>mita</i>	<i>mire</i>
/i/	2	<i>oki?</i>	<i>okiro(o)</i>	<i>okiran</i> <i>okin</i>	<i>okitta</i> <i>okita</i>	<i>okire</i>
/e/	1	<i>nu?</i>	<i>nero(o)</i>	<i>neran</i> <i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i> <i>nere</i>
/e/	2	<i>nagu?</i>	<i>nagero(o)</i> <i>nagjoo</i>	<i>nagen</i>	<i>nageta</i>	<i>nagere</i> <i>nage(e)</i>

### A2.19. 熊本県苓北町方言 (黒木 2019)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	○	○	✗	○
/i/	2	<i>okiru</i>	○	○	✗	○
/e/	1	<i>nuru</i>	✗	✗	✗	✗
/e/	2	<i>oruru</i>	✗	✗	✗	✗

### A2.20. 熊本県旧河浦町今富方言 (松丸 2002a, b)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>kiru</i>	<i>kjuu</i> <i>kiroo</i>	<i>kin</i> <i>kiran</i>	<i>kita</i>	<i>kiro</i> <i>kire</i>
/i/	2	<i>okiru</i> <i>okuru</i>	<i>okjuu</i> <i>okiroo</i>	<i>okin</i> <i>okiran</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i> <i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>njuu</i> <i>nero</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i>
/e/	2	<i>mazeru</i> <i>mazuru</i>	<i>mazjuu</i> <i>mazeroo</i>	<i>mazen</i>	<i>mazeta</i>	<i>mazero</i>

A2.21. 大分県豊後高田市大力方言 (大西 1996a)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mijo</i>
/i/	2	<i>okuru</i>	<i>okjuu</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okijo</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nejo</i>
/e/	2	<i>akuru</i>	<i>akjuu</i>	<i>aken</i>	<i>aketa</i>	<i>akee</i>

A2.22. 大分県国東方言 (栗林 2009)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b> <i>mijoo</i>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b> <i>mijo</i> <i>miro</i>
/i/	2	<i>okiru</i> <i>okuru</i> <i>oku?</i>	<i>okjoo</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okii</i> <i>okiro</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b> <i>nejoo</i>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<b><i>nere</i></b> <i>nejo</i> <i>nero</i>
/e/	2	<i>ukeru</i> <i>ukuru</i> <i>uku?</i>	<i>ukjoo</i>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukii</i> <i>ukero</i>

A2.23. 大分県大分市元町方言 (糸井 1983)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	存在しない				
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>okjuu</i>	<i>oken</i>	<i>oketa</i>	<i>okii</i>

A2.24. 大分県大分市古国府方言 (糸井 1991)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	存在しない				
/e/	1	<i>deru</i>	<b><i>deroo</i></b>	<b><i>deran</i></b>	<i>deta</i>	<b><i>dere</i></b>
/e/	2	<i>okuru</i>	<i>okjuu</i>	<i>oken</i>	<i>oketa</i>	<i>okii</i>

A2.25. 大分県臼杵市方言 (柳井 1980)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>suguru</i>	<i>sugjuu</i>	<i>sugin</i>	<i>sugita</i>	<i>sugii</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>kojuru</i>	<i>kojuu</i>	<i>koen</i>	<i>koeta</i>	<i>koii</i>

A2.26. 大分県旧川登村方言 (糸井 1959)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mijo</i>
/i/	2	存在しない				
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nejo</i>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>ukjuu</i>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukii</i>

A2.27. 大分県旧野津町西神野方言 (糸井 1960)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mijo</i>
/i/	2	存在しない				
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nejo</i>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>ukjuu</i>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukii</i>

A2.28. 大分県九重町方言 (糸井 1964)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mijo</i>
/i/	2	<i>okuru</i>	<i>okjuu</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okii</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nejo</i>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>ukjuu</i>	<i>oken</i>	<i>oketa</i>	<i>ukii</i>

A2.29. 大分県旧直入町長湯方言 (高年層; 野林 1991)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mjuu</i> <b><i>miroо</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mijo</i> <i>mire</i>
/i/	2	存在しない				
/e/	1	<i>neru</i>	<i>njuu</i> <b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nejo</i> <i>nere</i>
/e/	2	<i>okuru</i>	<i>okjuu</i>	<i>oken</i>	<i>oketa</i>	<i>okii</i>

A2.30. 大分県旧直入町長湯方言 (若年層; 野林 1991)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroо</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mire</i>
/i/	2	存在しない				
/e/	1	<i>deru</i>	<b><i>deroo</i></b>	<b><i>deran</i></b>	<i>deta</i>	<i>dere</i>
/e/	2	<i>okuru</i>	<i>okjuu</i>	<i>oken</i>	<i>oketa</i>	<i>okii</i>

A2.31. 宮崎県日の影町方言 (野元 1959)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mjuu</i> <b><i>miroо</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i> ( <i>mitta</i> )	<i>mijo</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okjuu</i> <b><i>okiroо</i></b>	<i>okin</i> <b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i> ( <i>okitta</i> )	<i>okii</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b> <i>njuu</i>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i> ( <i>netta</i> )	<i>nejo</i>
/e/	2	<i>niguru</i>	<i>nigjuu</i>	<i>nigen</i>	<i>nigeta</i>	<i>ukii</i>

### A2.32. 宮崎県椎葉村尾前方言（筆者データ）

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>miroo</i>	<i>miran</i> <i>min</i>	<i>mita</i>	<i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okiroo</i>	<i>okiran</i> <i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>neroо</i>	<i>neran</i> <i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nere</i>
/e/	2	<i>huturu</i>	<i>hutjuu</i>	<i>huten</i>	<i>huteta</i>	<i>hutee</i> <i>hutei</i>

### A2.33. 鹿児島県旧串木野市方言（黒木 2019）

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	○	○	✗	○
/i/	2	<i>okiru</i>	○	○	○	○
/e/	1	<i>neru</i>	○	○	✗	○
/e/	2	<i>oturu</i>	✗	✗	✗	✗

### A2.34. 鹿児島県旧市来町方言（黒木 2019）

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	○	○	○	○
/i/	2	<i>okiru</i>	○	○	○	○
/e/	1	<i>neru</i>	○	○	○	○
/e/	2	<i>oturu</i>	✗	✗	✗	✗

### A2.35. 鹿児島県旧里村方言（黒木 2019）

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	○	○	✗	○
/i/	2	<i>okiru</i>	○	○	○	○
/e/	1	<i>nuru</i>	○	○	✗	○
/e/	2	<i>oturu</i>	✗	✗	✗	✗

A2.36. 鹿児島県旧下甑村手打方言 (黒木 2019)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	○	○	✗	○
/i/	2	<i>okiru</i>	○	○	○	○
/e/	1	<i>nuru</i>	✗	✗	✗	✗
/e/	2	<i>oturu</i>	✗	✗	✗	✗

A2.37. 鹿児島県西之表市西之表方言 (上村 1959)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>miroo</i>	<i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okiroo</i>	<i>okiran</i>	<i>okitta</i>	<i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>neroо</i>	<i>neran</i>	<i>neta</i>	<i>nere</i>
		<i>nuru</i>	<i>njoo</i>	<i>nen</i>		<i>nee</i>
/e/	2	<i>ujuru</i>	<i>ujoo</i>	<i>uen</i>	<i>uetra</i>	<i>uee</i>

A2.38. 愛媛県旧明浜町方言 (野林 1970)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mjuu</i> <i>miroo</i>	<i>min</i> <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mii</i> <i>mijo</i> <i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okjuu</i> <i>okiroo</i>	<i>okin</i> <i>okiran</i>	<i>okita</i>	<i>okii</i> <i>okijo</i> <i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>n(j)uu</i> <i>neroо</i>	<i>neran</i>	<i>neta</i>	<i>nii</i> <i>nei</i> <i>nejo</i> <i>nere</i>
/e/	2	<i>ukuru</i>	<i>uk(j)uu</i> <i>ukeroо</i>	<i>uken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukii</i> <i>ukei</i> <i>ukejo</i> <i>ukere</i>

### A2.39. 愛媛県宇和島市方言 (筆者データ)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mijoo</i> * <i>miroo</i>	<i>min</i> * <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>miro</i> <i>mii</i> * <i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okojoo</i> * <i>okiroo</i>	<i>okin</i> * <i>okiran</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i> <i>okii</i> * <i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nejoo</i> * <i>neroо</i>	<i>nen</i> * <i>neran</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i> <i>nee</i> * <i>nere</i>
/e/	2	<i>akeru</i>	<i>akejoo</i> * <i>akeroо</i>	<i>aken</i> * <i>akeran</i>	<i>aketa</i>	<i>akero</i> <i>akee</i> * <i>akere</i>

### A2.40. 高知県宿毛市方言 (高年層; 松丸 2001a, b, 2007)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mijoo</i> <i>miroo</i>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>miro</i> <i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okijoo</i> <i>okiroo</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okiro</i> <i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nejoo</i> <i>neroо</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i> <i>nere</i>
/e/	2	<i>akeru</i>	<i>akejoo</i> <i>akeroо</i>	<i>aken</i>	<i>aketa</i>	<i>akero</i> <i>akere</i>

### A2.41. 高知県宿毛市方言 (中年層; 松丸 2001a, b, 2007)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>miroo</i>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okiroo</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>neroо</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nere</i>
/e/	2	<i>akeru</i>	<i>akeroо</i>	<i>aken</i>	<i>aketa</i>	<i>akere</i>

A2.42. 高知県宿毛市方言 (若年層; 松丸 2001a, b, 2007)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mijoo</i> <i>miroo</i>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>miro</i> <i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okijoo</i> <i>okiroo</i>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>okire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nejoo</i> <i>nero</i>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nero</i> <i>nere</i>
/e/	2	<i>akeru</i>	<i>akejoo</i> <i>akeroo</i>	<i>aken</i>	<i>aketa</i>	<i>akere</i>

A2.43. 高知県幡多郡方言 (浜田 1982)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>miroo</i> <i>mijoo</i>	<i>min</i> <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mijo</i> <i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okiroo</i> <i>okijoo</i>	<i>okin</i> <i>okiran</i>	<i>okita</i>	<i>okire</i>
/e/	1	<i>deru</i>	<i>deroo</i>	<i>den</i> <i>deran</i>	<i>deta</i>	<i>dejo</i> <i>dere</i>
/e/	2	<i>suteru</i>	<i>suteroo</i>	<i>suten</i> <i>suteran</i>	<i>suteta</i>	<i>sutere</i>

A2.44. 島根県出雲市平田町方言 (筆者データ)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>mii</i>	<i>mira</i>	<i>miran</i> <i>min</i>	<i>mita</i> <i>*mitta</i>	<i>mire</i> <i>mii</i>
/i/	2	<i>okii</i>	<i>okira</i>	<i>okiran</i> <i>okin</i>	<i>okita</i> <i>*okitta</i>	<i>okire</i> <i>okii</i>
/e/	1	<i>nee</i>	<i>nera</i>	<i>neran</i> <i>nen</i>	<i>neta</i> <i>*netta</i>	<i>nere</i> <i>nee</i>
/e/	2	<i>akee</i>	<i>akera</i>	<i>akeran</i> <i>aken</i>	<i>aketa</i> <i>*aketta</i>	<i>akere</i> <i>akee</i>

### A2.45. 兵庫県高砂市方言 (原 1956)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miro</i></b>	<i>min</i> <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mii</i> <b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>otiru</i>	<b><i>otiro</i></b>	<i>otin</i>	<i>otita</i>	<i>otii</i> <b><i>otire</i></b>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>nero</i></b>	<i>nen</i> <i>neran</i>	<i>neta</i>	<i>nee</i>
/e/	2	<i>kasane</i>	<b><i>kasanero</i></b>	<i>kasanen</i>	<i>kasaneta</i>	<i>kasane</i>

### A2.46. 兵庫県明石市方言 (橋 1966)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miro</i></b>	<i>min</i> <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mii</i> <b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okiru</i>	<b><i>okiro</i></b>	<i>okin</i> <i>okiran</i>	<i>okita</i>	<i>okii</i> <b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>deru</i>	<b><i>dero</i></b>	<i>deru</i> <i>deran</i>	<i>deta</i>	<i>dee</i> <b><i>dere</i></b>
/e/	2	<i>siteru</i>	<b><i>sitero</i></b>	<i>siten</i> <i>siteran</i>	<i>siteta</i>	<i>site</i> <b><i>sitere</i></b>

### A2.47. 大阪府大阪市方言 (和田 1961)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mijo(o)</i> <b><i>miro(o)</i></b>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<i>mii</i> <i>mee</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okijo(o)</i> <b><i>okiro(o)</i></b>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<i>oki</i> <i>oke</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nejo(o)</i> <b><i>nero(o)</i></b>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<i>nee</i>
/e/	2	<i>ukeru</i>	<i>ukejo(o)</i> <b><i>ukero(o)</i></b>	<i>uken</i>	<i>uketa</i>	<i>uke</i>

A2.48. 奈良県十津川村方言 (平山 1979)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mjuu</i> <i>miroo</i>	<i>min</i> <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mii</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okjuu</i> <i>okiroo</i>	<i>okin</i> <i>okiran</i>	<i>okita</i>	<i>okii</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nejoo</i> <i>neroо</i>	<i>nen</i> <i>neran</i>	<i>neta</i>	<i>nee</i>
/e/	2	<i>ukeru</i>	<i>ukjoo</i> <i>ukeroо</i>	<i>oken</i> <i>ukeran</i>	<i>uketa</i>	<i>ukee</i>

A2.49. 和歌山県田辺市方言 (平澤 1982)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miroo</i></b>	<b><i>miran</i></b>	<i>mita</i>	<i>mii</i>
/i/	2	<i>okiru</i> <i>okuru</i>	<b><i>okiroo</i></b>	<i>okin</i> <b><i>okiran</i></b>	<i>okita</i>	<i>okii</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroо</i></b>	<b><i>neran</i></b>	<i>neta</i>	<i>nee</i>
/e/	2	<i>ukeru</i> <i>ukuru</i>	<b><i>ukeroо</i></b>	<i>oken</i>	<i>uketa</i>	<i>ukee</i>

A2.50. 愛知県新城市方言 (筆者データ)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mijo</i>	<i>min</i> * <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mirin</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okijo</i>	<i>okin</i> * <i>okiran</i>	<i>okita</i>	<i>okirin</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nejo</i>	<i>nen</i> * <i>neran</i>	<i>neta</i>	<i>nerin</i>
/e/	2	<i>akeru</i>	<i>akejo</i>	<i>aken</i> * <i>akeran</i>	<i>aketa</i>	<i>akerin</i>

### A2.51. 静岡県新居町方言 (山口 1985)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mii</i> <i>miraα</i>	<i>min</i> <i>miran</i>	<i>mita</i>	<i>mio</i> <i>mjo</i> <i>mire</i>
/i/	2	<i>okiru</i>	<i>okiraa</i>	<i>okiran</i>	✗	<i>okire</i>
/e/	1	<i>deru</i>	<i>dee</i> <i>deraa</i>	<i>den</i> <i>deran</i>	<i>deta</i>	<i>deo</i> <i>djo</i> <i>dere</i>
/e/	2	<i>taberu</i>	<i>taberaa</i>	<i>taberan</i>	✗	<i>tabere</i>

### A2.52. 青森県青森市方言 (筆者データ)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>mijo</i> * <i>miro</i>	<i>mine</i>	<i>mida</i>	<i>miro</i> * <i>mire</i>
/i/	2	<i>ogiru</i>	<i>ogijo</i> * <i>ogiro</i>	<i>ogine</i>	<i>ogida</i>	<i>ogiro</i> * <i>ogire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nejo</i> * <i>nero</i>	<i>nene</i>	<i>neda</i>	<i>nero</i> * <i>nere</i>
/e/	2	<i>ageru</i>	<i>agejo</i> * <i>agero</i>	<i>agene</i>	<i>ageda</i>	<i>agero</i> * <i>agere</i>

### A2.53. 秋田県旧鳥海町方言 (松丸 2002c, d, 日高 2002)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<i>miro(o)</i>	<i>mine</i>	<i>mida</i>	<i>mire</i>
/i/	2	<i>ogiru</i>	<i>ogiro(o)</i>	<i>ogine</i>	<i>ogida</i>	<i>ogire</i>
/e/	1	<i>neru</i>	<i>nero</i>	<i>nene</i>	<i>neda</i>	<i>nere</i>
/e/	2	<i>ageru</i>	<i>agero</i>	<i>agene</i>	<i>ageda</i>	<i>agere</i>

A2.54. 山形県鶴岡市大山方言 (大西 1994)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>miro</i></b>	<i>mine</i>	<i>mida</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>ogiru</i>	<b><i>ogiro</i></b>	<i>ogine</i>	<i>ogida</i>	<b><i>ogire</i></b>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>nero</i></b>	<i>nene</i>	<i>neda</i>	<b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>ageru</i>	<b><i>agero</i></b>	<i>agenē</i>	<i>ageda</i>	<b><i>agere</i></b>

A2.55. 新潟県旧栄村方言 (加藤 1961)

語幹末母音	語幹モーラ数	非過去	意志	否定非過去	過去	命令
/i/	1	<i>miru</i>	<b><i>mirɔɔ</i></b>	<i>min</i>	<i>mita</i>	<b><i>mire</i></b>
/i/	2	<i>okiru</i>	<b><i>okirɔɔ</i></b>	<i>okin</i>	<i>okita</i>	<b><i>okire</i></b>
/e/	1	<i>neru</i>	<b><i>neroɔɔ</i></b>	<i>nen</i>	<i>neta</i>	<b><i>nere</i></b>
/e/	2	<i>akeru</i>	<b><i>akerɔɔ</i></b>	<i>aken</i>	<i>aketa</i>	<b><i>akere</i></b>

## 参照文献

- Aikhenvald, Alexandra (2002) Typological parameters for the study of clitics, with special reference to Tariana. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Word: A Cross-Linguistic Typology*, 42–78. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bauer, Laurie (1988) *Introducing Linguistic Morphology*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Bickel, Balthasar and Johanna Nichols (2007) Inflectional morphology. In: Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description III*, 169–240. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, Joan L. (2001) *Phonology and language use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- de Chene, Brent (2016) Description and explanation in morphophonology: The case of Japanese verb inflection. *Journal of East Asian Linguistics*, 25: 37–80.
- de Chene, Brent (2020) r-Epenthesis and the bigrade alternation: The role of phonological distance in the regularization of Japanese verbal inflection. *Diachronica*, 37: 178–214.
- 土居重俊 (1958) 『土佐言葉』高知: 高知市立市民図書館。
- 土居重俊 (1982) 「土佐方言について」 山本大 (編) 『高知の研究6 方言・民俗篇』 1–40. 大阪: 清文堂出版。
- 浜田和義 (1982) 「幡多方言について」 山本大 (編) 『高知の研究6 方言・民俗篇』 41–90. 大阪: 清文堂出版。
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding morphology*. London: Hodder Education.
- 服部四郎 (1950) 「付属語と付属形式」 『言語研究』 15: 1–26.
- 服部四郎 (1955) 「音韻論（一）」 『国語学』 22: 88–104.
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』 東京: 岩波書店。
- 服部敬之 (1962) 「淡路方言における一事象 一洲本市近辺における一段活用動詞の五段化傾向—」 『国文学攷』 29–32.
- 原朗 (1956) 「神戸と比較した播州高砂市方言の語法抄」 『兵庫方言』 3: 12–19.
- 原田由衣 (2006) 「長崎県対馬市豊玉方言の活用体系試論 —若年層を中心に—」 『福岡大学大学院論集』 38(1): 19–38.
- 早田輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』 福岡: 九州大学出版会。
- 日高水穂 (2002) 「秋田県由利郡鳥海町方言の談話資料と文法解説」 真田信治 (編) 『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究（1）』 49–113. 大阪: 大阪学院大学情報学部。
- 日高水穂 (2014) 「近畿地方の方言形成のダイナミズム —寄せては返す「波」の伝播—」 小林隆 (編) 『柳田方言学の現代的意義 —あいさつ表現と方言形成論—』 245–264. 東京: ひつじ書房。
- 彦坂佳宣 (1996) 「九州地方の「見ロー」「起きロー」などの言い方について —『口語法調査報告書』からの検討—」 『論究日本文学』 864: 42–53.
- 彦坂佳宣 (1999) 「九州の一・二段活用の五段化 —『口語法』からGAJへ—」 佐藤武義 (編) 『語彙・語法の新研究』 292–277. 東京: 明治書院。
- 彦坂佳宣 (2001) 「九州における活用型統合の模様とその経緯 —『方言文法全国地図』九州地域の解釈—」 『日本語科学』 9: 101–122.
- 彦坂佳宣 (2002) 「地方語史の開拓と方言地理学 —一段活用類意志形の五段化をめぐって—」 佐藤亮一・小林隆・大西拓一郎 (編) 馬瀬良雄 (監修) 『方言地理学の課題』 277–292. 東京: 明治書院。
- 彦坂佳宣 (2017) 「東北日本海側における一段活用類のラ行五段化傾向」 『立命館文学』 654: 1–15.
- 平子達也・友定賢治 (2018) 「島根県出雲市平田方言」 方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集（4）活用体系（3）』 77–86. 方言文法研究会。
- 平子達也 (2019) 「出雲方言の音韻論: 伝統方言の記述と比較方法」 第114回九州大学言語学研究会. 九州大学, 2019年8月8日。
- 広戸惇 (1961) 「鳥取・島根」遠藤嘉基 (編) 『方言学講座3 西部方言』 290–314. 東京: 東京堂。
- 平澤洋一 (1982) 「南近畿方言の文法」 『国学院大学日本文化研究所紀要』 50: 1–34.

- 平山輝男（1979）「言語島奈良県十津川方言の性格」『言語研究』76: 29–73.
- 飯豊毅一（1974）「カ変動詞の一段化—東部方言を中心として—」『ことばの研究』5: 88–111.
- 市川二美江（1956）「桑名地方語の動詞、助動詞について」『三重県方言』2: 29–34.
- 井上史雄（1968）「東北方言の子音体系」『言語研究』52: 80–98.
- 井上史雄（1979）「莊内方言におけるサ変動詞の五段化と一段化」『山形方言』15.
- 井上史雄（1994）「鶴岡方言の音韻」国立国語研究所（編）『鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査報告1—』37–79.
- 糸井寛一（1959）「大分県大野郡川登村（新野津町）」国立国語研究所（編）『日本方言の記述的研究』239–264. 東京: 明治書院.
- 糸井寛一（1960）「南豊後山村方言における動詞の活用体系」『大分大学学芸学部研究紀要 人文・社会科学B集』9: 67–94.
- 糸井寛一（1964）「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要 人文・社会科学A集』2(4): 28–54.
- 糸井寛一（1983）「大分県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学9 九州地方の方言』237–266. 東京: 国書刊行会.
- 糸井寛一（1991）「大分」九州方言学会（編）『九州方言の基礎的研究』254–262. 東京: 風間書房.
- 岩本実（1991）「佐賀県北山方言 文法 語形態」九州方言学会（編）『九州方言の基礎的研究』382–395. 東京: 風間書房.
- 陣内正敬（1981）「九州方言に見られる母音語幹動詞のラ行子音語幹化について」『九州大学言語研究室報告』2: 3–13.
- 陣内正敬（1989）「北部九州の新方言」奥村三雄（編）『九州方言の史的研究』331–347. 東京: 桜楓社.
- 上東育美（2020）「五條市方言のラ行五段化における世代差」卒業論文, 関西大学.
- 鎌田良二（1982）「兵庫県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学7 近畿地方の方言』229–252. 東京: 国書刊行会.
- 神部宏泰（1982）「島根県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学8 中国・四国地方の方言』211–238. 東京: 国書刊行会.
- 金澤直人（1984）「茨城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学5 関東地方の方言』79–100. 東京: 国書刊行会.
- 加藤正信（1958）「新潟県における東北方言的音韻と越後方言的音韻の境界地帯」『国語学』34: 12–25.
- 加藤正信（1961）「新潟」遠藤嘉基（編）『方言学講座2 東部方言』361–391. 東京: 東京堂.
- 加藤毅（1983）「岐阜県の方言」日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一（編）『講座方言学6 中部地方の方言』177–206. 東京: 国書刊行会.
- 金田一京助（1938）『国語音韻論』東京: 刀江書院.
- 慶野正次（1972）『動詞の研究』東京: 笠間書院.
- 木部暢子（編）（2016）『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』東京: 国立国語研究所.
- 岸江信介（2014）「近畿・四国地方における言語変化—動詞否定形式を例として—」小林隆（編）『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』227–244. 東京: ひつじ書房.
- 小林隆（1996）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大文学部研究年報』45: 242–266.
- 小林隆（1997）「動詞活用における一段化傾向の地理的分布」加藤正信（編）『日本語の歴史地理構造』72–86. 東京: 明治書院.
- 小林隆（2002）「日本語方言の歴史」江端義夫（編）『朝倉日本語講座10 方言』218–237. 東京: 朝倉書店.
- 小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』東京: ひつじ書房.
- 国立国語研究所（1991）『方言文法全国地図 第2集 活用編1』東京: 財務省印刷局.
- 国立国語研究所（1993）『方言文法全国地図 第3集 活用編2』東京: 財務省印刷局.
- 国立国語研究所（2020）『日本語諸方言コーパス』（バージョン 2020.3, 中納言バージョン 2.5.2）  
[https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/) (2020年11月1日確認)

- 国語調査委員会 (1906) 『口語法調査報告書』 東京: 国定教科書共同販売所.
- 小西いづみ (2011) 「出雲方言における「一段動詞のラ行五段化」に関する覚書」『論叢国語教育学』 2: 49–60.
- 小西いづみ (2017) 「中国地方における一段動詞の五段動詞化—活用体系の平準化における停滞・阻害の事例として—」 大西拓一郎 (編) 『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』 162–175. 東京: 朝倉書店.
- 楠田翔太 (2013) 「奈良方言の否定辞の特徴—北西部地域と五條・北吉野地域を比較して—」 卒業論文, 関西大学.
- 栗林セツ子 (2007) 「国東地方方言の動詞の活用タイプ」『別府大学国語国文学』 49: 43–59.
- 黒木邦彦 (2012) 「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」 丹羽一彌・品川大輔・田村建一 (編) 『用言複合体の研究—日本語はどのような膠着語か—』 104–121. 東京: 笠間書院.
- 黒木邦彦 (2015) 「形態論」 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編) 窪薙晴夫 (監修) 『甑島里方言記述文法書』 61–90. 東京: 国立国語研究所.
- 黒木邦彦 (2019) 「動詞語幹交替より紐解く九州方言のラ行五段化」 窪薙晴夫・木部暢子・高木千恵 (編) 『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』 273–289. 東京: くろしお出版.
- 李晨 (2014) 「カ変動詞「来る」の一段化活用について—方言事態の視点からの一考察—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』 14: 225–234.
- 松丸真大 (2001a) 「方言における動詞活用体系の変化過程—高知県幡多方言から見る—」修士論文, 大阪大学.
- 松丸真大 (2001b) 「ラ行五段化の語彙的拡散—高知県幡多方言の3体系比較から—」『地域言語』 13: 23–36.
- 松丸真大 (2002a) 「天草方言の動詞活用」 真田信治 (編) 『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(1)』 277–296. 大阪: 大阪学院大学情報学部.
- 松丸真大 (2002b) 「天草 活用」 真田信治 (編) 『消滅に瀕した方言文法の記録—天草方言・由利方言—』 212–249. 大阪: 大阪学院大学情報学部.
- 松丸真大 (2002c) 「由利 活用」 真田信治 (編) 『消滅に瀕した方言文法の記録—天草方言・由利方言—』 392–441. 大阪: 大阪学院大学情報学部.
- 松丸真大 (2002d) 「秋田県由利方言の用言の活用」 真田信治 (編) 『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(2)』 181–194. 大阪: 大阪学院大学情報学部.
- 松丸真大 (2007) 「高知県宿毛市方言」 方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』 127–142. 方言文法研究会.
- 松岡葵 (2021) 「福岡県柳川市方言の文法概説」 修士論文, 九州大学.
- 水上直人 (1983) 「熊本市方言の動詞・形容詞の活用」 卒業論文, 九州大学.
- 村中淑子 (2014) 「大阪・奈良の方言における否定辞について—一世代差を中心に—」『人間文化研究』 1: 3–27.
- 村内英一 (1954) 「二段動詞残存に関する調査について」『和歌山方言』 3: 15–18.
- 村内英一 (1962) 「和歌山県における二段活用動詞の残存について」『国文学攷』 27: 23–25.
- 西宮一民 (1961) 「三重・奈良・和歌山」 遠藤嘉基 (編) 『方言学講座3 西部方言』 211–237. 東京: 東京堂.
- 西宮一民 (1962) 「奈良県方言」 楠垣実 (編) 『近畿方言の総合的研究』 301–364. 東京: 三省堂.
- 西宮一民 (1982) 「奈良県の方言」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学7 近畿地方の方言』 113–140. 東京: 国書刊行会.
- 野林正路 (1966) 「動詞活用の記述」『国語学』 67: 20–46.
- 野林正路 (1969) 「平戸島方言文法の生成理論的研究」『法政大学教養部紀要』 13: 1–23.
- 野林正路 (1970) 「方言研究の新しい地平—弁証法的な記述様式の確立をめざして—」 平山輝男博士還暦記念会 (編) 『方言研究の問題点』 319–355. 東京: 明治書院.
- 野林正路 (1991) 「大分県長湯方言 文法 語形態」 九州方言学会 (編) 『九州方言の基礎的研究』 322–332. 東京: 風間書房.
- 野元菊雄 (1959) 「宮崎県西臼杵郡日の影町」 国立国語研究所 (編) 『日本方言の記述的研究』 265–290. 東京: 明治書院.
- 中條修 (1983) 「静岡県の方言」 日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一 (編) 『講座方言学6 中部地方の方言』 141–176. 東京: 国書刊行会.

- 小川真由 (2006) 「三重県四日市方言における否定の動詞接尾辞 一否定の動詞接尾辞と接続する動詞との形態的関係一」『名古屋・方言研究会会報』23: 13–28.
- 岡田莊之輔・榎垣実 (1962) 「兵庫県方言」 榎垣実 (編) 『近畿方言の総合的研究』 495–558. 東京: 三省堂.
- 岡野信子 (1991) 「福岡」 九州方言学会 (編) 『九州方言の基礎的研究』 200–209. 東京: 風間書房.
- 奥村三雄 (1968) 「所謂二段活用の一段化について 一方言的事実から史的考察へ—」 近代語学会 (編) 『近代語研究 第二集』 217–234. 東京: 武蔵野書院.
- 奥村三雄 (1975) 「近畿の方言」 大石初太郎・上村幸雄 (編) 『方言と標準語 一日本語方言学概説—』 264–294. 東京: 筑摩書房.
- 奥村三雄 (1976) 『岐阜県方言の研究』 岐阜: 大衆書房.
- 大西拓一郎 (1994) 「鶴岡市大山方言の用言の活用」 国立国語研究所 (編) 『鶴岡方言の記述的研究 —第3次鶴岡調査 報告1—』 141–235.
- 大西拓一郎 (1995) 「岩手県種市町平内方言の用言の活用」 『研究報告集』 16: 57–98.
- 大西拓一郎 (1995) 『日本語方言活用の通時的研究序説』 東京: 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室.
- 大西拓一郎 (1996a) 「大分県豊後高田市大力方言の動詞の活用」 平山輝男博士米寿記念会 (編) 『日本語研究諸領域の視点 上』 128–142. 東京: 明治書院.
- 大西拓一郎 (1996b) 「活用の類と統合 一全国方言の活用の通時的対応のモデルー」 『言語学林 1995–1996』 255–272. 東京: 三省堂.
- 大西拓一郎 (1998) 「動詞活用の対応と比較」 『言語』 27(7): 49–56.
- 大西拓一郎 (2004) 「動詞「する」の東北方言における分布と解釈」 『国語学研究』 43: 52–62.
- 大西拓一郎 (編) (2016) 『新日本言語地図 一分布図で見渡す方言の世界—』 東京: 朝倉書店.
- 大西拓一郎 (2017) 「方言の動詞否定辞過去形に見る日本語の重層性」 『日本語学』 36(2): 14–24.
- 大槻知世 (2018) 「青森県津軽方言の情報の表示をめぐって」 未公開博士論文, 東京大学.
- Phillips, Betty S. (2001) Lexical diffusion, lexical frequency, and lexical analysis. In: Joan Bybee and Paul Hopper (eds.) *Frequency and the emergence of linguistic structure*, 123–136. Amsterdam: Benjamins.
- 迫野虔徳 (1998) 「九州方言の動詞の活用」 『語文研究』 85: 1–11.
- 迫野虔徳 (2012) 『方言史と日本語史』 大阪: 清文堂出版.
- 真田信治 (1989) 「和歌山県中部における動詞二段活用形の動態 一コニュニティ差・性差—」 奥村三雄教授退官記念論文集刊行会 (編) 『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』 367–384. 東京: 桜楓社
- 真田信治・宮治弘明・井上文子 (1995) 「紀伊半島における方言の動態」 徳川宗賢・真田信治 (編) 『関西方言の社会言語学』 81–102. 東京: 世界思想社.
- 佐々木冠 (2016) 「現代日本語における未然形」 善功雄・佐藤琢三・中俣尚己 (編) 『日本語文法研究のフロンティア』 21–42. 東京: くろしお出版.
- 佐々木冠 (2019) 「ラ行五段化の多様性」 岸本秀樹・影山太郎 (編) 『レキシコン研究の新たなアプローチ』 201–228. 東京: くろしお出版.
- 下地理則 (2016) 「音素論と形態音韻論の中間報告」 下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日 (編) 『尾前調査班中間報告書 一宮崎県椎葉村尾前方言 簡易語彙集と文法概説—』 7–14. 東京: 国立国語研究所.
- 下地理則・坂井美日・小川晋史 (2016) 「はじめに」 下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日 (編) 『尾前調査班中間報告書 一宮崎県椎葉村尾前方言 簡易語彙集と文法概説—』 1–6. 東京: 国立国語研究所.
- 篠崎久躬 (1966) 「長崎県大村市地方方言動詞の活用形式について」 『解釈: 国語・国文』 12(1): 9–13.
- 杉生沙樹 (2019) 「泉州地域における一段動詞のラ行五段化について」 卒業論文, 関西大学.
- 杉山正世 (1954) 「渭南方言区の設定について」 『愛媛国文研究』 3: 113–124.
- 杉山正世 (1964) 「愛媛県の方言区画」 日本方言研究会 (編) 『日本の方言区画』 446–458. 東京: 東京堂出版.
- 橋正一 (1937) 「「着らん」と「着やん」 —一段動詞の四段化傾向—」 『国語研究』 5(1): 1–9.
- 橋幸男 (1966) 「播州方言の動詞」 『研究集録』 1.
- 高橋顯志 (1982) 「淡路島の方言」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 7 近畿地方の方言』 253–276. 東京: 国書刊行会.

- 高見あづさ (2012) 「愛知県小原方言の体系的文法記述」修士論文, 東京外国語大学.
- 高園千賀子 (2000) 「佐賀県東部方言における動詞の活用」卒業論文, 九州大学.
- 高山百合子 (2015) 「佐賀方言における用言の「語幹化」」『人間文化研究所年報』26:169–177.
- 田附敏尚 (2004) 「青森県五所川原市方言の一段・ラ行五段動詞の活用」『言語科学論集』8: 25–35.
- 鳥谷善史 (2015) 「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐって」『国立国語研究所論集』9: 159–176.
- 東条操 (1943) 「中央語と方言 —形容詞, 動詞の活用の比較など—」国語教育学会(編)『現代語法の諸相』1–24. 東京: 岩波書店.
- 塚本明廣 (1978) 「長崎市方言の動詞活用表」『文学研究』75: 39–55.
- 模垣実 (1936) 「「へん」と「やん」—和歌山方言の否定の助動詞—」『国語研究』4(7): 1–15.
- 模垣実 (1962) 「近畿方言総説」模垣実(編)『近畿方言の総合的研究』1–59. 東京: 三省堂.
- 模垣実 (1964) 「方言区画論小史」日本方言研究会(編)『日本の方言区画』23–45. 東京: 東京堂出版.
- 上村幸雄 (1959) 「鹿児島県西之表市西之表」国立国語研究所(編)『日本方言の記述的研究』343–364. 東京: 明治書院.
- 和田実 (1961) 「大阪 —青年層の大坂弁の移りゆき—」遠藤嘉基(編)『方言学講座3 西部方言』151–181. 東京: 東京堂.
- 若菜京香 (1990) 「福岡県筑後市(旧八女郡)における動詞の活用 —母音語幹動詞のラ行五段化の傾向—」卒業論文, 九州大学.
- 山田敏弘 (2012) 「岐阜県方言における動詞の活用について」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』60(2): 1–11.
- 山口幸洋 (1985) 「方言体系」新居町史編さん委員会(編)『新居町史 第3巻 風土編』655–946. 静岡: 新居町.
- 山本俊治 (1962) 「大阪府方言」模垣実(編)『近畿方言の総合的研究』421–494. 東京: 三省堂.
- 山名邦男 (1961) 「兵庫」遠藤嘉基(編)『方言学講座3 西部方言』182–210. 東京: 東京堂.
- 山岡華菜子 (2016) 「京阪地域における一段動詞の五段化傾向とアクセント —淡路島とその周辺地域を中心に—」『国文学研究』139–125.
- 山岡華菜子 (2017) 「京阪式アクセント地域におけるアクセント変化の研究」博士論文, 早稲田大学.
- 山崎直哉 (2017) 「大阪における動詞否定表現「～ヤン」の受容について」卒業論文, 関西大学.
- 矢野文博 (1956) 「打消の助動詞の一系譜 —ヤンについて—」『三重大学学芸学部研究紀要』16: 72–87.
- 矢野文博 (1962) 「打消の助動詞の一系譜 —ヤンについて—」『三重県方言』14: 19–29.
- 柳井ふさの (1980) 「大分県臼杵市方言の動詞及び形容詞の活用」卒業論文, 九州大学.
- 與田左門 (1938) 「紀北方言一般活用動詞の未然形」『方言』8(2): 195–199.
- 吉田則夫 (1982) 「高知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一(編)『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』425–449. 東京: 国書刊行会.
- 吉町義雄 (1938a) 「九州方言二段活用動詞分布相」『方言』8(2): 137–167.
- 吉町義雄 (1938b) 「九州方言四段・変格活用動詞分布相」『文学研究』23: 51–92.
- 吉町義雄 (1941) 「九州方言二段活用動詞分布相補遺」『方言研究』3: 69–80.
- 吉町義雄 (1952) 「九州語用言活用分布相要領並補遺」『国語学』8: 56–66.
- Zwickly, Arnold, and Geoffrey Pullum (1983) Cliticization vs. Inflection: English N'T. *Language* 59(3): 509–513.

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、以下に記す多くの方々に大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

本論文の調査にご協力くださった皆さまは、私の調査にお付き合いくださいり、方言を教えてくださいました。皆さまのお陰で本論文はできております。加えて、愛媛県大洲市の皆さまも調査にご協力くださいり、方言を教えてくださいました。大洲市での協力者探しから調査場所の提供まで、大洲市立博物館の皆さまに大変お世話になりました。大洲市の皆さまが教えてくださった内容は本論文に掲載されていませんが、研究発表などで公表しております。

研究室の先生方は、言語学をはじめとして多くのことをご教示くださいました。指導教員である下地理則先生は、学部の頃から丁寧に手厚く指導してくださいました。それに加えて、調査や学内外における研究発表の機会を、数多く作ってくださいました。研究室の副指導教員である、久保智之先生、上山あゆみ先生、太田真理先生は、授業での質問から研究室での雑談にいたるまで、様々なことをご指導くださいました。

研究室外の先生方にもお世話になりました。学会や研究会などで一緒に議論してくださったり、先行研究を提供してくださったり、対面調査やオンライン調査ができる環境を作ってくださったりと、多くの場面で助けてくださいました。

研究室の皆さんには、所属ゼミを問わず、日々多くの場面で助けてくださいました。先輩の皆さんには、私が困ったときに、いつも適切なアドバイスをくださいました。同期のお二人は、頼りない私のことを、いつも温かく見守ってくださいました。後輩の皆さんには、いつも鋭い質問を投げかけ、一緒に考えてくださいました。

以上のように、非常に多くの方々のお陰で、本論文を執筆することができました。深く感謝いたします。本当にありがとうございました。ただし、本論文における内容や誤謬については、全て筆者の責任によるものです。

最後に、勝手気ままに生きている私を、何も言わずにいつも支えてくれる家族に、心から感謝いたします。